
できん相談 笑えん冗談

56

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

でじん相談 笑えん冗談

【Nコード】

N3484I

【作者名】

56

【あらすじ】

人生の華々しい門出の日、たまたま車で事故った相手はヤクザだった……。BL小説、ヤクザものです。ボーイズラブが苦手な方、15歳未満の方、義務教育中の方はご遠慮下さい。

腐れ縁はじまる（前書き）

ボーイズラブが苦手な方、15歳未満の方、義務教育中の方はご遠慮下さい。また、いかなる中傷・批判も受けかねますのでご了承下さい。

腐れ縁はじまる

こんな時に限って、一番近い高速の乗り口に出るまでに車で一時間半もかかった。

拳句の果てに電光掲示板の渋滞情報には「宝塚トンネル25キロ」と言う文字が、誇らしげに表示されている。さすが連休初日だ。

舌打ち一つ、ドアポケットに片手を伸ばし、助手席のシートにアトラスを乱暴に広げた。

ここから一キロ程走れば、大きな国道がある。

先にこの辺りで飯にしとくか――。

鳴砂なりさがダツシユボードをチラ見すると、デジタル時計はもう夜の七時を示している。国道に出ればレストランの一つや二つはあるだろう。夕飯を食べてから高速に乗り、一気に北上。今夜中には名古屋に入る予定だ。

高速乗り口右折の表示を素通りし、助手席に置いた地図を時折覗き込みながら知らない道を突き進むと、小さな交差点に出た。

ホンダのディーラー、ファミマ、ガソスタ……あれ、おかしい。違うな……ここ。どこで間違ったんや――。

通り過ぎようとする道路標示をフロントガラス越しに覗き上げる。ん？ 171号線、500m先左折やと――？
道を間違えたことに気付き、慌てて地図を引き寄せる。

前をチラチラ伺いながら片手でハンドルを握り、もう片方の手でページをめくった。

ああ、わかった。ここ真っ直ぐか――。

やっと現在地を把握し、ホッとして顔を上げる。――と、視界の

上を通り過ぎる赤い警告灯。

真横から眩しく照らす二つのハイビームにハツとする。

クラクション。

左いっぱいに切るハンドル。

体重をかけて踏み込む右足。

ブレーキ音。

それるライト。

回転する車体。

一瞬身体が浮いてから、ドツと前のめりに打ち付けられる。

車内の空気が横滑り。

地図と後部座席に乘せていたスーツケースが前方に激しくポルターガイスト。

衝撃。

グシャリ。

鉄板が潰れる鈍い重低音が外で響く。

完全に車体が停止すると、激震の余韻を体内に残したままハンドルを抱え込み、身体から外力が抜けるのを待つ。

交感神経、最優位。頻脈をやかましく打ち鳴らす。

呼吸を整えながら衝撃音がした方を振り返ると、歩道に乗り上げる鋭く黒光りした車が一台、バンパーに電柱を食い込ませ、そこだけ空間をゆがめている。

やってもうた――。

よりにもよって、相手は新型のレクサス。

畜生。あんなええ車に乗りやがって――。

一つ間をおき、向こうの運転席のドアがゆっくりと開いた。

ブサイクに決まってる。ほんでもって、短足のデブや。性格も悪

い。金持ちはそうやと決まっとなねん――。

地面に踏み出た革靴に向かって、ブサイク、デブ、性悪と心の中で復唱するも、願い叶わず。車から出てきたのは中肉中背、スラリとスーツを着こなす彫りの深いイケメンだった。

二物を与えた天に反感の溜め息をひとつ漏らし、鳴砂はドアロックを解除した。

こんな日に限って、全然ついてへん――。

外に出て自分の車のフロントに回り込むと、可愛い可愛いシボレーカマロの純白の車体には傷一つ無い。どうやら鳴砂の車を避けようとした相手の車だけが歩道に突っ込み、傷物になったらしい。

スーツの男は両手をポケットに突っ込んだまま上半身をかがめ、コンクリートをめり込ませたバンパーを覗き込んでいる。左のフロントライトが派手に割れて、アスファルトの上に散乱していた。

「おい！ そっち赤やったやろが」

迫力のあるドスの利いた声。鋭い視線。

悪いことに、性悪という予想だけが当たっていた。

歳は鳴砂とそう変わらないだろう。スーツは着ているがノーネクタイでワインレッドのYシャツ。

あかん。こいつ普通のサラリーマンやない。だいたい普通のサラリーマンは新型のレクサスなんぞに乗らん――。

急に冷たい血液が背中を逆流し始めた。

「すみません。俺、余所見してました」

「せやろがい！ どこ見て走っとんじゃボケ。どないしてくれんねん、これ」

「あ、とりあえず警察呼びます」

運転席を開けて助手席の足元に落ちたカバンを手繰り寄せ、中か

ら携帯を取り出した。

119、いや110か？ どっちや。泥棒は110番、119番は……救急やったか？ ヤクザ相手に事故った場合はどっちにかけたらええねん——。

混乱した頭でボタンを押そうとすると、横から手が伸びてきて携帯を奪い取っていく。

「こっちにも事情があつてな。警察は呼ばんでええから、俺に付いて来てくれ。あの車、実は俺のと違うねん」

そう言つて男は、親指で後方を指す。

「ああ、一応これも与つとくわな。逃げられたらかなわんし」

男は運転席に置いてあつた鳴砂のカバンをかつさらつて、レクサスに乗り込み早々とエンジンをかける。『逃げる』その手があつたかと思つた時にはもう、フロントが潰れた黒光りの高級車がバックを始めていた。

無傷の愛車で、片目が潰れたレクサスのすぐ後ろを走行する。

男の運転はひどいものだった。エンジンブレーキとか情走^{だそう}とか、そういうものが全く無い。恐らく常にアクセルかブレーキを踏んでいる。

フロントに加えて後ろのバンパーも凹ましたろかと思つていたら車は街中を抜け、小さな工場が並ぶ車幅の狭い道に入つていった。

じきにアスファルトが砂利道に変わり、広い駐車場を構える二階建ての小さな事務所に着いた。

エンジンを切る前にデジタル時計に眼をやる。

やばい……。もうこんな時間や。どんどん予定が狂てく。早く大阪を離れんと——。

レクサスの隣に車を止めて降りると、男はしばらく車内で俯いている。イラつきながら近付いて窓から覗き込むと、鳴砂がカバンに入れていたゲームの攻略本をしげしげと閲覧していた。助手席のシ

ートには、見覚えのある財布とその中身、携帯や音楽プレイヤーまでが散乱していた。

「歩はモンハンやるんか？」
あゆむ

何故か下の名前で呼ばれている事はともかく、二十三にもなつてモンスターを狩る異次元のゲームに夢中な自分がオタクのようで恥ずかしかった。

やっと車から降りてきた男に適当に頷くと、男は「俺もやねん」と少年のように笑った。

男は車に凭れ掛かり内ポケットから煙草を出して吸い付ける。「ええか——」と改まって話し始めた。

「今から会っくんは、この車の持ち主で俺の叔父貴。九鬼つちゆう、名前も性格も怖いオッサンや。」
くき

そいつの前で、ちゃんと怯まんと、わたくし鳴砂 歩めが信号無視をしたせいで、タツノさんの乗っていた車をボコボコにしてみました。申し訳ありませんと、こう言えよ。間違おても、タツノさんが一般道で98キロ走行しておりましたなんて事、言ったらあかんのやぞ。後々大阪湾のお魚と仲良うなりたないやろ？

オッサンに何言われても、すみませんでしたと頭を下げる。喋るのが面倒臭くて、先に手が出るような男やから用心せなあかん。

まあそんな不安そうな顔せんでも、俺が最大限、歩のことフオロしたるわ」

男はタツノという名前らしい。免許証を見たのか、鳴砂のフルネームを知っている。

タツノは衝撃的な事実を、涼しい顔して煙と一緒にポンポンと吐く。

「98キロ……。高速でも捕まりますね」

「やかましい。三桁の大台には乗っとらへん」

ビルの入り口には小さなシルバーのプレートに『墨元興業』と彫られている。

暴力団墨元組とはつきり彫ったらええねん……。諦めにも似た苦笑いが込められる。

重たいガラスの扉を開けて中に入り、靴を脱いでスリッパに履き替えると、タツノが「こつちや」と手招きした。

タツノに続いて一番手前の部屋に入る。

中は事務所のようになっていて、デスクの前に座っていた電話番号らしい若い男が勢いよく立ち上がり「おかえりなさい」と浅く頭を下げた。アロハシャツにジャージの下、スキンヘッドで便所サンダルを履いている。絵に描いた様なヤクザの下っ端だ。

「おお」と返したタツノは、肩で空気を切りながらパーテーションの向こうへ歩く。

「叔父貴。ただいま」

大層な黒革の応接セット。50インチはあろうかという大きな薄型テレビの正面を陣取り、背凭れに両肘をかけて煙草を吸っていた男が、ゆっくりとこちらを見上げる。

「なんやタツノ。取立て行ったと違うんか……えらい早いやないか」

大理石で出来た灰皿で煙草をねじ消しながら、目を細める。どうやらこいつが九鬼という男だ。

オッサンと言うからには四五十年代の中年男を想像していたが、見る限り三十代前半。同じスーツでもタツノの既製品の雰囲気ではない、おそらくオーダースーツ。ダークグレーのピンストライプの下に、黒のVシャツ、シルバーに品良く光るネクタイ。身体はタツノよりもひと回り大きく、煙草を持つ右手の甲に袖口の中まで続く大きな傷跡が這っている。

「実はな、叔父貴の車が事故におおてしもてん」

「なんやと？」

九鬼の顔が歪む。そのへんのチンピラとは違う、プロの威圧感を含んだ視線に鳴砂の気持ちは怯んだ。

「あつ、今回は俺のせいと違うで！」

はい、こいつ。ちゃんと現行犯逮捕してきた。鳴砂なりさあゆむ歩君。歳は俺と同じで、趣味も同じ。さっき友達になったところや、優しいしたつてや」

タツノに背中を押され、ヤクザの前に歩み出る。

九鬼は上半身を引いて、眉間に深く皺を刻んだまま鳴砂を上から下まで一往復睨んだ。

「す、すみません。あの、修理代はもちろん、そちらの言い値で全額払わしてもらいます」

幸い今の鳴砂には、それぐらいの金はある。

深く頭を下げると、九鬼は鼻で笑う。

「ほお。若いのにえらい太っ腹やないか。まあ座れや」

煙草を吸いつけながら、顎でソファーを指す。

四人掛けの黒革のソファーに腰を下ろした。

タツノが鳴砂の隣に座ろうとすると九鬼が低く言う。「おいタツノ。何お前まで座つとんねん。さつさと茶でも入れて来いや」

「兄ちゃん、どの辺に住んどるんや？」

タツノが入れた白湯のような茶を一口すすって九鬼が鳴砂に聞く。

「あの……今俺、こっちには家無いんです。連休明けから東京の支社に転勤で、明日には東京に出て社宅に入る予定なんです」

その人生の門出を祝した素晴らしい一日が、近日まれに見る厄日と重なってしまい、あろう事がこんなところでヤクザと顔につき合わされている。

「なんや、ほんで車にでつかいスーツケースなんか積んどつたんかいな」と、盆を回しながらタツノが隣に座った。

「だから、出来れば支払いは振込みとかにしてくれませんか？出来るだけ早く向こうに慣れたいから、絶対今日中には大阪を出たいんです」

九鬼は紫煙をくゆらせながら、眼を細める。

「鳴砂君いつたか。悪いけどな、それはできん相談や。」

あのレクサスが無いと、俺はどこにも行けん。それに代車があつても誰が運転するんじゃ」

「えっ？」

「そこにおける電話番号の男は免許持つてへんし、そもそも今うちの若いもんは奉公に出してるから人手が足りとらへんのや。俺はあの車以外は運転しとおない。だいたい若頭補佐の俺が、代車なんか運転しとつたらおかしいやろ」

タツノがおるやろがい——。とは口に出さずに、隣を振り向く。

「あのなあ鳴砂君。そいつは今、免停中なんや。まさか君、この俺に免停中の運転手を付けさせて事故死させるつもりかい？」

九鬼は開いた足に両手を垂らし、鳴砂を静かに睨み上げた。

「免停……？」

驚くような事実を突きつけられ、九鬼からのきつい目線をそのまま隣のタツノに横流しする。

「いや、ちやうんねん……免取りにならんかったんが奇跡やで。そら大きな事故やったからなあ、俺自分が生きてることが不思議やねん。ってか……俺ようあるんや、そういう奇跡みたいなん。ほんまに神様がおるような気が——」

何がどう違うのか、タツノは何故か誇らしげに鳴砂の肩をポンポンと叩く。

「じゃあしい！人の車を廃車にしといて何言つてくさるんじゃ

ボケ。神の野郎があるんやったらこの世のためや思て、一番にお前みたいなんが生まれるんを阻止せんかい」

九鬼の怒声が飛ぶ。神に野郎と付けた男をはじめて見た。

「……ほんなら俺、どうしたらええんですかね」

「せやな……」と、九鬼は足を組んでしばらく思案する。

「とりあえず俺の車を修理に出して見積もり取って、話はそれからや。今日はもう馴染みの車屋も閉まっとるし、明日修理に出すわ。だから今晚は大阪に居てもらわな困る。」

せや、タツノ。チヒロの部屋は空いとるんとちがうんか？ お前、今一緒に住んでんねやろ？ あの部屋使わせたれや」

「あの。俺、東京で仕事が……」

「ああ、それええなあ。チヒロに連絡してみよ」

門出を祝した夜。第一日目。

本人の意志に反して、鳴砂はめでたくヤクザの恋人の元住まいで一晩を過ごす事に決定した。

腐れ縁はじまる（後書き）

一応始めてみました新連載。と言っても、10月中に終わらせますので短いです。最初は全五話の予定でしたが、いつものごとく長くなって初めから二話に割る作業に打って出ましたので、全何話になるかは未定です（ωV―vω）ペコ

予告どおり息抜きの連載ですので、私の楽な設定「大阪弁（汚い方寄り）」で書かせて頂きます。それでも出来るだけ分かりにくい言葉は省いたつもりなのですが、何しろ毎日使っているものでそれが他府県の方から見ても分かり難いのか想像が付きません（つA）エー「え？ これどういう意味？」ってな言葉があれば、遠慮なく聞いて下さい。ただの誤字だったりします（笑）

本当は「金持ち」を「かねも」と普段使っている通りに書きたかったのですが、迷った挙句前者に席を譲りました。「金持ち」は「かねも」、「かしこい人」は「かしこ」と言うたりします。

どうも、自分が大阪弁を書くとき野暮ったくなっていけません。ただ書くのはいつになく楽チンでした。

あと初めて一人称以外に挑戦しますので、抽象的な書き回しや、心理描写もあえて少なくなります。時折、優しい読者様に褒めて頂ける、私の小説の数少ないプラス要素な気がします。今回はこれを削って頑張ってみます。

関西弁苦手な方、読み辛くて無理な方、申し訳ありませんm（「

―）m 短い連載なのでスルーして下さい構いません。次の連載でお会いできることを心から願っております！ア（・A・

、）メン+

ここで一つ雑談。

人様のブログにお邪魔するようになってから「シヨタ」とか「シ

ヨタコン」なんて言葉をよく眼にします。

皆さん、この意味ご存知でしたか？

私、知ってましたよ♪「シヨタ」〃「シヨタイモチ（所帯持ち）」

Σ（；。Dノ）！！

んっ？ なぬ？ え、違うの！！??

本当は「シヨタ」〃「正太郎コンプレックス（少年を対象に抱く愛情・執着）」だそうです。

今年下半期一番の驚き……。せやったら「シヨウタ」にせんかい。

（〃D〃；）

どうりで。この世は所帯持ちが好きな人々で溢れかえってるんやなあと思っております。畜生。

ではではm（――）m

てつちりまでの道のり

鳴砂はめでたく、ヤクザの恋人の元住まいで一晩を過ごす事に決定した。

そうと決まれば行動が早いのがヤクザ。

三人で事務所を出て駐車場へ向かう。どうやらチヒロというタツノの女を仕事場まで迎いにいき、鳴砂が今晚泊まる部屋の鍵を貰うらしい。

もちろん迎いに行くのは鳴砂のシボレー。運転するのも鳴砂だ。一度タツノが運転手に名乗りを挙げたが、丁重に断った。レクサス以上にボコボコになる。

「おい。なんで高速でぶつけた訳でもないのに、あんなに凹むんや」
駐車場に止めてある自分の車の哀れな姿を眼にして、九鬼が足を止め啞然とした。

「アホやなあ、叔父貴。暗いからそう見えるだけやん」
「すごいな、こいつ……自分がぶつけた車の持ち主にアホと言いつた――」。

鳴砂が愛車にキーを向けてドアロックを解除する。

「ほお、カマロか。若いのに左ハンドルとは、えらいええ車乗ってるやないか。事故車の隣に停めてあるんは嫌味か？」

九鬼は作り笑いでそう言ってタイヤをひと蹴り、カマロの助手席を開けた。運転席の後ろにタツノが乗り込む。

鳴砂は深く溜め息を吐いてから運転席のドアを開けた。

工場地帯を抜けて国道に出る。そのまま道なりに二車線の道路を

二キロほど走り、街中に入ってからタツノの道案内で高架横のわき道に入った。

細い裏路地を少し走ってからタツノに言われ、汚い四階建てのビルの裏で車を停める。

「今日は早退するよう俺が言つたと店長に伝えろ」と九鬼。それに頷いてタツノが車を降り、ビルの裏口から中に入って行った。

ダッシュボードの時計は九時四十五分。予定なら、もうとつくに大阪を脱出している。

首を伸ばして車の中からビルの表の方を覗くと、細い道沿いに沢山のカラフルなネオンが乱反射していた。風俗街だ。

「ここ……風俗店ですか？」

「ああそつや。うちの組が持つてる店で、俺が経営を任されてる」

ビルの前にある大きな看板には、遠目に30分、45分と細かい時間と料金、顔写真がクルクルと回っている。

タツノの女はソープ嬢か何か――。

しばらくすると、また裏口が開いてタツノが女を連れて現れた。

――と思つたら、女ではない。確かに女みたいな顔をしているが、あれは……少年だ。背も低く、まだ高校生くらいの若さに見える。

慌てて表の看板をもう一度首を伸ばして覗き込むと、回っている写真の顔はみんな髪が短い。眼の錯覚か、全部の顔が男に見えてゾツとした。

少年は鳴砂と眼が合うと、不思議そうな表情で軽く会釈する。

「おお、チヒロ。悪いな、仕事中に抜けさせて」

後部座席に乗り込んだ少年に九鬼が言つと、高い小さな声で「いえ……」と言つた。やはりこの少年がチヒロで間違い無いらしい。

まあ、男にもある名前やもん――。可哀想に九鬼の姿を見て緊張している。

またタツノの案内で走り始める。

チヒロが住んでいたというアパートは、さっきの店から十分ほどで着いた。

二階建てのアパートで外壁は白一色、チラリと覗くオートロックのエントランスは割りと綺麗だ。

入り口に『コーポ ホワイトハウス』と笑えん冗談が書いてあるのはご愛嬌。

「ほな、俺とタツノは車で待つてるから、チヒロに鍵もろて案内してもらえ」

九鬼の言葉に従い、チヒロと二人で車を降りた。

オートロックの暗証番号と開け方をチヒロに教えてもらい、アパートの中に入る。

「部屋は二階の一番奥です」と、少年は蚊の鳴くような声で言う。明るいエントランスの蛍光灯の下で見ると少年の顔は青白く、あまり健康そうには見えない。

どうしてあんな店で働いているのか、どうしてヤクザと一緒に暮らしているのか。聞きたいことは山ほどあったが、聞いたところで絶対に後味の良い話ではないだろうと判断してやめておいた。好き好んで、そんな生活を選ぶ者はいない。

チヒロに渡された鍵でドアを開けて中に入る。玄関上のブレーカーを上げて電気をつけると、そこは予想以上に綺麗な1LDKだった。部屋に家具や物がほとんど無いからそう見えるのかもしれない。シングルのパイプベッドが一つ。布団は無い。テレビも冷蔵庫も無い。床には薄い絨毯が敷かれてあって、学校の教科書らしき本が並ぶ小さなスチールラックだけが唯一の家具として置かれていた。

「チヒロ君は、高校生なんか？」

数学A数学？という本のタイトルを見付けて考えた結果、これなら聞いても大丈夫だろうと判断した質問を、さりげなくぶつけてみた。

「あ、いえ……中卒です」

畜生。ほんなら何で高校の教科書を部屋に置いとんねん――。

うまくいけば高校生活の話で会話が弾むかと予想したが、あえなく撃沈。少年は余計に気まずそうな顔をする。

「あ、あの……」

初めてチヒロが鳴砂に話しかけてきた。

「何？」

「あ、やっぱ……いいです」

「なんなん、言いいや。何？」

せつかく手に入れた会話の糸口を逃すわけにはいかない。

「あの……歩さんは、あの。タツノさんとは、その、どういう御関係で……」

恐る恐る喋る言葉に、この少年が標準語を話すのだと初めて気が付いた。

「タツノから聞いてないん？」

ここぞとばかりに呼び捨てにしてやった。

チヒロは戸惑いがちに小さく頷く。

鳴砂は、それから十五分かけてタツノと出会った経緯、ここに住むことになった訳を少年に詳しく説明した。もとい愚痴った。

フロントに電柱がくい込んだレクサス、無傷のカマロ、修理代の弁償に、明日には東京の社宅にいるはずだった自分。今となつては信号無視をした自分よりも、免停のくせに車を運転していたタツノに非があるように思えて仕方ない。

チヒロは鳴砂の話を、さっきとは打って変わった明るい表情で面

白そうに笑いながら聞いている。

「なあ、ほんま笑い事違うんやで、チヒロ君。俺そのうち、修理代や言つて全財産取られて大阪湾に沈められるねん」

「ご、ごめんなさい。僕、そんなつもりで笑つてたんじゃ……タツノさんがゲーム好きだなんて、初めて知つたから」

「一緒に住んどつて、知らんかつたんか？」

「はい。タツノさんあんまり家に帰つて来ないし。家に居る時も、殆んど喋らないから……」

チヒロは寂しそうに微笑んだ。

「ふ——ん、そうなんか。意外やな」

あの調子の良さそうな浮かれヤクザが、家では無口だという。

すっかり機嫌の良くなつた少年と一緒に階段を降りる。チヒロは少しはにかんだ笑い方をするから可愛らしい。もし少年が、本当にあの店で鳴砂が思っているような仕事をしているのなら、さぞかし客付きは良いだろう。

エントランスに降りると、チヒロが天井の端に意味あり気な視線を流して「あそこに監視カメラがありますから」と言う。九鬼がここに泊まれと言つた訳がわかつた。

チヒロによると、ここに住んでいるのは全員が自分と同じ風俗店の従業員だと言う。少年はそれ以上詳しく話さなかつたが、何かしらの理由があつてあの店で働いている十人ほどの人間が、逃げないようにここで監視されながら暮らしている。理由は……借金返済のため、あたりだろうか。

外に出ると、愛車の中が煙草の煙で白く靄もやがかつている。

勘弁してくれよ。せめて窓は開けてくれ——。と思つたが、車の鍵は鳴砂のポケットだ。鍵がなければ窓は開かない。

あの暗証番号は組長の誕生日なんですと、どうでも良いことを少年は最後に小声で教えてくれた。

「なんやねん二人でこそそと。やらしいな。デートの約束か？」
後部座席のドアが開いて、タツノが降りてきた。

「せやねん。二人でタツノ君の暗殺もくろんどってん」

「なんやとこら。もういつぺん言うてみいや」

からかつてみると、案の定タツノは食って掛かって来た。単純な男だ。それを見てチヒロが鈴の音のような声で笑う。

「俺とチヒロはここから歩いて帰るわ。マンションすぐそこやし」
タツノがそう言つと、チヒロはタツノの隣にそつと寄り添い鳴砂に軽く頭を下げた。

「帰るんか？」とヤクザがもう一人、車から降りてきた。

「チヒロ、悪かったな仕事早退させて。これは今日の稼ぎの代わりや、取つとけ。あと、そのアホに上手い物でも食わせてもらえええな」

九鬼はワニ革の長財布から万札を三枚抜いて、チヒロの白い手に握らせた。その値段が高いのか安いのか、チヒロが今晚稼ぐはずだった金に見合っているのか、鳴砂には何も分からなかった。

チヒロはとんでもないと首を振つたが、タツノが「もらつとけ」と笑つたので仕方無さそうにポケットに紙幣をつっこむ。

「チヒロ君ありがとうな、部屋貸してくれて。助かるわ」

二人のヤクザに比べれば、最も自分の立場に近いであろう少年に礼を言い、後姿を見送った。

鳴砂が運転席に乗り込むと、当然のように九鬼が助手席に乗り込む。
む。

今からあの事務所に一度帰って、九鬼を家まで送り届けなければ

いけない。それに生活用品一式を詰め込んだ大切なスーツケースも、トランクに入らなかったために、人質のように事務所に置いて来てしまった。

「おい。この車、禁煙か」

エンジンをかけて軽快に走り始めたところで、九鬼が聞く。

「禁煙や言ったら。吸うんやめてもらうんですか？」

すでにダッシュボード下の灰皿には二本吸殻が刺さっている。

九鬼は、煙草を口から離してハハと笑った。

「堅気のくせして案外偉そうな口ききよるの。お前、なかなか肝が据わつとるやないか」

「さあ。自分では分かりませんけど」

「その灰皿、使おてよかつたんか？　なんか知らん、指輪放り込んであつたけど。お前のか？　もう上から灰かぶせてもうたけどなあ」

九鬼が煙草を吸いつけながら顎でくいつと灰皿を指す。

鳴砂はギクリとして、ハンドルを握りしめたまま背中を丸めた。指輪のことをすっかり忘れていた。いや、忘れようとして灰皿に入れたのだから、それでいいと言えば良い。

「ああ……俺のです。もう着ける事も無いから、ええんです」

それを聞いて九鬼は、獲物を見つけたかのようにニヤリと笑った。

「なんやお前。さては、失恋でもしくさったな？」

「悪いですか？　九鬼さんには関係ないでしょ」

「どんな女と付きおうとつたんや？　長かつたんか？」

お前はOLかつちゅうねん——。

「……。年上の女です。期間は……一年半くらい、ですかね……」
何が楽しいて、ヤクザに恋愛相談せなあかんのや——。

「ほお。そら結構長お付きおうたんやな。何で別れてん。モテそう

な顔してんのになあ。なんやお前、変態か何か？」

「ばれました？ 俺、変態ですねん。九鬼さんみたいな人が好みです」

へへと適当に笑って誤魔化す。

「お前。俺をおちよつくつとるやろ？ どつくぞコラ」

九鬼が不機嫌に煙を吐く。

一二発なら、どつかれてもいい。そのまま嫌ってくれたらもったいい。何とか早くこの腐れ縁から解放される方法はないだろうか。ひと息置いてから、また不適に笑って九鬼が話し出す。

「何で別れた理由言いたないんか、俺が当てたるか？

お前……まだその女のこと引きずってるんやろ。

その女忘れるために仕事辞めて、東京出て一から新しい生活始めよ思たんと違うか？

事務所で言うてた転勤うんぬん、あれは全部嘘や。そんな月初めでも無い日に社員入れ替える企業がどこにあんねん。

俺のレクサスあんなにしたいで、涼しい顔で言い値で弁償するなんて言えるんは退職金で懐が暖かいからやろ？ 違うか？」

「……」

「なあ、鳴砂君よ。俺はこう見えて、人の弱みに付け込んで飯食う商売しとんねん。お前みたいなんは、ぎょうさん見てきた。

そんなしょうもない嘘で俺等から逃げるつもりやったんかもしれんけど、極道なめとつたらそのうち痛い目みるぞ？」

低く威圧感のある声と冷気を宿した細い視線が鳴砂の右頬にあたる。九鬼が本性を現した。

鳴砂は一つ間を置き、浅い息を吐いて観念したように微笑む。

「別れた理由は……性格の不一致です。

あとは、まあ。九鬼さんの言う通りですわ。

これでも結構相手に尽くしたつもりやったんです……、百年に一度の恋や思たのにな……」

「気持ち悪いことを一人でぬかすな、どあほ。

結局お前は、ただの失恋で宿無し仕事無しになったヘタレやないけ」

「そうですよ。どうせ俺は恋に敗れて一人旅に出る、スナフキンのような悲しい男です」

「ええ風に言っな」

「だから放つといて下さい。金は退職金から払います。俺、どうしても明日には東京に向かいたいんです」

「お前退職金ついていくらあんねん」

「二億六千万」

「うるさい、死ね。」

ほんまに修理代全額払えるんやろうな。その歳やと入社して数年で退職やる？ そんな奴に今時退職金払う方が珍しいわ」

「仕事は歩合制の営業やったんです。だから普通よりは多くもらってると思います。有能な営業マンやったから、俺。高級車といえども国産車のレクサスくらいなら何とか直せます」

嫌味たっぷりに言うとお前、何かいちいち癪こまに障るのお」と怒られた。これ以上は殴られそうだ。

「まあええわ。金足りんかったら、さっきの店でチヒロと一緒に働けや。お前の顔やったら客もすぐ付くやろ」

「チヒロ君。やっぱりそういう仕事してるんですか？」

「まあな。最近女より男が好きやという変態がようけおるねん。男でも身体売って金になるんやから、得や思わなあかんやろ」

「親の借金とか、ですか？」

九鬼はせせら笑った。

「お前はドラマの見すぎじゃ。チヒロはな。あいつはシャブや」

「嘘や……。シャブって、覚せい剤でしょ？ チヒロ君が？」

「おい、運転は前見てせえよ。」

あいつはなあ、ああ見えて薬物ジャンキーや。シンナー、安定剤、何でもありのな。最近は合法の覚せい剤みたいななんも出回ってるけど、どれも安くは無い。

ようある話で、薬買うために借金して、それ返すためにチヒロはあの店で働いてるんや。

あいつ、働き出した頃はアパートからよう脱走してな。その度に半殺しにしててんけど、ちょっとしたきっかけでタツノと一緒に住まわしたら、えらい素直に言う事聞くようになったから、それ以来タツノの家に置いてるんや。まあこつちとしても店の売れっ子手放す訳にいかんから、監視するためにもちようどええ」

「まさか……。あの子が。何か、信じられへん……」

一番自分に近いと思ってたチヒロが、実は一番遠かった。

「そうか？ 俺は初対面の時からラリった顔しか見た事なかったから今の方が違和感あるがな。」

この前もタツノの風邪薬に手出してボコボコにどつき回されとったわ。たまに顔に青あざ作って眼帯して出勤しよるからびっくりするけど、それはそれで、またそういうのが好きやいう変態の客が来よんねん。気色悪い」

九鬼の顔が歪む。

青信号を確認してから、交差点を直進した。

「二人は……。その、恋愛関係なんですか？」

「二人って、タツノとチヒロか？ 知らん。興味無いから深く聞いたこと無い。」

まあ、チヒロがタツノを慕^{した}つとるんは確かや。

タツノも。あれも恋人や言うて、たまに男連れて来たりしよるか

らな。よう分からん」

「タツノが!？」

ついに呼び捨てた。

「せやねん。聞いてくれるか。」

あいつはほんまに一回頭をかち割って、脳ミソに味噌汁の味噌を加えてかき混ぜなあかん。

恋人や言うて男連れて来たり、そうかと思えば事務所の二階でゲームしながら独り言ずつと言うてるし、たまに喧嘩でむちゃくちゃしよる。あのアホさ加減にゾツとするわ。

俺あいつと血繋がつてると思うだけで、ゲエ出そうになる」

「血、繋がってるんですか？」

こんなヤクザ二人と親戚だなんて、身内の苦勞を考えるだけでこちらがゾツとする。

「タツノは俺の姉貴の子でな。俺からしたら甥や。つまり、あいつにとっては公私共に俺は叔父貴いう訳やな」

笑いそうになった。そういえばどことなく、タツノと九鬼はむちゃくちやなところが似ている。

「おいこら。何がおもろいねん」

「いえ何も。ちよつとそこの一方通行の道路標識がおもしろ見えましてん」

「お前も一回、脳ミソ出してレンジでチンせえ。わいとる虫が死んで、ちよつとはマシになるやろがい」

「ええですね、それ。気持ち良さそうや」

舌打ちして、九鬼は窓の外に顔を向けた。

道路標示を右折して国道に入った。夜の十時を過ぎても連休前の道路は車が多い。

レストラン、カラオケボックス、回転すし。道路沿いの店に出入りする車が停まる度に、二車線が実質一車線になって渋滞する。

また前の車が赤信号でもないのに減速して停まった。視界に見え

る同じ車線の車は皆停まっている。結構長い渋滞だ。

「なあ、鳴砂君よお。ものは相談なんやけどなあ。

連休明けから三ヶ月ほど、タツノの見舞い係頼まれてくれへんか？」

停まった車の静けさの中で、九鬼は外を見たまま溜め息混じりに言う。その声音に戸惑いが混じっていた。

三ヶ月……。さすがにここで東京で仕事があると言ったら殴られる。

「見舞い係？ なんですか、それ」

「見舞い係言うたら、見舞いするんやないかい。タツノの」
声に張りが無い。

「タツノ君、入院でもするんですか？」

「ああ、実を言うとな。

まあ聞くも涙、語るも涙やから、あんまり詳しいは言いたないけど……。ちょうど三ヶ月間、あいつは世間から隔離されて、静養せなあかんねや」

「そんな悪い病気なんですか……？ 三ヶ月てまた」

「これでも、だいぶ無理通して短くなっただ方なんやで？ まあ、三ヶ月で治るかは向こうも分からん言うてる。はつきり言うて予後は…… 良うない」

窓を向く横顔が、悔しそうに奥歯を噛締めるのが分かった。

「タツノはお前のことを友達やと言ったやろ？」

あいつはああ見えて人見知りでな。小さい頃から友達を連れて来たところを俺は見ただ事が無い。

お前を嘘でも友達やと言うて連れてきた時、アホみたいな恋人連れて来よるよりずっと親心に響いたわ」

あの時、俺を殺しそうな眼で睨んでたのに、ほんまは喜んどったんか……。おっさん全然感情見えへんな。

それにしても、タツノが入院――。

「でも見舞いやったら、チヒロ君がおるやないですか」

「ほんまにアホやな、お前は。」

チヒロにはこの事は言うてへん。あんなに慕^{した}とる男がいなくなる
と分かったら、またシャブに走るかもしれへんやろ？ それに、そ
んな可哀想なこと、余命宣告するみたいで俺チヒロによ言わんわ」
「九鬼さんは、見舞いには行かんのですか？」

「そら、たまには行くけど俺も忙しいからな。毎日は無理や。」

下の者は再来月まで奉公から帰って来んし、上の者はあれでなか
な薄情や。縁起が悪い言うて、元々見舞いになんか行く気あらへ
ん。

だからこうして、宿無し仕事無しの暇人のボケに頭を下げてるん
やないけ」

断じて頭は下げていないが、このむちゃくちゃなヤクザが一般人
の鳴砂に頼み事をするのだから、よっぽどの事なのだろう。

寂しそうなチヒロの顔と、どこか憎めないあっけらかんとした男
の笑顔を思い出した。

「……わかりました」

「引き受けてくれるか？」

「はい。俺でよければ」

「助かるわ！ 給料とまではいかんけど、生活費ぐらいなら世話し
たる」

初めて九鬼という男の笑顔を見た。普段の強面よりも、ずっと若
くて男前に思える。

「くれぐれもチヒロには内緒や。良き時にタツノ本人が話すやろ。
あいつら二人の話やから、俺等は口はさんだらあかん。ええな？
それからタツノの前でも、この話は出来るだけ出さんとなつたつて
くれ。案外メンタル弱いねや、あのアホは。暗なつてしゃあない」

神妙な面持ちのヤクザに、鳴砂はコクリと首を縦に振った。

「よっしゃ！　ほんなら今から何か上手いモンでも食いに行こ。パツと派手にてっちりでも行くか」

嬉しそうにポンポンと鳴砂の肩を叩く。また九鬼の晴れた表情に視線が吸われそうになったと思ったら、車の列がのろのろと動き始める。少し何かが勿体無いような気分で隣の男から眼を離し、前を向いた。

素晴らしい人生の門出。第一日目。夜。

宿泊先はヤクザを慕う少年の元住み家。

上京計画は大きく振りかぶってカーブ。選手交代、東京行きはベ
ンチに控え。

連休明けから晴れてヤクザの見舞い係に抜擢はきされた。

てつちりまでの道のり（後書き）

長い文章を読んで頂きありがとうございました。○ペコ

なんと八千文字！！Σ（。Д。ノ）ノオオオッ

もう一万字以内なら公開に踏み切っていいんじゃないの？
なんという自分ルールが出来つつあります。

明日はちょっと視点が変わりました、タツノ視点になりそうです。
今回は実験的に視点をチヨコチヨコ変えたりします……読み辛くてすみません。

あ、ちなみに「てつちり」とは「フグちり」のことです。

フグ……あいつらほんまに美味しい……淡白で……海で会ったら
そのまま食らいついたる……もう毒も含めて愛せる自信があります

（ヾノ・・・）カエツテコイ♪ 今からが旬でございますので、

大阪にお越しの際はぜひ一度ご賞味あれ〜♪

切れどき

夕方、いつもより早く仕事を切り上げ直接マンションに帰ると、決まって玄関に走ってくる小さい足音の迎えが、今日は無い。チヒロはまだ寝ているらしい。

リビングに向かう足を止め、寝室のドアを数センチ開けて中をそっと覗くと、ダブルベッドの脇、毛足の長い絨毯の上で毛布に包まれた小さな塊が僅かに上下している。

五年前、女と同棲していた時に買ったダブルベッド。一緒に寝ろとは言わないが、タツノがいない時くらいはベッドを使えと何度怒鳴ってもチヒロは聞かない。あれでなかなか変に頑固なところがある。

起こさない様に静かに寝室のドアを閉め、リビングに行って二人掛けのソファ―に背中から倒れ込む。

天井を仰いで、乾いた息を吐き上げる。

一人のリビングがやけに寒い。

このソファ―でタツノの隣にチヒロが腰を下ろすことは決して無いが、それでも台所で野菜を切る音や、背中で忙しく動き回るスリッパの軽い音がしているだけで、室温がずいぶん違ふと最近思い始めた。

ああ……明日からはずっとこうやねんな――。

別に寂しくも名残惜しくも無い、そんな自分が一番悲しかった。ただ、もう二度と訪れないという事実を頭の中で反復していると、携帯がジャケツトの中で震えた。

天井を向いたままポケットに手をやり、蜂の羽音ような不愉快な振動音を手探りで止める。

「もしもし」

「おう。タツノか」

着信表示も確認せぬまま携帯を耳にあてると、聞きなれた親戚、兼上司の男の声が聞こえた。

「叔父貴か」

「お前、もう明日の準備は出来てるんか？」

「んあ。出来てるでええ。」

「なんや、その間の抜けた返事は。お前がしっかりせんからこんな事になつとんやぞボケ。分かつとんか」

「わかつとるってえ」

「ほんなら、その気の抜けた屁えみたいな返事やめえ。お前、今家におるんか？」

「せや」

「明日出るまでに一回くらい事務所に顔出すんやろな」

「ああ。今晚寄るわ」

「ほんならその時に二階の応接間のゲーム機とマンガ片付けろ。邪魔でしゃあない。あと、お前の友達にも挨拶くらいしといたれ。明日からしばらく世話になるんやろ」

「わかつとる。チヒロの顔だけ見て、そっちへ向かうわ。明日俺が出る時には、あいつ夢の中やからな」

「おお、それがええ。しっかり話つけてから来いや。また脱走でもされたら店に迷惑がかかるからな。飛ぶ鳥後を濁さずやぞ」

「そうするわ」

通話を切ると、画面に四時五分とデジタル表示された。チヒロが出勤するまでに、まだに三時間半もある。

寝室のドアが開く音――。

チヒロが起きた。

携帯で喋る声がつるさかったのかもしれない。

パタパタとスリッパの可愛い音を床に跳ねさせながら廊下を走っ

て来る。

リビングの扉が開いて、ハッと息を吸う少年の吐息が聞こえた。

「ご、ごめんなさい！　まだ夕飯の仕度、出来てなくって、すぐ用意します！」

「せんでええ。今日は外で食う」

「す、すみません……」

チヒロを責めたつもりは無かったが、そうではないと言ってやる勇気がなかった。

「風呂入る」

「あ、はい」と小さく言って、また廊下にスリッパの音を響かせてチヒロは駆けて行った。

束の間して聞こえた水音を通り過ぎて寝室へ向かう。

クローゼットの中から下着を取って、部屋を出ようとドアに二歩あるきかけたところで足を止めた。

んっ——？

通り過ぎた視線をゆっくりと床へ戻し、眼を細めて絨毯の上を二度見。

ちょうどチヒロが寝ていた辺り、枕元の毛布の皺に何か光った。眉をひそめて覗き込みながら手を伸ばして取り上げると、鋭いアルミの錠剤包装フィルムだ。１シート丸々、十二錠分の穴が潰れて全て空になっている。裏を返して見ると、ずっと前にタツノが買った乗り物酔いの薬だった。

顔を歪ませて舌打ちする。

頭から冷たい血液が全身に流れ落ちて行く。

隠しといたはずなのに……よりによってこんな日に——。明日からは傍にいてやれない自分の情けなさが、余計にどす黒い怒りを煽あおった。

「おい、チヒロ！」

自分が出せる中で一番低い声で少年を呼んだ。
すぐにパタパタとスリッパの音が近付いて来る。
「は、はい」とドアから覗く、軽い表情。

「これ……なんや。説明せえ」

タツノが顔の高さまで上げた薬の包装を見てチヒロは小さく「あ
つ……」と呟き、小さな顔を強張らせる。下唇を噛む。大きな瞳を
伏せ泳がす。お決まりの表情。

「お前、何回言ったら分かるんじゃ」

襟元をつかみ上げ力いっぱい壁に突き飛ばすと、薄い身体は何の
抵抗も無く壁にぶちあたり、ふらりとその場にうずくまる。

床に倒れこんだ小さな頭を片手で驚づかみにし、サラサラとした
細い髪が軋むのも厭わず無理やり上を向かせた。

タツノが見下ろして視線を刺すが、チヒロは何としても目線を合
わせようとしない。

「ほんま。どうしようもないガキやのお」

いつもならここで気の済むまで殴り倒して終わりだが、今日とい
う最悪のタイミングがその思考回路を別ルートへと導く。

どうしようもないチヒロと、その傍に居てやれない更にどうしよ
うもない自分。

情けなくて。悲しくて。やり切れない。

やりよふの無い怒りが、殺意にも似た鋭利な感情になって溢れ出
してくる。

「もうええわ」

これ以上無い冷たい声で吐き捨て、つかんでいた小さな頭を突き
放すと、チヒロは後ろのめりに壁に頭を軽くぶつけてから横座りし
たまま俯いた。ほどなくして、丸めた小さな背中をヒクヒクと上下
させ啜り泣きすすを始める。タツノからは見えない涙を、薄い掌の親指

の付け根でぬぐった。

「ご、ごめん、なさい」

消え入る涙声。

いつもこうだ。

チヒロはタツノがどれだけきつく薬の事をとがめても、どれだけひどく殴っても、ただ「ごめんなさい」と泣いて謝るだけで、言い訳はおるか次からはもう絶対しないという約束にも首を縦に振ろうとしない。それがタツノを余計に苛立たせて、混乱させた。まるで悪いのはタツノで、チヒロは悪くないのに自分に気を使って謝ってくれているような、そんな錯覚を見る。

タツノには五つ上の姉がいるが、小さい頃よく勝手に庭に走り出では転んで石に頭をぶつけた。額に打ち傷を作る度に、姉は弟を見ていなかった自分が悪いとタツノに「ごめんね」と何度も謝る。悪いのはタツノで、姉は決して悪くないのに何故か謝られる。その時のむしゃくしゃした複雑なもどかしさを、五歳以上も歳の離れた少年相手にタツノはいつも感じてしまう。

「おいチヒロ。お前、昨日は何人相手して来たんや」

チヒロの口から聞いて、自分が一番腹が立つ話題をタツノはよく知っている。それは一番聞きたくない話題でもあった。何故腹が立つのか、それを考える前にもう怒りで思考が止まってしまう。

ヒクリと背中動きを止めて下を向いたまま返事をしないチヒロに、尚も一番しなくない質問を重ねる。

「聞いてんのか？ 昨日は店で何人、男の相手してきたんや。七人か？ 八人か？」

押し黙ったチヒロの小さな膝をタツノが足先で小突くと、「ご、五人、です……」と震えた声が返って来る。

思っていたより少なかった。

チヒロの人気は、店の売り上げのトップ3には余裕で入る。

八時間の勤務中に五人の相手。それはチヒロの人氣が落ちたのではなく、チヒロを氣に入った馴染みの客が増え、指名しては時間を延長してチヒロを独占している事を示していた。タツノの中で、何かがプツリと途切れた。

「ふうん。ずいぶん賢^{かしこ}い稼^{かせ}いだるやないか。そんなに儲けといて何が不満やねん」

こんなに沢山の言葉を自分からチヒロに投げかけたのは初めてかもしれない。必要な時以外は、わざと会話することを避けてきた。よりにもよって、こんな夜に……。

「まだ稼ぎ足りんのやったら俺^こが買^かうたるわ。サービスしてくれや」
そう言ってYシャツのボタンに手をかける。
チヒロの両肩がビクンと一度大きく脈打つ。

「出来るやろ？ いつも客にしてるんと同じ様にしたらええだけやん」

見下して嘲笑うと、チヒロは俯いたまま首をぶんぶんと横に振る。
「^は早よせえや。ベルトくらい外してくれるんやろ？」

また少年は首を振る。

チヒロは頑固だ。しないと云ったら絶対しない。

タツノはボタンを外す手を止めて、ため息をついた。

どんどん崩れていく。

自分が壊していく。

帰ってきては「飯。風呂。寝る」、この言葉だけを一方的に投げ掛けるだけの少年との関係。

明日からは消える自分を思うと、もう全てがどうでもよくなった。
チヒロの白い足首と、自分の欲と、やりよふの無い現状と、怒りに負けた。

細い二の腕をつかんで無理矢理立たせ、チヒロが一度も寝たこと

が無い自分のダブルベッドに投げ倒す。

少年を軽く受け止めたベッドにタツノも上がり、チヒロに馬乗りになった。

チヒロの服を剥いでいく。

「やつ……！」

今からの展開を把握したチヒロが、四肢を振り回して暴れる。

「おとなしせえや」と無表情で吐き捨て、迷いの無い手付きで非力な身体を押さえつける。

「いやっ……やめて！ やめて下さい……タツノさん……やあ、それだけは……」

「無理やな……できん相談や」

最悪なことに、これが別れる前にチヒロと喋った最後の会話だった。

部屋にひびく痛烈な悲鳴。

遠くの水音。

軋むベッドのスプリング。

怒りと欲にまかせて少年を犯し続ける。

本番禁止の風俗店で働くチヒロが、まだ他人と身体を繋げた事が無いと承知で、その未成熟な身体を無理にこじ開け、切り裂きながら押し入った。

性行為とは言えない、ただの暴力。傷害。消えない罪。

言葉にならない悲痛な声で泣き叫ぶ少年よりも、ずっとタツノの心は悲しく辛かった。

快樂ひとつ感じない。

一滴たりとも満たされない。

代わりに得られるのが、途方も無い虚無感だと薄々感づきながらも小さな身体をむさぼる。

浴室のドアを開けると、浴槽から湯が膨らみ溢れ出ている。

もうどれくらい無駄に流れていったのだろう。優に一時間。

蛇口をひねって湯を止めると、甲高い悲鳴のベースにずっと流れていた不調和音がやっと消えた。

タツノは浴槽の湯で濡らしたタオルを持って寝室へ帰り、意識の無い小さな身体を丁寧に拭く。

もう一度浴室へ行き、使ったタオルを湯船に浸すと、罪深い体液と一緒に鮮血が透明の媒体に拡散し、溶け合っていく。

浴槽の栓を抜き、排水溝に渦巻いて消えていくチヒロの血を宿した透明な液体を、下着一枚で浴槽の縁に腕を置き、最後までぼんやりと眺めていた。

リビングへ行くと夕方の五時半。チヒロの出勤まで二時間ある。下着とYシャツだけ新しいものに替えて、元着ていたスーツを着込む。

最低限いる生活用品だけを紙袋につめこんだ。こんなに広い部屋に暮らしていないが、いざ必要な物を選んでみると驚くほど少ない。

ズボンのポケットに無理矢理突っ込んでいた、帯封が付いたままの札束をテーブルの上に投げる。

一つ。二つ。

ジャケットの内ポケットのから三つ目。

最後の一束の帯をちぎって適当に半分に割り、積まれた札束の上に投げると、二三枚横滑りして床にはらりと落ちた。

これで三百五十万。

一度抱いた分の報酬にしては高いが、うら若い少年が店で身体を売る理由としては安過ぎるとタツノは思った。

確かチヒロの借金は二百五十万程。余分に百万あれば、新しい生活を始めるのに不自由しないだろう。

元々面と向かって話し合う目算などありはしなかったが、結果的にこんな別れ方しか選べなかった事が、何故か馬鹿な自分らしいと感じた。そんな自分も明日には消え、チヒロは自由の身になる。その手助けとしてしてやれる唯一の事が、目の前に散らばった札束の山だった。

あつ……そや——。

思い出して腕の時計に手をやり、バックルを外す。

二十五万円のクロノグラフ。鳥の羽をかたどったフレームが気に入って数年前に買った。

少し前に風呂上りのリビングで、チヒロがこの時計を手を取って見ているのを目撃した事がある。

紙袋を持ち、部屋の中をぐるりと一度見回してから玄関へ向かう。寝室に寄ってベッドに横たったチヒロの顔を覗きこむと、長い睫毛の周りが濡れて光っている。

何も身につけていない白く繊細な身体の手首をそと取り上げ、さっきまで自分がしていたクロノグラフを巻き付ける。やはり細い手首にはブカブカだが、自分で店に出向きサイズ調整くらいは出来るだろう。フレーム自体は小降りで綺麗なデザインなので、チヒロがしていても違和感はない。鳥の羽だと思っていたフレームの彫刻が、白い肌に巻かれると天使の羽のように思えた。

チヒロがいつも見ている時計は残酷なものばかりだ。

サービスの残り時間を確認する個室のデジタル時計、その店に行くとチヒロを起こす目覚まし時計。

どうかこれからは新しい生活で自分の時間を過ごして欲しいと、薄汚れたヤクザには似合わないことを思ってみたりする。

チヒロが出勤する三十分前に目覚まし時計をセットした。出来る事なら、この時計が鳴るのはこれが最後であってほしい。

横たわる天使を起こさないように、静かに部屋を出た。

「おう、タツノ。早かったな」

「叔父貴、また飲んでるんか？ ようつまみもなしに飲めるなあ」

「アホ言え、これは水じゃ。どこぞにこんな無味無臭の酒があるねん」

タクシーで事務所に向い、部屋に上がって奥へ行くと、いつものように足を大股に開いた偉そうな叔父が応接セットの上座を陣取りテレビを見ていた。いつも通りのくだらない掛け合いをしてから、ソファアの端に座る連休前につかまえた親友、兼運転手に声をかける。

「歩。ちよつとええか？」

タツノの意図をくみ取ってか、鳴砂は真剣な表情で頷き立ち上がった。

二人でパーテーションの裏へ行く。

「悪いな、明日から。よろしく頼むわ」

親友は少し辛そうな表情を嚙締め、何度も頷いた。
「わかってる。」

俺のDS持って行くか？ 暇つぶしになるやろ？」

「さすがにゲーム機は無理やる……遊びに行くんと違っんやし」

「せ、せやんな。ごめん……。ほんなら、あれは？ 攻略本。お前読みたがってたやろ？」

「せやな……本くらいやつたらええか。借りてくわ」

「返さんでええよ、やるわ。俺もう読んだし。二階にあるし持つていけや」

「ありがとうな。あつ、せや。これ……」

ジャケットの内ポケットから、帯をちぎって半分に割った残りの札束を取り出す。

眼を丸くした顔に「これ、取つといてくれ。世話になるし」と約五十万を差し出した。

「いや、こんな受け取られへんって」と押し返す鳴砂に、受け取ってもらわんとこつちの気が済まんと無理やり札束を握らせた。

「わ、わかった……ほんなら必要な分だけ使つて、残りは返すわな俺……絶対毎日会いに行くから……だから、氣い落としたらあかんで」

親友は優しい。今までタツノの周りにはいなかった種類の人間だ。明日からの三ヶ月間、タツノが自由を失う事を叔父から聞き可哀想に思ったのか、鳴砂はその話には一切触れずに、やたらとタツノに氣を使い親切に接してくれた。

「あ、あの。チヒロ君はどうなんや？ たまには様子見に行ったりした方がええんか？」

「いや、あいつは放つといたらええ。勝手にどこなと行くやろ。それなりの金は渡して来たし、ちゃんとそういう風にケジメつけて来た」

「金つて……手切れ金か……？」

「まあ……そんなとこやな」

「そうか。それで、二人がええんやつたら……」

「ええねん。ちようど切れときや」

鳴砂は心配そうな表情でまた頷く。

「おいタツノ！ 二階の片付け忘れんなや！」
パーテーションの裏から声が飛ぶ。

タツノが事務所を出て二階へ行くと、鳴砂は重苦しい雰囲気のまま九鬼の隣に腰を下ろした。

「チヒロとは、ちゃんと話おうて来たと言ってたか？」

ニヤニヤ笑いながら興味深げに九鬼が聞く。

「不謹慎ですよ？ 二人にとっては大切な話です。チヒロ君、大丈夫やるか……」

「大丈夫もクソもあるかい。どうせ別れを惜しんでピーピー泣いて抱きおうつたんやろ。あいつ眼え真っ赤やったやんけ」

「なんちゆう事言うんです。少しはタツノ君の事、心配してあげたらええのに」

「ほんならお前が抱き締めて慰めたれや。何がええねん男同士で。気色悪い……」

「そ、それは……。俺も、ちょっとよくは分かりませんけど……」

「せやろ？ 俺も二回くらい頼まれて店のサービス受けたったけどな……まあどいつもこいつも女みたいな綺麗な顔してるから、口でしてもらう分には何とも無いけどなあ。同じ造りの身体と寝るっちゆうのはなあ……」

聞いても無いのに九鬼が真剣に話し始めた。

面倒臭くなった鳴砂はテレビのリモコンを取ってチャンネルを変える。ちょうど毎週見ているお笑い番組が始まった。

オーブニングトークに笑い声をあげていると、隣がやけに静かと九鬼を振り向く。

九鬼は片手に透明な液体が入ったグラスを持ち、少し眉を寄せて鳴砂を見つめていた。

「ど、どないしたんです？」

「お前……よう見たら、綺麗な顔しとんな……」

信じられへん……この男――。

鳴砂の表情が固まり、頬がピクリと動く。呆れてしばらく声が出なかった。

「九鬼さん……。それ、やっぱり水やないでしょう？」

水みたいな清酒が入ったグラスに手を伸ばすと、それに伴いグラスが向うに逃げる。それを追いかけた鳴砂の首に、上からがっしりと九鬼の腕が回った。この距離だと、はっきりと日本酒の匂いがする。

「な、なにするんですか……離して下さい！」

「キスくらいさせろや、減るもんやなし。嫌やったら俺のこと殴って逃げてもええで？」

タツノがゴミ袋を取りに事務所へ降りてくると、さっきまでいたはずの親友の姿が無い。叔父が難しそうな顔をして、膝に肩肘を付いて何かを考えている。

「あれ、歩はもう帰っ……うあっ！」

「あいつは帰った。俺は帰りタクシーや」

「それより叔父貴。そのほっぺた、どないしてん……。また、どこぞの女が来て引っ叩かれたんか？」

肘について押さえている方の叔父の頬が真っ赤だ。

気の強い女が好きで、女遊びが絶えない叔父は、たまにこういう打撲痕を顔につくって事務所に来る。

それにしても、ようこんな短時間に……。言い争う女の声も聞こ

えへんかったけどな――。

「ああ。気は強いけど、ええ女やった」

叔父の目線が遠い。

「大丈夫かいな。ええ加減にせんと、その内ストーカーされて刺されるで？」

「モテへん男の忠告なんて、ひがみにしか聞こえへんぞ？ 惚れた女に刺されて死んだら本望やんけ」

それを鼻で笑い飛ばしてから、今晚はここに泊まって明日は直接出掛けると叔父に伝え、ゴミ袋を持って部屋を出て階段を駆け上った。

切れどき（後書き）

いや今日も長かったですね（他人事……）

ほんでもって視点がコロコロ変わって読みづらかったですね……すみません。

更にまた、内容が暗い暗い。ガガガ（11。4 11）ン！！

最近NHK教育の「みいつけた！」という子供番組がマイブームです。サボさんというサボテンのおっさんがスクールで良い。そして椅子の歌が良い。スイちゃんも可愛い。コッシーの声がサバ
ンナ高橋さんというのも尚良し。

明日はまた鳴砂の視点に戻ります。

では♪

見舞い係の苦勞

「タツノ君。どうや？ 調子は」

鳴砂が溜め息混じりに言い、肘をつく。

「んん……何にも代わり映えせん。毎日同じ生活の繰り返しや」

タツノが呆けた顔で返す。

「せやるな」

見舞い係になって二ヶ月半。毎日の様にタツノと鳴砂はこの会話を繰り返し来た。

「そついや……昨日の夜はえらい熱かったなあ……喉渴いてしゃあなかったわ」

「ああ」

「あ、あと友達出来たで。二つ上やけどそいつもゲーム好きでな。ここ出たら歩にも紹介するわ」

「……うん」

明後日の方向を向いたままタツノはボソリと言う。鳴砂のイライラが増す。

「タツノ君よお……もう俺、帰ってええかな？」

「もうその、君付けやめろや。何か馬鹿にされてるみたいで気に触る」

「いや、馬鹿にしとんねん。

ほんなら言わせてもらっけどなあ、タツノ。俺もこれで結構忙しいねん。お前の叔父貴のせいだな！ 用無かったら帰るで」

「待てよ、そう言うなって。

俺は外界と繋がっていたいねん。

起きて飯食って、やれと言われたこととして、また飯食って寝る。常に監視されてな……ほんま監獄のような所や」

我慢限界。沸点をあつさり超えて立ち上がり、拳を振り上げる。

「監獄やないけい!!」

タツノに向かって振り落とした拳が、バインと間抜けな衝撃音を立てて、二人の間を隔てる透明なポリカーボネイトに弾き返される。

「おい！ 静かにせえ。お前もこつち側に入りたいんか？」

タツノの後ろ、部屋の端に座っていた監視官がこちらに厳しい口調で言う。

タツノが入院しているのは、大阪堺の住宅街にある敷地面積・収容人数共に西日本最大を誇る大型施設。

病院名は、聞いて驚け大阪刑務所。

病名は進行性脳ミソ蒸しパン化症候群。鳴砂が名づけた。

日に日に脳みそが蒸しパンのように、ふっくらやわらか、程よくスカスカに蒸され、本人の気付かない内に症状は悪化。ぼーっとしたまま「昨日の夕方は大きな雷がなったな」など、夏休みの日記の最後の方みたいな会話を始める、恐ろしい病気だ。

何が一番恐ろしいかと言えば、毎日三十分の面会時間の間に面会者の方がイライラして性格が変わってしまうところ。

見舞い開始第一日目。教えてもらった病院の住所をたどってここへたどり着き、何の疑いも無く「書いてもろた住所間違ってますけど」と九鬼に電話した無垢な自分が懐かしかった。

「なあ、あっちゃん」

「誰があっちゃんやねん」

鳴砂しかない。歩だからあっちゃん。

「ほんなら、アユ」

「人を大物歌手みたいなあだ名で呼ぶな。その気になって俺が紅白出たいと言ったらどないするねん」

「歩……俺ずっと思つててんけど。最近お前、性格が叔父貴に似てきたんと違つか？」

また立ち上がってアクリル板を殴ろうとしたが、監視官と目が合ったのでやめた。

「ほらっ！ 喋り方も行動もちよつと暴力的になつたぞ、お前。なんでや？」

「なんでやつて……お前、ほんますごいな。

半分お前で、もう半分はお前の叔父貴のせいやんけ。

騙されて三ヶ月も毎日刑務所の面会に来させられる上に、どこへ行くにも運転手として連れて行かれて扱こき使われるんやぞ？

ほんまやつたら俺は今頃、東京で新しい職に就いて行儀ようしとんねん。それがなんで刑務所の面会室みたいな所でヤクザと顔つき合あわさんなんねん」

「そうカリカリすなよ。そのへんのチンピラより極道らしい物言いやないか。怒つても腹減るだけやぞ？

ああ——、腹減つたなあ。腹減り過ぎて力出えへんわ……」

「うるさい！ お前はアンパンマンか」

二人を隔てる透明のアクリル板が動物園の柵の役割を果たして、

鳴砂は普段以上にヤクザ相手に強気なキレ方をする。

「なんやそれ。アンパンマンて……アンパンなんかアンマンなんかはつきりせんがな」

「お前アンパンマンも知らんのか？ アンパンのマンやんけ」

「だから何やねんそれ。」

あつ！ あつ！ 分かった。さてはアンパンを肉まんの皮で巻いて蒸したな？ ピザまんみたいなもんやろ？ あかんぞ——そんなん、外道や。アンまんに謝れ」

考えられへん……何で正義の味方が外道で、俺がアンまんに謝らんなんねん——。

「アンパンマン言うのはなあ、人型したパンの霊？ みたいなんで、顔と身体があつてな。喋るんや。『僕の顔を食べて下さい……』とか言うん違たかな」

タツノは急に表情を無くして静かに言う。「なんやねん……それ。ほんで、どうなるん……？」

「ほんで顔食べたら、首がもげて、また新しい顔を取り付けるんや」お前のスラスカ蒸しパン頭も新しいのに取り替えてくれよ——。タツノの顔が青ざめた。

「何やそれ……顔食べるってどういう事やねん……。新しい都市伝説か何かか？」

「ちやうやん。顔は食べるだけと違うねん。濡れたりカビだらけになつても『力がでないよお』ってすすり泣くんやぞ」

タツノは首を振って椅子から立ち上がる。

「顔にカビだらけて……もうええ。俺怖い話嫌いやねん。サイコホラー話すんやつたら、はよ帰れ。」

俺、今独房やねんぞ？ 夜中しょんべん行けんようになつたらどないしてくれるんじゃ」

独房なのは、いびきがうるさいと同室のデブを蹴ったタツノが悪い。こいつは自業自得という言葉の範例のような生活を送っている。それにしても、アンパンマンの話でヤクザの顔色が本格的に悪くなった。笑える。

二ヶ月半毎日通っていて、早く帰れと言われたのも初めてだ。

「お前、知らんで。そんなん言うてたら、夜中見回りに来た監視員の首がもげて落ちるぞ？」

アンパンマンはな、その昔パンというものが出来た頃に、ジャム王子さんとバタ公さん^{まじな}つちゅう人が偶然生み出してしまった呪いで、古代から伝わる呪いや。その辺の子供もみんな知ってるがな」

「嘘やろ、それ」

「嘘やと思うなら、その辺の奴らに聞いたらええやん。アンパンマンて知ってるか？ って……」

「俺、餡子嫌いやからアンパン食わへんしええわ、どうでも」

「アホやな、タツノは。アンパンマンには仲間がおってな、食パンマンとカレーパンマン言うのがおるねん。それがアンパンマンの怖いところや」

早口で喋っていると、後ろの監視官の会話内容を記録する手が早くなる。こんなアホの会話をメモっていて、よく笑わずにいられる。

「お前……最悪やな。ここの朝食は食パンやねんぞ！ 気持ち悪いやないけ」

「ほんならな、タツノよ。よう聞きや。食パンに向かって『私は愛と勇気だけが友達です』と三回唱えろ。ほんなら呪いが解けるから」
「アホか！ なんで朝っぱら食パン相手にそんな寂しい事言わんなんのじゃ！ 精神鑑定に回されるやないか」

そろそろ面会時間終了だ。

椅子から立ち上がり、帰る仕度をしながら最後に捨て台詞を吐く。

「ほんなら、まあ好きにせえや。」

最後に一っだけ教えといたろ。さっき言ってたアンパンマンの首がもげた時にな、新しい顔を運んで来るんはチーズっちゅう不気味な二足歩行の人面犬やねん。

今晚目が覚めたら、二足歩行の人面犬が生首持ってお前の隣で笑わろてるかもしれへんぞ……『わん』と言うてな……」

笑いを堪えながら怪談話をするように無表情で囁くと、タツノは顔を歪ませて手を口元にやった。

よし、信じた。アホらしい。はよ帰ろ――。

いつもよりはスッキリとした気分で面会室を後にする。

今ではすっかりヤクザの送迎用と化してしまった自慢のカマロを気分よく走らせる。

途中で九鬼から携帯に着信があつたが、運転中という理由で堂々と無視した。

「おい、どこ行つとつてん。携帯何で出えへんのや」

事務所に帰ってみると、さつそく若頭補佐様がお冠。

「どこつて、タツノ君の所でしょ。運転中やったから携帯出れんかつたんです。」

たまには九鬼さんが面会行つて下さいよ。もう運転出来る人もおるんやし」

先週、奉公に行つていると言っていた若いヤクザが二人帰つて来た。見た目はそのへんのチンピラと変わらないが、さすがに奉公に行つて来たというだけあつて言葉遣いや身のこなしがしっかりして

いると素人目にも分かった。二人とも免許は持っているが、一人は糖尿病を患って透析を受けている若頭の専属の運転手みたいなもので、若頭の車で病院から自宅の送迎をしているから、殆んど事務所にはいない。もう一人は車を持っているが、タツノがいない分の仕事をこいつが一手に引き受けているので、これまた事務所には殆んどいない。

「お前……この俺に刑務所へ行けと言うんか？ 誰があんなところ行くか。縁起悪い」

「人を騙しといて、ようそんな事言えますねえ」

「誰も騙してへんわい。お前が勝手に勘違いしただけや」

「三ヶ月で治らんとか、予後が悪いとか言ってたやないですか」

「合ってるやないか。あいつのアホアホ病が三ヶ月で治るか。そもそもアホが祟って刑務所なんぞに入院せなかんねや」

アホアホ病……ネーミングのセンスが小2か、それ以下。

「タツノが俺を友達やと紹介した時、俺を殺しそうな顔してホンマは親心に響いたと言ってたでしょう。あんな辛そうな顔して見舞いに行ってくれと言われたら、誰かて入院やと思いますわ」

「あれはホンマにお前のことを殺したるかと思っつつたんやないけ。俺のレクサス事故車にしゃがって。辛そうな顔してたんは、一生懸命笑い堪えてたんや」

九鬼の話ではタツノが事件を起こしたのは三ヶ月前。

風俗街の路地裏で悲鳴を聞いて、使われていないビルの敷地をタツノが覗き込むと、どうやら裏ビデオの撮影が行われている。ただその被写体となるはずの裸体は、女ではなくて少年。ビデオ撮影に同意していないのか、数人の男に寄って集って無理矢理服を脱がされ、泣き喚いている。その少年の顔に見覚えがあったため、タツノは男達をボコボコにして一人を病院送りの重症患者にした。その時助けた少年が、タツノの組が経営している風俗店の売り物、チヒロ

だったのだ。

タツノはとりあえず自分の家にチヒロを連れて帰ってから、九鬼に連絡をした。タツノはチヒロが脅されて無理矢理店から連れ出されたと言ったが、それはチヒロを庇うための嘘で、恐らくはチヒロが薬に釣られて付いて行ったのだろうと九鬼は言う。何しろタツノがボコボコにした内の一人が、薬物を取り締まる事を生業とする警察官だったからだ。

相手が警察だったことで、よくある風俗街での喧嘩が簡単には治まらずにタツノの身柄引き渡しにまで至ってしまった。公には出来なくても面子を保ちたい警察は何度も組と話し合いを重ね、何とか形だけでも三ヶ月間、タツノが刑務所に入るという事で双方手を打った。

そういう理由があったから、何としてもチヒロにはタツノが消える理由を言う事は出来なかったのだ。

そうで無くてもチヒロは変に頭がぎれるから、気付いてしまうかもしれないと九鬼は心配していた。

「鳴砂。今日は今から出掛けるぞ」

「はあ。いつてらっさいませ」

「どつくぞ、お前。運転手がおらな誰が運転すんねん」

「九鬼さんがしたらええやないですか」

「俺もそうしたいんやけどな。」

「何でか知らん、俺のレクサス今修理屋の車庫やねん。何でや思う？ 鳴砂君」

「さあ、何ででしょうね。お気の毒。」

「賢い甥子さんに運転させはったから違いますかねえ」

「お前……。」

「なあ鳴砂君。俺の口調が変わらんうちに準備した方がええんと違うか？」

「はあ——い。出掛けるってどこ行くんです?。」

「東京や」

「は? 東京って……今からですか?。」

「せや。お前行きたい言うとったやろ」

言った。確かに。

でもヤクザをつれて上京したいと言った覚えはない。

「ほんなら、まあ。お気をつけて」

「そんなに嫌か、俺と行くのが分かった。」

ほんなら自分で運転していくから、新しい車買ってくれ。レクサス廃車にする」

「はあ?。」

「俺プリウス欲しい」

「……。」

何か俺、急に九鬼さんと東京見物しとうなりましたわ……」

「せやろ?。」とヤクザが笑う。

見舞い係の苦勞（後書き）

昨日とは打って変わり、短い？文章、明るい内容になりました♪♪
やはり明るい内容&関西弁は書きやすい。♪ +。ヤッタア（
。、从、。o） ヤッタア。+。

本当はチヒロとタツノの出会いからこの話は始めるつもりでしたが、10月中の完結を目指すためにやむなくカットさせて頂きました。また暗い内容だしね……。

息子が寝ている内に次の執筆に取り掛かります♪
では。oペコ

「追記」最初の方、九鬼の車の種類がレクサスとセルシオごっちゃになっていましたが（汗）本日レクサスに統一させて頂きました。
スミマセン——、——●

l e t · s 上京！

「おい！ そこ右や言つたやろ」

「痛い痛い痛い！」

この車のカーナビは特殊で、ヘタレな鳴砂のために極道モードが備わっている。

案内と言葉遣い、共に粗暴で、道を間違えようものならリアルファイトで訴えかける。

この極道ナビがもつと世間に普及したら、交通事故は増えるが渋滞は無くなるだろうと鳴砂は思った。

「向うの表示を、と言つたやないですか」

「言つてへんわボケ。」

畜生……。ほんま、何で俺がナビなんかしなあかんのや。

墨元会の九鬼さんにアトラス持たせてナビせえなんてこと言つたん、お前が初めてやぞ」

既に右の二の腕を殴られること六度目。ヤクザは手加減というものを知らないからいけない。絶対に内出血で青くなっている。

「ほんなら運転して下さいよ。俺が地図見ますから」

「だれが左ハンドルなんぞ運転するか。アホ」

悪態をつく口調に切れがある。

それもそのはず。このヤクザは鳴砂が長い長い永遠に続くのではないかと思われるような高速道路を運転している間中、助手席のシートを倒して気持ち良さそうに寝息を立てていたからだ。

なんであのまま永眠してくれへんかったんや——。

高速を降りて都内に入ったのは夜の七時過ぎだった。鳴砂は長距離運転で頭痛がするほど疲れている。

隣でレム睡眠とノンレム睡眠を二往復ほどしたであろう勇氣百倍の元気な男は、ダッシュボードに足を上げて、地図を放った。

「せっかく東京来たんや。何か上手いもんでも食いたいなあ、夕飯」
「俺、松茸食いたい。専門店あるでしょ」

「ほお、勝手にさらせ。俺はミシュラン見て三ツ星レストランを探
す」

九鬼は内ポケットから煙草を取り出す。

「ほんなら俺もそこにする」語尾に音符マークを付けて声を弾ませ
た。

「誰が勘定すると思てるねん。スーパー入ってエリンギでも食わん
かい」

そんな事を言いつつ、結局高い料理を食べさせてくれる。いつも
そうだ。

鳴砂がヤクザの運転手なんかをしているのは、付いて行く先に美
味しい料理が待っているからに他ならない。この腐れヤクザはこれ
でも舌がまともで、なかなかグルメだ。出てくる料理全てが絶品で、
がつつく度に「断食明けみたいな食い方すな」と怒られる。

本屋に寄ってミシュランガイドを立ち読みし、三ツ星のフランス
レストランに電話を入れると予約でいっぱいだったので、一つ星の
創作料理レストランを予約した。

星一つと言えども、これが最高に美味い。

「俺、もうお前を見とったら可哀想になつてくるわ」と、九鬼を黙
らせるほど乱食してやった。もちろんお会計は、墨元会若頭補佐様
の黒いクレジットカードで。

食事ついでに東京へ来た理由を聞くと、同じ組筋の事務所に挨拶
に行くのだという。

最近東京の岡田組というのが内乱で潰れかけた。岡田組は墨元会
とは同じ枝の組筋だから、近々墨元会の頭自ら東京見物を兼ねて見
舞いに来るといふ。その下見と挨拶を仰せつかったのが九鬼だった。

レストランを出てから、また九鬼のスパルタナビで岡田組の事務所を目指す。

東京の車はみんなマナーがいい。見るからに堅気では無い男を助手席に乗せた大阪ナンバーのシボレーは、救急車並みに前方の道が開ける。

首都高に乗って三十分程で目的地に到着。

墨元の事務所とは比べ物にならないくらい、明るくてお洒落な三階建てのビルだ。「綺麗な事務所ですね」と言っただけで九鬼に睨まれた。

入り口には『岡田建設コンサルタント』と、まるでアパレル関係の事務所のようなプレートが掛かっている。

「お前も来るか？」とバックミラーでネクタイを直しながら九鬼が言う。

「いや、俺運転で疲れたし車の中で寝ときます」

なんで俺が東京のヤクザに挨拶しにいかねえか——。

九鬼は「そうか、ほんなら……」と言ってこちらに大きな掌を差し出す。

「んっ？」訳も分からず、とりあえず自分の手を重ねてみた。

「おい。」

なんやそれ。なんでお前と握手せなあかねん。鍵や鍵！ 車の鍵」

「なんで車の鍵なんて持つていくんです？」

「お前、逃げるやろ？」

ギクリと音を立てて背骨が軋きしんだ。

「に、逃げませんよ。逃げる訳無いやないですか」

「嘘つけ。ほんならトランクの大きい荷物は何やねん」

「あれは……着替えですよ。俺、お洒落やから」

「二日も続けて同じ服着といて、ようそんな事ほざくなあ。もうちよつとマシな嘘言え、あほんだら」

また二の腕をグーで殴られた。ヒリヒリする。

一度家に帰った時に、万が一の希望に備えて最低限の生活用品をトランクに詰めていたのだが……さすがにヤクザは目ざとい。

九鬼は強引に車の鍵を奪い取って車を降りて行った。

一時間ほどして、ドアを蹴る音で目が覚める。

窓の外に見慣れた極道が立っていた。自分の車を事故車にされた腹いせか、カマロに対する扱いが酷い。

夜の九時過ぎ。

九鬼がもう一箇所行くとところがあるというので、ヤクザナビゲーションの開始。小さなメモに書かれた住所を地図で確かめながら、ああでも無いこうでも無いと言って、また鳴砂の二の腕の青痣が広がっていく。

都心からは少し離れた住宅街に入り、大きなマンションの駐車場に車を停めた。

「どこですか？　ここ」

「ちよつとな。この社宅に住んでる奴に用があるんや」

「社宅？　これ社宅なんですか？　こんなに大きくて綺麗なマンション」

「たぶんな」

二人で車を降りてエントランスまで歩くと、社宅とは思えない立派な造りのマンションだ。

九鬼が壁に並ぶ郵便受けの前に行き、メモに書かれた文字とネームプレートを交互に見ている。しばらくすると帰って来た。

「やっぱりここで合ってるわ。四階や」

大きなエレベーターに乗り込み四階のボタンを押す。

エレベーターを降りて九鬼の後ろを行くと、しばらく歩いてドアの前で立ち止まった。ドアの横のネームプレートには『雪菜』と書かれてある。

メモをしまつて九鬼がチャイムを鳴らすが、返事はない。もう一度鳴らす。

「いませんね」

「おらんな」

「電話してみたらどうですか？」

「電番知らんねや。ってか顔も知らん」

「はっ？」

てつきり九鬼が昔遊んだ女あたりだろうと思って、好奇心で付いて来たから驚いた。

仕方なくエントランスに降りてマンションを出ようとすると、九鬼はまた郵便受けの方へ駆け寄り、あるう事かその中の一つに向かって、隅にあつた消火器を振り落とそうとしている。

「ちよっ……！」

止めようとしたが、無情にも郵便受けはグシャリという鈍い音と共に小さな口をだらしく開けた。

「な、何してるんスカ!？」

鳴砂が駆け寄ると九鬼は平気な顔で、開いた郵便受けから落ちた封筒をひらい上げる。

「あ、これ。電話の請求書や」と言つて、ビリビリと封筒を破く。

「九鬼さん。これ犯罪ですよ？」

「よう気付いたな。気付いてしもたら、もうお前共犯やぞ？」と涼しい顔。

「なに言つてるんですか。バっ……」

「『バ……』何やねん。まさか次の言葉は『力』と違うやろな？」

「バ、バ。バッドエンドになりますよ。と、こう言いたかつたんです」

「まあ……60点の返しやな。許したろ。」

許したるから、この携帯の番号と固定電話の番号、お前の携帯に登録しとけ」

そう言って封筒から出した紙を鳴砂に渡す。

「えっ！ 俺が？ 何で俺の携帯なんです？」言いながら紙を受け取る。

「教えたるか？ 自分でするのか邪魔臭いからじゃ」

聞いて損した。

どうして車の中で待っておかなかったのだろうと、自分の好奇心を責める。

とにかく一刻も早くこの場から立ち去りたい鳴砂は、言われた番号を急いで携帯に登録した。

「誰なんですか？ 雪菜って」

駐車場に足早に歩きながら聞く。

「会社の情報を横流ししてる男や。山崎っちゅうそいつの上司のせいで、うちの組は一千万程損しとんねん。

その雪菜っちゅう男も同じように情報を流しとるから、絶対に裏で繋がつとるんや。捕まえてからシメ上げて、山崎の居場所吐かさなあかん」

「一千万って。なんでまたこんな東京の人間と取引してるんです？」

九鬼がニヤリと笑って足を止める。

「鳴砂君。情報には知って得する事と、知らん方がええ事の二種類がある。今の質問がどっちか分かるか？」

「……。さっきの質問、忘れて下さい」

「偉い偉い、分かつとるがな。中2の脳ミソにしては、よう出来た」
言って九鬼は鳴砂の頭を強引に撫でて、髪の毛をぐちゃぐちゃにする。

この男が生粋の極道だということを忘れていた。気をつけないと、好奇心が身を滅ぼす。

急いで車のエンジンをかけ発進。

夜の光を白く反射する外車が、純正マフラーを唸らせる。

右折、左折を繰り返して、国道に出た。

首都高の入り口の表示に従い左折しようとしたら、「そのまま直進しろ」と隣からヤクザナビが低く言う。

不思議に思い振り向くと、九鬼はバックミラーに鋭い視線を刺していた。

「振り向くなよ。黒のレガシヤ。国道に出る前からずっと二台離れて後ろにおる」

言われてサイドミラーを横目で見ると、黒のいかつい車体がチラリと覗いた。

「付けられてるんですか……？」

「たぶんな」

九鬼は煙草を吸いつけ、紫煙を吐く。

「撒くか……。適当な道で曲がって、どこかの建物に入れ」

神妙に頷いて、車線変更のために方向指示器を点滅させる。

変な汗がハンドルと掌の間に薄膜を張った。首の後ろを一筋冷たいものが伝う。

二百メートルほど走った小さな交差点。

赤信号ギリギリでハンドルを切る。

指示器も出さず左折。

タイヤがアスファルトを滑る。

横目で確認するとサイドミラーに後続車は映っていない。

最初の分かれ道を右へ。狭い道を猛スピードで駆け抜け、出会う交差点を全て曲がり、繁華街の裏路地と思われる道に出た。

「よっしゃ。そこ入れ」九鬼が後ろを振り返って確認しながら言う。言われたとおり、ビニールのカーテンをくぐって一段下がった半地下のホテルの駐車場へ入った。

車を停めてからも、しばらく外には出ず車内でじっとしていた。

「疲れましたね」

「おお」

時計を見ると夜の十時過ぎ。鳴砂の視線に気付いたのか、九鬼もダッシュボードの時計を見る。

「今日はここで泊まるか」

「ここ、ラブホですよね……？」

「せやろ」

「ほんなら俺、車で寝ますから。九鬼さん部屋で寝てください」

「お前、そうやって逃げるつもりやろ？」

二本目の煙草を吸い終え、男が目を細めた。

「逃げません。絶対に」

「ほんなら好きにせえ。さっき追って来た奴等に見つかっても起こさんとしてくれよ？」

「嘘です。ちよつと逃げようかと思ってました」

「せやろがい」

「部屋、ご一緒させて下さい」

「じゃあないのお」

ドアロックを解除する。

最近のラブホテルは何と快適なことか。

ウエルカムドリンクとウエルカムフードを二人分たいたら、ジャグジーバスに一時間。

マッサージチェアに三十分。ふかふかの大きなベッドの上で跳ね回りながらカラオケ、ゲームにそれぞれ一時間。

疲れてすぐに寝てしまうだろうと思っていたら予想外、もはや愛する場所では無く、遊ぶ場所。エンターテイメントだ。

イタリアンのルームサービスとスパークリングワインのフルボートを頼むと、レストラン顔負けに美味い。

全ての欲が満たされる最高の夜。

隣にるのが、パンイチのヤクザであることだけが悔やまれてならない。

楽しい分だけ、何が悲しくて下着姿のヤクザとラブホテルのベッドの上で食事をしなければいけないのかという現状の厳しささいなに苛まれる。

食事をしながら、ずっと見そびれていた『タイタニック』のDVDを見るが、煙草を吸ったパンイチが、たまに隣で舌打ちなんかをするから全く感情移入できない。

「全然おもないやんけえ！」

エンドロールが流れ出した途端、ヤクザが怒り出す。ジエームズ・キメロンも日本の浮かれヤクザ相手に映画を作っている訳ではないので当然だ。

「そうですか？ 結構良かったと思いますけどねえ」

密かに染み出た涙を隠す。

「どこがやねん。だいたい女が太りすぎや。あいつが痩せてて、浮いとる板に変わりばんこでつかまっとったら、デカプリも助かったやんけ」

「デカプリて……。知り合いちゃうんやから」

「あんなヘタレの知り合いなんかいらんわ、ボケ。

あつ！ お前もしかして泣いてんのか」

慌てて鳴砂は顔を背ける。

「泣いてるやろ！ それ。

おい、こつち向けや」

ヤクザが面白そうに顔を覗きこんでくる。

その興味本位の視線から逃れるために手元にあったドリンクメニューで顔を隠し、九鬼に背を向けて布団の上に寝転がる。と、九鬼はしつこく鳴砂の上半身に押し掛かってきて、顔に手を伸ばして泣き顔を見ようとする。

その頬を包んだ掌のあまりの温かさに、しばらく人肌の温もりを

忘れていた鳴砂の肌がジンと痺れた。

やばい……。

「九鬼さん……俺ドンペリ飲みたい！」

話を変える為に、ドリンクメニユーに見つけた高級シャンパンが飲みたいと強請った。

「そついうもんはな、綺麗な姉ちゃんおこの気引くために頼むんや。なんでお前おこみたいなダメ人間に奢おこらなあかんのじゃ」

「いややあ——、俺ドンペリ飲おみたあいい——。ドンペリい。どんぺりい——ドンペリニヨン——」

「ガキみたいな強請り方すんな、鬱陶しい！ 自分の金で頼めや」
そう言われると、ますます飲みたくなるのが貧乏根性。何が何でも飲みたくなった。

「九鬼すわあん。どんぺりい——、ろ——ぜえ——」と九鬼の腕に手を伸ばすと、「暑苦しい、触るな！」と弾かれる。

ニヤリと笑い、寝転がったまま太い首筋に背中からまとわり付いて甘えまくる。

「ドンペリ頼んでくれるまれ離れませんよお——だ」

「お前、呂律回ってへんやんけ！ どんなけ飲むねん。明日も運転せなあかんと違うんかい！」

「するう、運転頑張るからあ。どんぺりい、ろまねこんてい割りい。お・ね・が・い」

「ロマネ・コンティ増えとるやないか！ お前はバブル絶頂期かボケ」

最終手段。後ろから九鬼の顔を覗きこみ、頬が触れ合う距離で誘い込む。

「お願い……九鬼さん。ドン……ペリ」

語尾にハートマーク。最大限甘い声。

押し黙る九鬼を見て、最高級シャンパンの獲得を確信した。

と思つたら、次の瞬間ひっくり返る視界。

大きな影がすごい勢いで覆いかぶさつて来て、口に何か温かいものが押し付けられる。前歯があたる。

「んっ……んん——」

利き手をベッドに固定される。自由が利くもう片方の手で覆いかぶさつて来たものを押しやろうとするが、ビクともしない。

展開の早さに追いつけずに現状が把握できないまま、とりあえず顔を振つて唇に吸い付くものを払い落とした。

「んあっ……九鬼さん？……あの……ちよっ……」

目の前にある男の顔に話しかけようとすると、開いた唇にぬるりと分厚い粘膜が進入。

口腔を犯す酒と煙草の匂い。

「んんっ……」とくぐもつた声を発する鳴砂をよそに、熱い触手が荒々しく頬の裏、奥歯の列をなぞっていく。

バスローブに割り入る性急な手付き。内腿を撫で上げたかと思えば、手際よく腰紐をほどく。

酒のせいで程好く温もっていた下着だけの地肌が外気にさらされた。

繁華街裏のラブホテルの一室。何故か鳴砂はヤクザに組み敷かれ、キスされている。

「あ、あのっ、九鬼さん？ 俺、言い忘れて、ましたけど、男なんですっ……」

「知ってる」

ひとしきり鳴砂の口内を弄り満足して出て行った舌が、そのまま顎を伝い、次は首筋を貪り始めた。

やばい……。やばい、やばいやばいやばいやばい——！

この展開はやばい。

実は密かに一番やばいのが、そんな展開に反応を示してしまっている自分の身体だ。

「ほんなら……何で？」

「言うとかけど、先に涙目で誘ってきたんはそっちや」

九鬼が話す度に、首元でくちゅりといやらしい音が鳴る。

「俺、誘ってなんか……あれは、冗談のつもりで……」

「笑えん冗談やな。極道なめとつたら痛い目見ると言つたやろ」
そっち関係の痛い目は見とおない――。

「いや……いや……」

絶望的な思いで首を振る。

「ドンペリは頼んだる。俺が満足してからや」

直線距離にして約二十センチ。いつのまにか雰囲気の良いダウンライトに切り替わった薄暗い室内で見る男の顔が、恐ろしく猛々しい。整った目鼻立ち。広い肩幅。無駄な肉が削ぎ落とされた、たくましい胸板。獲物を射すくめる眼光。

大声で暴れて逃げればいいものを、情欲を含んだ鋭い視線からは逃げ切れず、男の身体の下にひれ伏す。

「あの……俺……でも、絶対、九鬼さんのこと……満足なんかさせれんと、思いますけど……だって、俺……男の子やもん……」

そう涙声で呟いたのが半時間ほど前。

「あア……あぁっあアアッ……ん……」

本来の目的に使用するラブホテルの実力。色めいた雰囲気を作るクオリティーの高さ。

いやや、いややと言っていた口からは、とめどなく甘ったるい響きを垂れ流し。身体は男にされるがままに、卑猥な体勢をとっていた。

既に一度鳴砂は爆ぜ、二度目の熱を体内深くに注入されている。

男の息も荒い。

身体の内部分から揺さぶられる生々しい感覚と音に触発され、口の端から伝う涎を拭きもせずに喘ぎ続けた。

二人の関係性をことごとく無視して、鳴砂の足が男の肩に寄せられる。

「ああっ……いやぁ……」

より深部まで男を向かい入れる姿勢に、かぼそい震えた声だけが抵抗した。

また室内の空気を湿らせて、ベッドが激しく揺れ始める。

正しい用途に使用するラブホテルのベッドは、どれだけの激震にも軋まない。

一泊一万七千円。

まさに全ての欲を満たしてくれる場所。

人生が良くも悪くも狂う一晚を過ごすには、高いのか安いのか。

真実は小説よりも奇なり。

その真実よりも、人の心は更に奇なり。

一時間前までいがみ合っていた男が二人、作り物のムードの中で激しく絡み合っている。

l e t · s 上京！（後書き）

はい。ドモデス（*uDu≡uD*）（ドモデス

今日は今からお出掛けです。なのでくだらない後書は省略♪

話の進み具合としては、たぶん半分くらいですかね……今で。

出来るだけ早い完結を目指すため、展開が早かったり、今日みたいに性描写が削られたりします（´。、；）すみません。

では。

変わらぬ日々

「あ——疲れた。背中痛いわあ」

隣のヤクザが助手席のシートで胡坐をかき、地図を丸めてぼかぼかと肩を叩く。意味ありげにこちらを横目で睨みつけてくる。

「何ですか？ 俺、別に何も悪いことしてませんけど」

不貞腐れた表情でチラリと目線を送ってから、鳴砂はハンドルをきる。

「よう言つなあ、そんなこと。俺の背中にこんなにぎょうさん爪痕付けてくれたん、誰や思てんねん」

「そ、それは……九鬼さんが……無理矢理あんなこと、してくるからでしょう」

語尾が力無く口内にくぐもった。

「最初に誘ったんはお前や。添え膳は無理してでも頂かな失礼にあたるやろ？」

「添えてません。俺、自分の身体を九鬼さんに添えた覚えありません。添えても無いのに、九鬼さんが間違うて食べたんです」

何で俺がこんなヤクザを誘うねん……誘ったのは高級シヤンパンや。はつきりドンペリと言ったやないか——。

「それにこっちは九鬼さんのせいで腰が痛くて、歩くのも辛いんやから」

「やめろや。照れるやんけ」

「褒めてません。どうやったらそんな発想生まれるんか不思議でしやあないわ、俺」

「何やねん。お前も嫌やと言いながら、途中から俺の身体にしがみ付いてきたやんけ」

「なっ……」

事実だ。

だから九鬼の背中には鳴砂が付けた無数の引つかき傷が残っている。

「気持ち良さそうに喘いで、何回もイッてたやないか」

あまりにハッキリと言われて動揺を隠し切れず、ハンドルを持つ手がぶれて車体が安定を崩す。

「なっ、なんてこと……」。

「ただだけデリカシー無いねん！ 信じられへん！ ようそんなんで女の人と同棲なんてしてますねえ」

九鬼は組事務所から少し離れたマンションで女と一緒に暮らしている。顔は見た事は無いが、気の強い女らしい。

「九鬼さんも、あんな最中に『好きや』とか『愛してる』とか言うんやめた方がええんと違いますか？ 気持ち悪い」

「だんだん腹が立ってきて、自分も昨晚の一件について物言いを述べる。」

「ああ、悪い悪い。癖やねん。あれで女を勘違いさせて、後々嘘つき呼ばわりされるんやんなあ。」

「間違っても、俺に惚れんなよ？ 歩」

ベッドの中やこういう時だけ、九鬼は鳴砂を下の名前で呼び捨てる。

ハハと笑う男の表情が、底抜けにあっけらかんとしていて、やはりタツノと血が繋がっているのだと感じさせた。

九鬼に出会ってから三ヶ月程。鳴砂の中でずいぶんとこの男の印象は変化している。

時折見せる無邪気な笑顔と、子供っぽい性格。

タツノや組の連中もそうだが、極道というのは同類の人種の前では弱みを見せられない分、気を許した鳴砂のような堅気には案外素の表情を見せてくれる。それが時たま、九鬼のようにひどく魅力的

に感じられたりするのだ。

ダッシュボードのデジタル時計に目をやると、もう夜の八時。

ホテルを出たのは昼の二時過ぎ。

結局昨晚二人が眠りについたのは、明け方の五時半だった。詳しく言えば、それより二時間くらい前から鳴砂の意識は殆んど飛んでいた。全てことが終わり、放心状態のおぼろげな視界の中で、唇に優しくキスする男の背後に映ったベッドパネルのデジタル表示が五時三十分。これが昨日最後の映像だった。

朝の九時過ぎに一度眼を覚ましたが、ヤクザの胸元に頬を擦り寄せて寝ている事に気付き、これは夢だと自分に言い聞かせてもう一度瞼を閉じた。

正午を回ってから起きると、九鬼は極道映画のDVDを一人で見ていた。

重苦しい気分のまま、痛む下半身を引きずって風呂に一時間入り、その後宿泊料金と延長料金を九鬼が自動精算機で払ってホテルを出た。

それからは鳴砂と九鬼の関係は至って普段通り。甘くもならず、気まずくもならない。

一晩のあやまちは忘れて、何も無かったかのように接する大人の関係でいたかったが、この腐れヤクザは事あるごとに昨夜の話を持ち出しては鳴砂の顔を赤くし、面白そうに笑う。なんとという性格の悪さ。タツノの話では、こんな男が女によくモテるといふのだからこの世は不思議だらけだ。

ホテルを出てから、とりあえず思いつく限りの東京の名所を車で回り、フロントガラス越しに「へえ——」と間抜け面で首都の風景を眺める事を繰り返し返していたら、いつの間にか夜になっていた。

東京といえどもんじゃ焼きだろうと、田舎者丸出しの発想で適当

にのれんをくぐった店が、これまた美味かった。

「おい。もう一回あの雪菜っちゅう男に電話してみろ」

「俺運転中やから、九鬼さんかけて下さいよ」

昨日の晩に自分の携帯に新規登録された雪菜という顔も知らない男。可哀想に、会社の情報を横流ししたせいで隣に座るヤクザに今からボコボコにされる運命なのだが、その成り行きを知ってか知らずか、昨日の夜から一向に携帯にもマンションの固定電話にも出ようとしない。

「嫌じゃボケ。俺、口下手やからお前がかける」

「初耳ですわあ、九鬼さん口下手やなんて」

「アホぬかせ、どの口がそんなことほざくねん――」。

「せやねん。俺、昔から無口な方やからなあ」

本気で言っているなら、一度病院で脳波を調べてもらった方がいい。

車を脇道に寄せて止め、携帯を取り出す。

最初に雪菜の携帯にかけてみたが、やはり繋がらない。次は固定電話の呼び出し音を鳴らす。

……、六回、七回、八回。

「やっぱり出ませんねえ」

携帯を閉じた。

「そうか。しゃあない、あいつに聞いてみるか……。よし、今から霞ヶ関や」

九鬼は丸めていたアトラスを広げる。

一時間ほど車で走り、鏡張りのビルが立ち並ぶビジネス街に入っ
た。

九鬼の案内で目的地に近付くと、何故かよくパトカーに出くわす。
「あ、九鬼さんお迎えが……」 来ましたよと言う前に、右横からグ

―が飛んできて二の腕を打つ。同じやり取りを三度繰り返した。

広い敷地の平面駐車場に車を停める。

二人で車を降りて駐車場を出ると、入り口の門に「警視庁第一駐車場」とある。

「どないしたんです。警視庁って……自首でもしてるんですか？」

本気で聞きながら駆け寄ると、車内ではないのいい事に、自由な身体を活かしてヤクザは鳴砂の痛む腰に蹴りを入れてきた。

少し歩いて警視庁の本館であろう墓石のような灰色のビルの敷地内に入り、正面玄関を通り過ぎて職員用の地下駐車場へと九鬼は歩いていく。

しばらくキョロキョロと何かを探していた九鬼が「あつたあつた、これや」と一台の車に駆け寄り、窓から中を覗き込む。

黒のBMWだ。

BMWの黒光りしたボンネットに座って、九鬼は携帯をかけ出した。

「おう、マサトかあ？ 俺や、タカヒコや。今——あつ……」と言つて顔から携帯を離す。

「あいつ、切りやがった」

「嫌われとるんと違うんですか、九鬼さん。そのマサトいう人に……」

内心笑いが止まらない。

「アホ言え。こいつは俺の従兄弟で、ガキの頃からの付き合いなんや」

一時間程待つと、男が一人駐車場へ降りて来た。それを見て九鬼がニヤリと笑い、ボンネットから腰を上げる。

「よお」

九鬼の呼びかけで鳴砂達の存在に気が付いたマサトと呼ばれる男。

足を止めてから吸っていた煙草をその場に落として踏みねじり、明らかに嫌そうな表情で目を細める。

「やっぱり嫌われてるやんけ。まあこんな男を野放しにしとく警察が悪いんや——。」

体格の良い、見るからに女受けしそうな男前。どことなく顔の形や骨格、雰囲気九鬼と似通っているが、圧倒的に向うの方が品があつて落ち着いた良い男だ。

「大阪のヤクザは、わざわざ警視庁まで自首しに来るのか。見上げた根性だな」

「久し振りやお、マサト。ちょっと聞きたい事があつてな」

男は溜め息をつき、車にキーを向けドアロックを解除する。

「あつ、せや。」

姉貴に東京でお前に会うかもしれないと言つたら、551の肉まんと堂島ロールを土産にと渡されたけどなあ。腹減った時に、こいつと二人で車の中で食うた。どっちも美味かったから、今度大阪に来た時に食うたらええ」

男は呆れ顔で九鬼を睨む。その視線がそのまま鳴砂にも流れた来た。

「あつ……すみません。あの、すごく美味しかったです。ご馳走様でした」

上からの威圧的な視線にひるみ、頭を下げる。

「なんやねん。黙ってたばレへんと言つから一口もらっただけなのに、何で俺が謝らなあかねん——。」

「そついや、タツノはあれからどうなつた。元気にしてるか？」

男が思い出したように言う。

「おお、おかげさんでな。もうムシヨから出てきよる。口利きしてもろて悪かつたなあ。まあ善良な一般市民を守るのも警察の仕事やろ？」

「そういう事は、税金払ってから言っただな」
九鬼の従兄弟ということは、この男はタツノとは……又従兄弟？
よく分からない。

「ほんで聞きたい話うちゅうんはな、マサト。山並興業という会社の
ことやけどなあ——」

男の表情が固まる。

「お前……その件に噛んでるのか？」男が低く言う。

「いや、噛んでる言うわけや無いけど——」

それから十分ほど、一般市民の鳴砂には聞かない方がいいと思わ
れる情報のやり取りが行われた。

「なんやねん。ほんなら山崎も雪菜も、もう引つ張ったんかい」

「ああ、昨日の晩にな」

「畜生、入れ違いか……。ほんならもう追いかけてもじゃあないな
あ」

よくは理解できないが、もう雪菜という男を追う意味が無くなっ
たらしい。心の中で顔も知らない雪菜の安泰を祝った。

携帯が鳴る。

男は携帯をつかんで一二歩下がり、こちらに背を向けて話し出す。
最近の携帯は地下でも電波が届くらしい。

「なんだ……」

「いちいちそんな事で電話するな。女なら追い返しとけ」

「なんや……見た目に似合わず遊び人かい——」。

「刺された？ 誰にだ」

男の声と周りの空気が急冷されて、凍っていく。

さすがに警視庁で働く人間ともなると血生臭い事件が日常茶飯事
なのだろう。気の毒だ。

男は携帯を閉じると、こちらを見向きもせず車に乗り込みエンジンをかけた。

タイヤから甲高い摩擦音をあげて、黒のBMWが急発進して消えていく。

「なんやねんアイツ。せわしない男やなあ」

二人で駐車場出て地上に上がり、警視庁を出た。

「あいつはなあ、根っからの変わり者なんや。ガキん時は俺よりもずっと悪^{わる}やつたくせに、いきなり警察になったり、組長の娘と結婚したと思つたら離婚したり……まあその相手うちゅうのが京子言うて、俺も小さい時から知つてる胆の据わつたええ女でな。どうせ離婚するんやつたら、最初から俺が口説いといたらよかつた」

「九鬼さんて気強い女が好きなんですね。何がええんです？」

「なんや、妬^{ねた}いてるんか？」

「すごい妄想癖やな……」

「想像力豊かと言え。」

とにかくマサトは変人やねん。一回マサトと一緒に組事務所に力チ込んだ事あつてなあ、あいつ切り付けられて出血多量で意識不明の重体になつて死にかけよつたけど、地獄に入場拒否されて生き返つてきよつたわ」

九鬼が親戚との思い出話をして笑う。

「九鬼さんも死んだら、行けるんは三途の川の前辺りまで違いますか？ 絶対入国審査で鬼が判子つきませんわ」

ブン唸つてと飛んできた腕を、寸でのところで一歩下がってかわす。

「ボケかす。俺はマサトに振り回されとつたんやぞ？

俺あいつとおつたら、決まってややこしい事件に巻き込まれたりして、絶対ええ事無いねん」

「へえ——」と鳴砂が気の無い返事を返しながら平面駐車場に入ると、カマロの周りに黒い影が三つ。こちらの気配に気付いてガサリと動いた。

男三人。一人は鉄パイプを引きずっている。

「な？ 言つたやろ？」

九鬼が呆れ顔で笑う。

「よお、遅かったな」

「なんやお前ら。わざわざ警視庁の駐車場までお出迎えとは気合入つてるのお。どこの組のもんや。自首するん付いて行つたるか？」

「そつちこそ、大阪からわざわざ何しに来た。昨日は社宅、今日は警視庁。ずいぶん変わった東京観光じゃねえか」

運転席のドアにもたれかかっていた男がこちらに歩み寄る。

「こいつら……昨日付けて来た奴等や」

鳴砂が小声で言つて一歩後ずさると、駐車場の端に黒のレガシイが停まっている。

「なんやお前ら、ストーカーか。東京の極道は女々しいのお」

「なんだと……」

鉄パイプが高音を響かせてアスファルトを擦る。

街頭の下、金髪の男が姿をあらわにし、九鬼の数十センチ前まで来て挑発的に睨み上げる。

「ほお、威勢がええがな。ゴロまくんやつたら相手になつたるけど、こいつはやめといたつてくれ。堅気や」

金髪の鋭い視線が鳴砂に向いた。——瞬間、金髪の身体が浮き、後ろに投げ飛んだ。倒れた込んだ金髪の顔と腹に九鬼の革靴がめり込む。

「おい！」と慌てる後ろの男二人。
動かなくなつた金髪の肩を蹴つて仰向かせ、九鬼はポケットに手

を突っ込みニヤリと笑って静かに言う。
「来いや」

黒スーツの男が勢いづけて殴りかかる。
九鬼は半身を引いてかわし、男の腕を跳ね上げた。
鈍い音。

九鬼の右手が黒スーツの顎を突き上げたのだ。
グラリと揺らいた男の身体が半分に折れて、地面に崩れる。そこ
を正面から九鬼が蹴る。

四つん這いの男の顔に九鬼の膝が入り、そのまま力無く倒れて動
かなくなった。

時間にして約二分半。

大の男二人の残骸がアスファルトの上に転がっている。ピクリと
もしない塊を見て、最後の一人は後ずさった。

「違う……違うんだ。俺たちは喧嘩しにきたんじゃない。あんた達
から情報を聞き出そうと思って……」

「そうなんか、そら悪かったなあ」と笑う九鬼。

「山並興業の件やったら、もう片はついとんぞ？ 山崎も雪菜も警
察に引っ張られた。今更何しても遅い。そうお前の上司に伝えんか
い」

「そ、そうなのか……」

九鬼がシボレーに近付くと、男はさらに後ろへ下がる。
助手席に手をかけてヤクザが怒鳴る。「行くぞ、鳴砂。何突っ立
ってるんじゃない。はよ鍵あけろや」

「おい、そいつらちゃんと片付けえよ。邪魔じゃ」

おびえた顔で立ちすくむ男に九鬼は捨て台詞を吐き、鳴砂と共に
車に乗り込む。

「すごいですねえ……九鬼さん。あんなに強いとは知らなかった。俺びっくりしたわ」

バックミラーから黒のレガシイが見えなくなったのを確認して、鳴砂は助手席に話しかけた。

「当然やろ。墨元会の九鬼言ったら、ちょっとは名が通ってるんや。東京くんだりまで来て、あんなチンピラにやられるかい」

「むっちゃ格好良かった」

「惚れ直したやろ？」

「俺、女やったら落ちてますわ」

「女やなくても落ちたらんかい。いつでも抱いたんで？」

九鬼がニヤリとする。

「よう言うわ」

そう言って鳴砂も笑う。

百年に一度の大失恋から三ヶ月。

恋に落ちていた時よりも、笑う回数が多くなったように思う。

東京まで運転させられて、ホテルで押し倒されて、警視庁まで来てチンピラに襲われて、何の収穫も無いまま大阪に帰る。

人としては一歩たりとも成長せず、ただせわしく過ぎていく日常。変わらない日々。

いつも隣にいる、一度身体を繋げてても変わらない関係のヤクザ。

ゲームだらけの自分の部屋。シボレーの愛車に獄中の親友。

そついや、タツノの奴。今朝は食パンに向かってちゃんと呪文を三回唱えたやろか――。

こんな、くだらなくて面白いだけの日がずっと続けばいいと鳴砂は思う。

いくら望んでも地球の自転は止まらない。そう知っていても、変

わらぬ日々を一人願った。

三ヶ月ぶりに刑務所の門をくぐり外へ出た。

深呼吸一つ。身体を伸ばす。

何も変わっていない。

三ヶ月前に歩いて来た道を同じ服装、同じ重さの荷物を持ち、逆方向へ歩く。

道の脇に溜まった落ち葉だけが季節の移ろいを感じさせた。

大きな道に出てタクシーを拾い、見慣れたマンションまで一時間。エレベーターで六階まで上がって廊下を歩き、部屋のドアの前で郵便受けに目をやるが、特に郵便物がたまっている様子は無い。タツノのような下っ端の極道にはダイレクトメールも届かないのだ。鍵を開けて中に入ると、廊下の電気がついたままだ。

誰も居ないはずの部屋に上がり、リビングへ行って電気をつける。

何も変わらない部屋の風景。

ただ、ローテーブルに山積みになった札束までもが、変わらないままそこにあった。

顔をしかめて札束に歩み寄る。タツノが三ヶ月前に投げ置いたまま、二三枚だけ床に散らばって指一本触れられた形跡が無い。

チヒロは金を持たずに出て行ったのかと思った刹那、懐かしいシチューの匂いにハツとする。

台所を見るとチヒロがよく使っていた寸胴の鍋がコンロの上に置かれている。

ビーフシチューは、週に一度は食卓に並ぶチヒロの得意料理だった。美味しいと言ってやったことは無かったが、素朴な味わいが口

に合い、タツノの好物でもあった。

足早に台所へ向かい寸胴の蓋を開けると、やはり鍋いっぱいビーフシチューが作ってある。

タツノの鼓動が早くなる。

嫌な予感。

まさかと思いながら寝室へ急ぐ。

ドアを開ける。

やっぱり――。

三ヶ月前と同じように、ダブルベッドの脇、薄い絨毯の上で毛布にくるまった小さな塊が緩やかに上下していた。

近付いて上から顔を覗きこむと、幼い顔がキュツと眉をひそめて悲しそうな表情で眠っている。

「おい……」

足先で小さな頭を小突くと、チヒロはうつすらと目を開け、ぼんやりとタツノを見上げた。

虚ろな瞳が二三度まばたきした後大きく見開かれ、少年は驚いたように飛び起きる。

何も言わずに立ち上がり、チヒロはおどとした素振りでタツノの横を通り抜け寝室から走って出て行く。

パタパタとスリッパが駆ける懐かしい音。

しばらくして浴室から水音が聞こえだす。

タツノがリビングへ戻ると、チヒロは台所に立って落ち着かない様子でビーフシチューをかき混ぜていた。その細い手首には、三ヶ月前にタツノが巻いた二十五万のクロノグラフが、サイズの合わないまま巻き付いている。

「おっ、おかえりなさい。すぐに夕飯の準備しますから……」
久し振りに聞く少年の小さな高い声。

タツノはソファ―に座り、開いた膝に腕を置いて重たい息を吐き出す。

何がいけなかったのだろう。

何故変わらないのだろう。

金も、出て行くきっかけも、自由も、全て与えてやったのに、少年はまだあの店で毎晩男の相手をして、ヤクザ相手に夕飯を作っている。

今頃はどこかで新しい生活を送って、幸せに暮らしていて欲しかった。そうしてくれているだろうと考える事が、あの暗い檻の中でタツノにとって唯一の救いだった。

自分は少年一人の人生すら変えてやれない。

どうすればいい。

どうすれば変わる。変えられる。

足掻あがいても足掻いても変わらぬ日々。

絶望感と無力感。

少年の白い肌にかかったクロノグラフの秒針だけが、変えられない時を刻んでいく。

変わらぬ日々（後書き）

長い上に、視点が一度変わりましたが……すみマセン。

相変わらず見直しが不十分ですので、ちょこちょこ誤字脱字も…

…（汗）

前回の第五話ですが、刺青に関する事をすっかり書き忘れていたので、後ほど二三文だけ追加させて頂きます。

また雑談ですが、仕事復帰後のブログ管理＆執筆にそなえて安いネットブックPCでも購入しようかと考えています。それがあれば、旦那の前でもちょこちょこ執筆できんじゃねえの？なんて思ってるんですが、上手くいくかどうか（。ゝゝωゝゝ）ンー

旦那の前でもBL書いちゃうという方がいらつしやいましたら、上手く隠すコツを教えて頂きたいです。あと、子供が文章読めるくらいまで成長しちゃったらどうすんの？って話ですよねえ。ント・・

σ（・・ゝゝ・・）。○○（悩）

ではでは♪

かりそめフラッシュバック

「今日もすんごい良かったわ。チヒロ君の肌はきめ細かくて白くて、ホンマに綺麗や」

チュツとわざとらしい音をたてて、男の顔が遠ざかっていく。

「明日も、来てくれますか？」

「もちろんやん。毎日来るわな」

「嬉しい」

かりそめの枕に、かりそめの肌。

チヒロはニコリと笑った。

ドアの外まで男を送ってから部屋のデジタル時計を見ると夜の三時。さっきの男が最後の客だった。

部屋に設置されている狭いシャワーに入りざつと身体を流す。どれだけ洗っても落ちない汚れが、日々曇った薄膜を重ねてチヒロの見えない部分を濁らせていく。

部屋を片付けてから一度マネージャーの元へ行き、客からもらったお小遣いを渡した後スタッフルームへ着替えに帰る。

同業者の少年二人が着替えをしていた。

「チーちゃん、お疲れえ。今日もぎょうさんお客さん付いてたやん。ええなあ」

「今からノンと飲みに行くけどチヒロも行くかあ？ 東山さんのおごりやで」

東山というのは、先程チヒロが万札を何枚か手渡したここのマネジャーだ。

「ごめん。今から買い物に行くし、また今度」

優しい友達に断りを入れて、チヒロはショルダーバッグを肩から掛けた。

少年二人もチヒロと同じような境遇でこの仕事をしている。この少年達ばかりでは無い。マネージャーを含めて、ここで働く人間は皆何かしらの理由があってこの店で働いている。

「ほんならなあ。チーちゃん、ばいばあ——い」

「ばいばーい」

店の前で手を振ってから、チヒロは歩き出した。

二十四時間営業しているスーパーに入る。

牛のすじ肉が安かったので、またビーフシチューを作ろうと材料を買い込んだ。

ビーフシチューは一度本を見ながら作ってみたところ、タツノが美味しそうに食べたので、勝手にチヒロがタツノの好物と認定して週に一度は作っていた。

タツノが帰ってくるまでの三ヶ月。チヒロは三日に一度はビーフシチューを作り、タツノがいつ帰ってきてても大丈夫のように常に部屋を綺麗に掃除し、布団は干してふかふかにして、每晚廊下の明かりを点けて店に出掛ける事を繰り返し返していた。

永遠に帰らぬ人を待つのかと思われたそんな生活も二週間前に終わりを告げ、今では部屋に帰ると愛しい人の寝顔を見ることが出来る。

タツノがなぜ三ヶ月という期間何も言わずに姿を消したのか、チヒロには分からなかったが、いくつか思い当たる節はあった。

あの日、生まれて初めてチヒロの前に救世主が現れた。

薬に釣られて店を抜け出したバカなチヒロが男達に犯されかけているのを救ってくれたのがタツノだった。金も身体も要求しない下心ゼロの男は、チヒロを救っただけでなく自分の部屋にチヒロを連れて帰り、脅されて店から連れ出された事にしろと言い聞かせて、

店の経営者に電話して口添えまでしてくれた。どうせ部屋で身体を求められるのだろうと思っていたチヒロは、自分の愚かさを恥じた。それからタツノと一緒に暮らせるようになり、チヒロの生活には久々に安定が訪れる。

タツノは家ではほとんど喋らない。店の経営者やチヒロ以外の人の前ではよく冗談を言って笑っているところを見たが、チヒロと二人になると最低限の事以外は口にしなかった。

今までチヒロの周りにいた男達はみんな優しくちやほやとしながら、チヒロにいろいろな要求をしてくる。そんな大人に囲まれていたせいで、ニコリともせず、その代わりに何も要求しないタツノの存在はチヒロにとっては特異であった。

そして何よりも自分が間違った道へ引き返しそうになった時、チヒロを止めてくれる唯一の人。

殴られるのは辛かったが、チヒロ以上にチヒロを殴るタツノの顔が辛そうな表情をしている事をチヒロは知っていた。

自分は嫌われている。そう分かっていても、少しでもタツノの傍においてほしい、タツノの役に立ちたい。その一心で、昼夜逆転の生活の中、家事をこなしてタツノの生活を支えることに喜びを感じていた。

買い物を終えてスーパーを出る。

腕を組んで歩いているホステス風の女とスリッ姿の男。女は酔っ払っているか、足元をふら付かせながら男にもたれるようにして歩いている。

タツノさんにも彼女、いるのかな――。

男女のカップルを見るたびによぎる切なさを抑えて、チヒロは腕時計に手をやった。

文字盤を見ると五時前。

今頃タツノはあどけない寝顔をして、夢を見ているに違いない。そう思うだけで胸元がじんわりと温かくなり、吐く息が熱くなる。

タツノが姿を消す前日に、チヒロにくれたクロノグラフ。

文字盤を見ては愛しい人が今何をしているだろうと思いをはせ、現実逃避するためのだけの装置。

生まれて初めて手にしたチヒロの宝物だった。

マンションに着くと、もう東の空が薄ぼんやりと白んでいる。

エントランスへ入る足を速めた。

今から部屋に帰って洗濯物をたたみ、ビーフシチューの下ごしらえをしてから朝食を作らなければならない。

いつものようにエレベーターで六階へ上がる。

ドアを開けて中に入り、振り返って鍵をしめようとドアノブに手をやったところで、おかしいことに気が付いた。

いつもとは違う気配。

廊下に響く断続的な物音。

見覚えの無いスニーカー！。

寝室から漏れ出している、女のものではない喘ぎ声。

ハッとして全身を凍らせる。閃光が弾けて視界が白一色。

フラッシュバック。

薬物乱用者特有の後遺症にも似た感覚が、全身を感電させる。空白。

とてつもない虚脱感、絶望、恐怖。

冷たい汗が噴き出す。

嘘、だ――。

そう信じたいのに、聴覚は一方的な聞きたくもない甘い声を確かに捉えている。

「ッあ……あぁっ、いい……タツノさん……もっと、もっとちょうだい……んっ……あぁあアア……」

打ち付けるような音が勢いを増す。

最悪なことに、その鼻にかかる甘ったるい声が、自分を嫌う同い年の同業者の少年のものだと気が付いてしまった。

感覚のないまま、ドアノブにかかった指が小刻みに震える。

タツノは帰って来てからの二週間、よく女と遊ぶようになった。部屋にこそ連れ込む事は無かったが、チヒロのいるリビングで電話をしたり、外で食事をして帰ってくる回数が増えた。帰って来ると風呂はいらないうってあからさまに情事の跡を匂わせたり、香水臭かったりする。洗濯機に入れようとするタツノの衣服からはホステスの名刺や店のマツチがよく出てきて、捨てていいのか分からないチヒロがそれを机の上に置くと、タツノがジッとその様子を遠くから見て、チヒロの反応をうかがっている様な気がしてならなかった。

自分はタツノの恋人では無い。まして友達でも無いのだから、タツノの交際関係に興味を持つなんてもっての他の外だと、身分をわきまえていたつもりだった。――が、それはタツノの相手が女だと思ひ込んでいたから出来た事なのだと、今になって気が付いた。

男でもいいのなら。

年下でもいいのなら。

何故自分では駄目なのだろう。

こんなにもつくしているのに。

醜い自分が顔を覗かせ、嫉妬に狂いそうになる。

呼吸を抑えながら、チヒロはその場に買い物袋を置いた。

溢れ出そうになる熱い涙をこらえて唇を噛む。

触れていたドアノブをそっと回して外に出て、静かに鍵をしめる。

その鍵をそのまま郵便受けの中に落とした。
小さな金属音――。

「九鬼さん。今晚何食いにいきます」

応接セツトのソファ―に座り、テレビを見ながら鳴砂は隣の男に尋ねた。

「鳴砂君、俺は羨ましい。お前のそのちゃんぽらんを絵に描いたような生き方がな。」

食う事とゲームする事しか考えてないやろ？」

「俺、九鬼さんの顔見たらお腹空きますねん」

「なんやそれ。食欲やのうて性欲違うんか」

「それ、セクハラですよ？ 訴えたら俺勝てます」

振り返ると、男は鳴砂の背中に腕を回して至近距離でニヤついていた。

近い。

いつもいるはずの電話番号の男が今はいない。運転免許の必要性を感じて自動車教習場に通いだしたのだ。というか、早くこの腐れ縁から解放されたい鳴砂が、運転の楽しさを説いて熱心に勧めた。

だからこうして九鬼と事務所に残り、男が帰って来るまで代わりに電話番号をしている。

組事務所では二十四時間体勢で誰かが電話番号をすると決まってい
るらしく、かかってきた電話が留守電に切り替わるような事があつ
ては組の名折れなのだという。

「鳴砂。お前に一つ教えといたろ。」

お前が食う飯は全部俺が稼いだ金で払るとんねん。つまりお前の体は俺の金で出来てる。

ほんまは俺に何されようと文句は言えんのやぞ？」

「だから文句も言わんと今日も堺まで運転しましたやん。すぐに手が出る乱暴なナビゲーシヨンシステムにも耐えて」

「ああ、何やと？ お前もういつぺん言うて——」

ドアが開く音——。

九鬼は組んでいた足を素早くほどいて身体がサツと引き、鳴砂の背中にまわしていた手を口の煙草に持つて行く。鳴砂も慌ててテレビに視線を戻し素知らぬ顔を作る。

不倫中のカップルが人目にさらされた時のように、何も無かったかのような澄ました顔の男が二人。

事務所に入って来たのはタツノだった。

タツノは部屋の不自然な空気にも気付かず、ソファーに座る九鬼と鳴砂をチラ見した後、無言のまま奥の台所へ消えて行った。

「なんやねんアイツ、喋りもせんと。頭おかしなつたんか？」

座ったまま台所の方を覗き込み、九鬼が不信な顔をする。

タツノは出所してからというもの明るく振舞ってはいるが、どこか今までの底抜けな明るさは消え、上辺だけの笑顔をしているような気がしてならなかった。

今日は朝から、その上辺だけの表情も消え、無口で大人しい。

「今朝から元気ないですねえ、タツノ君。」

拾い食いでもして、腹壊したんと違いますか？」

「おい……あいつに対するお前の評価はどないなつとんねん。俺の甥はそんなバカボンみたいな男やつたんか？」

「はい。知りませんでした？ バカダ大学出身です。タツノ君」

鳴砂も台所を覗こうと首を伸ばして、九鬼の組んだ足の向うに手をつく。

ちょうど上半身で九鬼の太腿をまたいだ姿勢で台所を覗き込むと、遠くで冷蔵庫を開けるタツノの後ろ姿が見えた。

突然首筋にチュツと刺激が走る。

不覚にも快感を感じて「んっ……」と甘い吐息が漏れる。

首を引つ込め、自分のはしたない反応に顔を熱くしながら九鬼を睨みつけると、男はいやらしくほくそ笑んでいる。

「ちよっ……何するんですか!？」

タツノに聞かれないように小声で憤慨した。

「お前が俺の口元に、キスして下さいと首筋を差し出したんやろ?」
一回寝ただけなのに、この男は鳴砂の性感帯をよく把握している。
あの夜以来、確かに九鬼との肉体的な距離は狭まったが、今みたいな触れ方をして来たことは一度もなかったので鳴砂は驚いた。

「九鬼さん……。変態か極道か、どっちかにした方がええと思いますよ?」

それにこれ浮気と違うんですか? またユウコさんに殴られても知りませんから」

九鬼と一緒に住んでいる新地のホステスは、確かそんな名前だ。

「お前の方こそ殴るやんけ。」

おっと……、殴るんやったら次はほつぺた以外にせえよ。この丹精なつくりの顔が腫れたら大阪中の女が悲しむ」

「アホらしい」と呆れ、殴る気配の無い鳴砂を確認すると、九鬼の口が次は鳴砂の唇に近付く。

上半身を引いてそれをかわし、鳴砂は元の姿勢に座りなおして首を袖で拭いた。

携帯の着信音——。

九鬼がスーツのジャケットを探り携帯を取り出す。

「もしもし。……おお、東山か。何や。——」

電話に出て話している内に、九鬼の表情がだんだんと厳しくなっていく。

向うの話を聞いて頷く男の顔に、久しぶりに極道の鋭い雰囲気、プロの冷気を感じた。

「そうか……わかった」

低く言ってから携帯を閉じ、立ち上がる。

「おい！ タツノ」

九鬼がドスの利いた声で台所に呼びかける。

「なにい？ 叔父貴」

間の抜けた返事をしながら、缶ビール片手にタツノがこちらへやって来た。

「おい、チヒロどうした。今日出勤してへんそうやないか」

タツノの表情が曇る。

「知らん。今朝は部屋に帰ってこんかったけど？ 俺かて忙しいし、ずっとガキのお守りしてられへんねん」

「お前何のために一緒に住んどんじゃ」と蹴りを一発。

突然の緊迫した空気に鳴砂が固まる。

慌ててリモコンを取ってテレビを消した。

鳴砂はチヒロがまだあの店で働いていた事に少なからず驚いた。

刑務所に入る前日にタツノから話を聞いて、おぼろげながらチヒロはもうあの店にはいないだろうと勝手に考えていたからだ。

「また逃げよったな……。チヒロの携帯にはかけたんか？」

「かけたけど出えへん」

九鬼は舌打ちをしてデスクに向かった。

「俺は向うの事務所に電話して探す人数集めるから、お前はもういっぺんチヒロに電話してみろ」

向うの事務所とは墨元の本部事務所のことだろう。

ここはいわば支部で、名目上は若頭がしきる形になっている。その若頭は糖尿病を患い、二日に一回透析に通う身なので殆んど事務

所にはおらず、実質ここをしきるために九鬼が配属されているのだと電話番号の男が言っていた。

九鬼は墨元の頭と、タツノは若頭とそれぞれ杯を交しているから、タツノにとって九鬼は叔父という訳だ。

タツノが缶ビールをテーブルに置いて、携帯を開く。

壁の時計は夜の八時半を指す。

「チヒロ君と、何かあったんか……？」

鳴砂が小声で聞くと、タツノは目線を外し強張った表情をする。しばらくタツノは携帯を耳にあてていたが、チヒロはやはり出ないらしく首を振って携帯を閉じた。

鳴砂も自分の携帯を取り出し、テーブルに置かれたタツノの携帯の表示を見ながらチヒロに電話をかけた。

呼び出し音――。

……八回、九回、十回。

やっぱり出ないと諦めかけたところで、音が途切れた。外気の雑音。

「チヒロ君……！？」

まさか繋がるとは思っていなかったので驚き、腰を浮かせて背筋を伸ばす。タツノもハッとした顔をする。

返事は無い。

「チヒロ君やろ……？ 俺や、歩や！」

『歩、さん……』

遠くに聞こえる少年の声。消え入りそうな微かなテノールが涙声に聞えた。

「今どこなん？ みんな心配してるで」

『歩さん……僕。……また、薬を……。もう……生きる、価値も無

い、人間です……」

「薬って……。チヒロ君、今どこ？ 薬なんて……。誰にもらったんや？」

優しく言う。

薬という鳴砂の言葉を聞いた途端、タツノの顔が苦しそうに歪んだ。

「もうええ！ 放っとけ！ そんな奴」

タツノが怒鳴ると、それにおびえたかのように回線が途切れた。

チヒロは電源を落として携帯を閉じる。

優しい声の背後に聞えた愛しい人の言葉が、何かを吹っ切ってくれた。

顔を上げる。

風は無い。

濡れた頬に高所の空気が心地よかった。

鼻をすすり上げ、またクロノグラフに触れる。

円盤を六十等分に刻む針。チヒロの細い手首に巻かれた今でも、

その針は元持ち主の時間を刻み続けている。

愛する人の物であった事を忘れないように、あえてサイズは直さずにいた。

指三本は入る手首周りの隙間を確認する度に、自分とは違うしつかりとした男の腕を思い出し、途方も無く切なくなり、気持ちがいずんだ。

震える指で、フレームに彫られた天使の羽をなぞる。

自分の時間を刻まない時計。

でもこれをくれた男は、自分に翼を与えてくれた。

眼下の夜景にひるんでいた身体がふつと軽くなり自然に動き出す。
チヒロは浮くように一歩踏み出し、空気と地面の境目に足をかけた。

息を吐く。

眉を寄せてギョツと目を瞑り、血がにじむほど下唇を噛む。

震える掌を手首にあてる。

翼が彫られた金属を握り込む。

「タツノ……さ、ん……」

最後に愛する人の名を呼んだ。

羽があっても、風が無ければ飛び立てない。

そう知っていて、少年は境界線を踏み越えた。

かりそめフラッシュバック（後書き）

はい。こんにちは。*。（o・・）b.*。♪

何とか今週いっぱいですべて完結できる予定です♪

今日の内容を書いている時に「あれ？ 太陽ってどっちから昇るんやっただけ……」と馬鹿な56はまた悩みました。

太陽が昇る方角を思い出すときは、いつも決まってバカボンのオプニング「西から昇ったお日様が♪」って歌を思い出して、その反対だから東？って道順を踏まなきゃ思い出せない程、頭が重症です。バカボンが今回登場したのはそのためなのです！ほんと……お前がバカダ大学出身だろうがって感じですよ（ノA・。）
あ、本当はバカダ大学出身なのはバカボンじゃなくて、バカボンのパパですよ♪

同じ空の下

チヒロが死んだという話が舞い込んだのは、チヒロが姿を消して一ヶ月以上も過ぎた平日の朝だった。

「ほんまに……そいつは、チヒロが死んだと言ったんか」
「死んだとは言ってますん。」

ただ警察から電話があつて、崖の下から引き上げた身元不明の遺体があなたの名刺を持ってたから、遺体の身元を確認しに来て欲しいと言われたそうです。

特徴聞いたら、どうも少年らしいからチヒロ君違うやらかつて……。同じ話をチヒロの馴染み客数人から聞きました。」

「そいつらは遺体見たんか？」

「いえ。うちの店に通てるなんて知られるのは困るから、そんな少年は知らんと言つて誰一人警察には行つてないそうです」

墨元会が経営する風俗店のマネージャーで東山という男が朝一番、店を閉めた足で直接事務所にやって来た。

ポットの湯を入れ替えようとしていた鳴砂は、九鬼と東川の重苦しい会話に足を止めて聞き入り、愕然とした。

チヒロ君が……死んだやなんて……まさか――。

あの日あれから、組員十数人でチヒロを探した。

鳴砂が、チヒロが薬に手を出したらしいと伝えたと、売人からチヒロの居場所がつかめるかもしれないと、その方面にも人をやったが、結局チヒロの行方はつかめなかった。

『もう……生きる、価値も無い、人間です……』

チヒロが発した最後の言葉が蘇る。

この言葉が何を意味するのかは分かっていたが、鳴砂はタツノがいる前で、この言葉を九鬼に伝える勇気がどうしても出なかった。

言っておけばよかった……。例え結果が変わらなかったとしても。

「一応、何か思い出したら連絡してくれと言われた警察の連絡先を、客から聞いておきました」

東山がポケットから紙切れを出す。仕事明けのためか、男は疲れきった顔をしていた。

九鬼はその紙切れを受け取ってデスクの方へ歩き、電話の受話器を持ち上げる。

鳴砂はその合間を見計らって台所に走り、急いでポットの湯を入れ替えて事務所に戻った。

しばらく九鬼が電話で話す声がパーテーションの向こうから聞えていたが、受話器を置く音がするとすぐに鳴砂を呼んだ。

「お前さっきの話は聞いたやつやろ？　今から東山の車で警察の担当者と会って来る。

タツノが来ても、さっきの話はするな。まだチヒロやと決まった訳やない。ええな？」

「わかりました」

九鬼は電話番の男にも念を押して、東山と一緒に事務所を出て行った。

二人が帰って来たのは、それから二時間程たった頃だった。

鳴砂はソファに座り、ゲームをするタツノの隣でテレビを見ていたが、番組の内容は全然頭に入っていない。

タツノは九鬼が事務所に入って来たのを見て、慌ててゲーム機を隠した。

「あれ、東山さん。珍しいなあ、どないしたん」

「ああ、タツノ君。久しぶり」

そう言う男の顔が行く前より疲れているのを見て、鳴砂の気分が更に深く沈む。

「タツノ、ちょうどええ。ちょっと話があるんや」

九鬼が向かいのソファに腰を下ろす。東山も九鬼の隣に座った。行きには持っていなかった紙袋を持っている。

「何や？ 叔父貴」

九鬼が東山に目配せすると、東山は紙袋の中から大きなビニールの包みをいくつか取り出した。

テーブルの上に置かれたビニール袋の中身を見ると、泥だらけのTシャツとパーカー、カーゴパンツ、バッグ。もう一つの袋には小振りのスニーカーが入っている。

最後の小さなビニール袋には、財布やミネラルウォーターのペットボトル、名刺が数枚入っていた。

「これ、誰のか分かるか？」

九鬼がひと息ついてからタツノに聞いた。

タツノは眉をひそめてビニール袋を手に取り、繁々と見入る。

「これ……チヒロのやろ？ なんなん、これ」

東山の表情が辛そうに歪む。

「そうか……」。

タツノ。落ち着いて聞けよ。

先週の台風の時、五月山のドライブウェイで土砂崩れがあったや
ろ？ その復旧作業の時に、偶然崖の下で死体が見つかったな。
若い男の遺体で、これはその遺体が着てた服と遺留品や」

「……遺留品って。まさか……ほんなら、チヒロは……」

後の言葉が震える息に変わる。

ビニールを握るタツノの手に、グツと力がこもった。

鳴砂は俯いて目を閉じる。

「まあ……そういう事や。残念やけどな」

ソファアの沈みが軽くなり、隣でタツノが立ち上がったのだと分
かった。

「タ、タツノ……」

何も言わずに部屋を出て行くタツノを追いかけようと鳴砂が腰を
上げると「ええ。しばらく一人にしたいれ」と九鬼が止めた。

鳴砂はソファアに座りなおして深く息を吐く。

東山は俯いたまま張り詰めた表情をしている。

「遺体は……見てきたんですか？」

鳴砂が聞くと、九鬼は首を横に振った。

「一ヶ月近く雨ざらしになってたから腐敗がひどくてな、顔の見分
けもつけへん状態やったから、先週の始めにもう火葬したらしい。
遺体の写真はあるから見るかと言われたけど、見ても判別付けへ
んのやったら一緒やし、やめといった」

あの白くて綺麗なチヒロの顔が……。細くてきゃしゃな身体が……。

鳴砂は口元に手をやった。

「すみません。俺がもつとちゃんと見てたら……」東山が囁く。
「お前のせいやない。」

シャブに溺れる連中は、最終的にはこうならなしゃあないんや。
ラリって足でも踏み外したんやろ……。

お前が気まわしたおかげで身元不明の死体が一つ減ったんやから、
あんまり気落とすな」

九鬼はそう言うが、チヒロは間違いなく自殺だと鳴砂には分かった。

死後一ヶ月というのだから、あの日鳴砂と電話で話した後すぐ、
チヒロは崖から飛び降りたのだろう。

薬でラリった人間が、五月山のドライブウェイに行くというのも
おかしい。

何よりもチヒロが最後に言った、鳴砂だけが知っているあの言葉。
それが自殺を仄めかしている。

『もう……生きる、価値も無い、人間です……』

やはりあの時、九鬼にこの言葉を伝えておけばよかった。

そうすればもつと必死になってチヒロを探したかもしれない。

どうせまた借金を重ね、薬中になって姿を現すだろうと、次の日
にはチヒロの搜索は終わってしまった。

取り返しのつかない後悔が鳴砂を蝕む。

東山が小さなビニール袋を取り上げて言う。

「携帯がありませんね。チヒロの」

「まだ崖の下に転がってるんやろ。遺体を引き上げるだけでも大変
やったと言ってたからな。」

携帯が見つかったら、まっさきに店に連絡が来るはずや」

携帯はチヒロがわざと何処かに捨てたのでは無いかと鳴砂は思った。店や組に連絡が行って迷惑がからないように。

チヒロには数回しか会った事が無いが、それでも少年がそういう性格だということは分かった。

しばらく無音の中で、袋の中身を眺めていた。

「俺、そろそろ失礼しますわ」と東山が立ち上がる。

「ああ、悪かったな疲れてるのに。」

「今晚は店休んだらええ。誰か別の奴行かせるわ」

「いえ、大丈夫です。」

店の子達にもチヒロのこと話さなあかんし、店には出ます」

男は力無く笑う。

その週の土曜日。

午前中、助手席にタツノを乗せてカマロを走らせた。

事務所から一時間。

砂利の敷き詰められた広い駐車場に車を停めて、二人で降りる。

タツノが後部座席に乗せていた花とコンビにで買った線香を取り出す。

小さな寺門の柱に『七宵寺』と墨で書かれた板がかかっている。

境内に入って参道を歩き、井戸でバケツに水をくんでから本堂を横切って墓場へ足を踏み入れた。

敷地の一番奥、気をつけなければ見逃してしまいそうな細い道の先に共同墓地はあった。

鳴砂の身長の半分程度しかない古い石碑が正面にあり、何か漢字

で書いてあるが石が剥がれ落ちていて読めない。

石碑の後ろには数え切れないの墓石が山のように積み上げられて、暗い竹藪の中まで続いている。

無縁仏だ。長方形の墓石から地藏菩薩の形をしたもので多種多様、どれも皆古く、角がとれて丸みを帯び、彫られた字や顔は消えて傾いている。

周りに建物が無い明るい寺なのに、ここだけひっそりとしていて肌寒く感じられた。

数ヶ月前まではニコニコと鳴砂の話を聞いていた少年が、今ではその形を無くし、こんなに寂しくて暗い忘れられた場所に埋葬されている。

石碑の前にバケツを置く。枯れた花と灰になった線香が供えてあった。

振り返ると、タツノは共同墓地の敷地内に入らず、門の外からジツと思いつめた表情で墓石の山を見つめていた。

「タツノ……？」

「悪い……歩。俺……これ以上、よう行かんわ……」

震える声で途切れ途切れにそう言ったかと思うと、タツノは地面に線香が入った袋と花を置いて踵を返して歩いていった。

鳴砂はそれを追わず、地面に置かれた花を拾い上げ花瓶に飾った。線香に火をつけ、座って手を合わせる。

ただ安らかに眠って欲しいとだけ祈った。

陶器のように白く透き通ったチヒロの身体が朽ちていく情景を、鳴砂は一度夢に見た。担架と白い布の間から垂れた下がった細い腕。サラサラの髪にこびりつく泥。引き取り手も無く、横たわったまま

の小さな身体。

どんな思いで崖から飛び降りたのだろう、苦しまずに逝ったのだろうか。崖の下に落ちた後、しばらく意識があったのではないか。もしそうだとしたら、あの少年は何を思い、泣きながら誰の名を呼んだのだろう。

答えない問い掛けを無数の無縁仏が吸い取っていく。

鳴砂は立ち上がった。

車に帰ると、愛車の助手席で男がダッシュボードに頭を突っ伏し、顔を伏せている。その背中が引き攣るように僅かな上下運動を繰り返しているように見え、鳴砂は足を止めた。

もうしばらく待つか――。

寺の由来が書かれた石碑の横に腰かけ、高い空を仰ぐ。

薄いウロコ雲が覆う、爽やかな秋晴れ。

チヒロも同じ空をどこかで見ていると思っていた。

薬に溺れても、身体を売っても、生きていて欲しかった。

天高く、届かぬ思いだけが立ち昇り消えていく。

「歩さん……。歩さんって、幽霊信じます？」

デスクに肘をついてウトウトしていた鳴砂に、電話番号の菅野が声を潜ませて話しかけてきた。

「何それ、菅野君。」

またあれか？ まじない三回唱えな呪われる言う、小麦粉の神様の話？」

鳴砂が刑務所の面会室でタツノに適当に教えたアンパンマンの話

は、気が付けば事務所の下っ端ヤクザの間で噂になっていた。話が尾ひれと背びれを生やし、更にダイビングスーツまで着込んだように原型のない噂話。いつのまにかアンパンマンは小麦粉の神様に变身して、古来から伝わる呪いは国家を脅かす感染症の原因にまで昇格していた。呪いを解くまじないの文句だけが正しく伝来されていたので、辛うじて鳴砂は自分がついた嘘に騙されずに済んだのだ。

「ちゃいますやん。あれは神様でしょ？ 俺が言ってるのは幽霊ですって……」

怖いもの無しだと思っていた極道の人間は、目に見えないものが案外苦手らしい。

「ああ、幽霊なあ……。ヒュードロドロの方かあ」

「そうです、そうです。」

実は俺の彼女が今定時制の高校に通ってて、その送り迎えでよく夜中の高校に車で行くんですけどね。この前――」

「えっ、ちょお待って。菅野君って、仮免と違ったっけ？」

「そうですよ？ 仮免許」

「仮免許って、まだ一人で運転したらあかんのと違うんか？」

「そんな事ないでしょ……。俺、もう自動車学校に車運転して通ってますよ？」

そんなことをサラっと言いのける隣のヤクザの方が幽霊なんかより遙かに怖い。

「ほんなら、表に停めてあるシビック。もしかして菅野君のん？」

「はい。彼女名義で買ってます。何か？」

「そうか……。いや、まさかとは思ってます……」

鳴砂は考え込むように天井を見上げた。

「それでね、歩さん。

ちよっと前彼女を迎えに行った時に俺、あり得へん人物を見かけたんです。誰を見たと思います？」

「あり得へん人物？ 誰やろ…… マイケル・ジャクソンとかか？」
「あつ！ 惜しい！」

「ほんまかい！ そんな大物なん！？ 俺マイケルの大ファンやねんで」

「いや、大物では無いけど。一回死んだっていうのが合ってます」
「一回死んだ？」

菅野はそつと顔を寄せる。

「二週間くらい前に遺体で見つかった、チヒロってガキいましたやる？ あいつです」

「チ、チヒロ君が……！？」

「そうなんです。俺も幽霊かと思うたけど、ちゃんと足は二本付いてるし。」

彼女に聞いたら、そいつは定時制の学生で先週から授業に出てるそうです

「嘘や……まさか」

「でしょ？ でね、俺一回呼び止めてみたんです、そいつを。」

でも名前聞いたら全然違う名前やし、働いてた店の名前や東山さんの名前を出しても全く知らぬ存ぜぬで、キョトンとしてますねん。それが演技じゃなくて、ホンマに分からんって顔しますねんで？」

「やっぱり、あれ違うか？ 他人のそら似」

「いや…… あれは、そら似とかのレベル違う思うけどなあ。」

ほんでね。まだおかしい所があつて、俺そいつを迎えに来てたクラウンの後を一回車で付けたんですわ。ほんなら、どこ行ったと思います？」

「後付けたん……？ 仮免やのに……？」

この男は仮免を駆使してなんと精力的に動くことが。

「そいつを乗せたクラウンが入って行ったんは、なんと島田組の事務所やったんです！ それも、しばらくしたら島田組の若頭に肩抱

かれて、仲良う二人でお出掛けして行きましたんで」

「島田組の……若頭……？」

「はい。島田組はうちと同じ枝の組筋やから、俺も何度か若頭の顔見たことあるんです。確か名前は木場、やったかな……。でも、あの人にはイロがおったはずやのに……。いつから男好きになったんやろ……」

菅野が独り言のように言って首を傾げた。

「イロって……女のことか？」

「ええ。確かサリナ言う若い女で、えらい気が強いと噂になってましたけど……」

「なんか……ちょっと現実離れた話やな。」

チヒロ君が生きてるはずないし。生きてても、組み筋のイロしてるとてのは無いのと違うか……？」

「ですよ——。やっぱり幽霊やったんかな……」

その時、誰もいないと思っていた応接セットのソファから人影が起き上がった。

パーテーションの向うから顔を上げたのは、タツノだ。

「やばっ……」菅野が口走る。

「おい。それ、どこの高校や」

チヒロの事があって以来、ろくに喋りもせずゲームに没頭していた男が久し振りに低い声を出した。

「タ、タツノさん……今の話は——」菅野が慌てる。

「どこやと聞いてんねん！」

タツノがパーテーションを蹴った。

「……七宵学院の、定時制です……」

菅野の怯えた声を聞いてタツノは壁の時計を振り返った。

午後五時二十分。定時制の高校なら、そろそろ授業が始まる頃だ。

「菅野……車の鍵貸せ」

菅野がポケットを探り、つかみ出した鍵をタツノに差し出す。

それを受け取り、タツノは姿を消した。

その日、シビックタイプRが事務所に帰って来ることは無かった。

午後九時半。

不吉な音を立てて電話が鳴る。

同じ空の下（後書き）

本当は墓参り以降の内容は次話に入れる予定でしたが、何しろ今週中の完結……無理矢理入れちゃいました（；＾ω＾） 読んでる方にとってもその方がいいかとも思いました（。 。 ；）

あと三回！ 土曜で終わります。

明日はおそらく長くなると思います（。 ；、ω、こ）ンー 一番の山場なので……。

つ！ついに！ミニPCが届きました♪

まだ包みを開けていないんですが、もうウハウハです（*。？。 ）
ヾエヘヘ

29800円の10.1インチですが、私にとっては夢の箱

ただ、そのPCを「便利そうやな～」とか言って旦那も一緒に使おうとしているところが危険……お前は古いタワー型で我慢なさい（。 ㇿ ）ノ（ ）

サリナ登場

「九鬼さん。本部事務所から電話です」

電話番号の菅野が、受話器を押さえながら九鬼へ渡す。

九鬼は一つ息を付き、受話器を受け取る。

「俺や、どうした。」

……ああ、ちよつとした手違いがあつてな。それは向うの勘違いや。

島田組には俺から説明して納まりつけとくから、この事は上には報告すんな。何かあつたら俺に直接連絡せえ。ええな」

電話を切ると九鬼は回転椅子に腰を落とし、天井を仰いで息を吐いた。

「まずいな……」

「何かあつたんですか？」

鳴砂が恐々と聞く。

「おう。若頭のイロを、うちの組員が連れ去つたと言つて島田組が本部に連絡してきよつた」

うちの組員……タツノのことだ。

そして若頭のイロは、チヒロにそっくりの少年。

きつとタツノはこの事務所を出て直接定時制高校へ行き、そこに

いたチヒロにそっくりの少年を車で連れ去ったのだ。
なんてアホなことを――。

鳴砂は九鬼が事務所に帰ってきてすぐに、チヒロにそっくりな少年の存在、その少年を追ってタツノが姿を消した事と伝えた。

九鬼はその少年がチヒロかもしれないという意見を他人のそら似と取り合わなかったが、問題はそこではなかった。その少年がチヒロであろうとなかろうと、組織幹部のイロ、すなわち若頭の愛人に手を出すことが問題だったのだ。

島田組と墨元会は同じ枝の組筋なので、向うはタツノの顔も知っている。

タツノが若頭の愛人である少年を連れ去ったと知れば、当然墨元の本部に島田組からどういつもりなのかと連絡が入る。
それが今まさに現実となって訪れたのだ。

携帯の着信音――。

鳴砂は携帯を開き、表示を見てハッとした。

「タツノやつ！」

九鬼の顔にも緊張が走る。

すぐさま通話ボタンを押した。

「もしもし？」

『歩か？ 俺や』

「タツノ……！？」

お前、何してんねん！ 何回も電話したのに。今どこや！？」

『悪い。運転中で出れへんかった。』

場所は……ちよつと言えやん。俺、しばらくそつちには帰らへんから、叔父貴にそう伝えてくれ』

「帰らへんって……。今、あの……言うてた子と一緒になんか？ チヒロ君にそっくりな子……」

『そっくりな子と違う。こいつはチヒロや、間違いない。今隣にいる。』

確かに店で働いてた時の事とか俺の事とか、記憶は無くしてるけど、どう見てもチヒロや。体付きも、髪の毛も、肌も……全部。俺がやった時計もちゃんとしてる』

タツノの声がやけに落ち着いていて怖い。

「タツノ……。俺らの話し聞いてたやろ？ その子は今島田組の幹部の愛人やねん。そんな子無理矢理連れ去って——」

『無理矢理と違う。』

ちゃんとチヒロに土下座して一緒に来てくれと言った。チヒロも納得して俺に付いて来てくれてるんや』

そらヤクザに土下座されたら、誰でも付いて行くがな——。変に物で釣るよりたちの悪い誘拐だ。

「あのなあ……そういう問題と違うやろ？ さっき本部事務所から電話があつて、島田組がどういつもりやと連絡してきた言うてたお前……これがどんなけ大変な事が分かってるんか？」

『何やねん。組員みたいな事言うて……。歩は俺の友達なんやろ？ ほんなら俺の味方と違うんかい』

「そら……もちろん、タツノの味方やけど……」

あかん。何ぼ言うても無理や——。それにこの時間まで運転をしていたとなると、もうかなり遠くまで行っている。

九鬼に目配せして首を横に振ると、九鬼は舌打ちをして顔を歪めた。

『俺のことは絶縁なり破門なり好きにせえと、叔父貴に伝えてくれ。ほんならな』

「おいっ……！」

無情にも回線は途絶えた。

「絶縁なり破門なり好きにしてくれと言っていました」

携帯を閉じてデスクの前に座る九鬼に言う。

「あかん……。俺、忘れとったわあ。自分の甥っ子が、死んでも治らんアホやという事を……」

そう言っ内ポケットから煙草を取り出す。

「連れ去った少年は、絶対チヒロ君で間違いないって言うてたけど……」

「どうせチヒロの事がショックで、正常な判断が出来てへんだけや。アイツのメンタルは豆腐くらい崩れやすいからな」

「でも……俺は何か、ほんまにチヒロ君が生きてるような気がしてきた」

鳴砂が独り言のように呟くと、九鬼がゆっくりと振り向いた。

「俺が借りてるチヒロ君の部屋に、高校の教科書が置いてあるんです。中にはギッシリ書き込みがしてあって、いかにも勉強した形跡があった。」

チヒロ君、中卒やと言ってたけど、きつと高校行きたかったんと違うかなあ……。

だから定時制の高校というのが、どうしてもチヒロ君に重なるんです。

九鬼さん。チヒロ君が死んだと言った警察官は信用出来るんですか？ 結局遺体だって誰も確認してへんし、あるのは着てた服と遺留品だけでしょ？」

「その事やけどなあ……」。

少し前に調べさしたら、その警官、木村というたか、タツノがボコボコにして病院送りにした警察官の元同僚やったんや」

「それって……！」

「おかしいとは思ってたけど、遺体の写真も持ってたしなあ。警察は信用できんだけど、つかませた金は信用できる。まあ渡した金が多かったか少なかったかは判断つかんけどな」

なんやねん。おかしいと思おてたなら先に何とかせえよ――。

結局、一番の元凶はやっぱりこの男だと判明した。甥、叔父共に頭のネジが一二本外れて、回路が狂って電気信号に無駄な抵抗ばかりまくっている。

「ほんならやっぱり、チヒロ君生きてるんと違いますか？ でも何で島田組の幹部の愛人なんか……」

「タツノが病院送りにした警察官。ああいう不良警官はな、だいたいどっかの極道と繋がりがあるもんや。お互い持ちつ持たれつで良い生活しとんねん」

これで何となく繋がった。

「九鬼さん。これあくまで俺の想像やけど。」

やっぱりチヒロ君は生きてると思う。

あの日、チヒロ君は薬をやったと言ってたけど、もしかしたら薬を貰った相手は、その木村という警察官違いますか？ タツノがボコボコにした木村の元同僚だって薬でチヒロ君を釣ったんやから、充分考えられます。あんなに薬の売人をあたって調べたのに情報が何も無かったのも納得できる。

もし薬を渡した相手が警官やなくても、チヒロ君は何かのショックで記憶喪失になってる。もしかしたら何処からか飛び降りたのはホンマかもしれん。それで病院に送られたら病院は当然警察に連絡

するから、やっぱり最終的にはどうやってもチヒロ君は警察につながる。

木村が何かの理由で、親しくしている島田組にチヒロ君を貢いだとしたら……全部説明がつくやないですか」

「まあ……そう言われたらそうやけど。そんなサスペンスドラマみたいなことあるかあ？ 記憶喪失で……」

「俺の伯父さんが東京で精神科のメンタルクリニックしてるんやけど。伯父さんは、記憶障害言っんかなあ……そういうのは精神的なショックでも起こると言うてた。詳しくは分らんけど、あの日チヒロ君に何かあったんは確かでしょ……？」

ねえ、九鬼さん。チヒロ君は元々この組の店の従業員なんやから、島田組にそう言うたらええやないですか。むしろ、勝手に連れて行ったんはそっちの方やと」

「無理やな。だいたい本人もおれへんのに、どうやってそのガキがチヒロやと証明するねん」

「そら……その通りです。」

タツノ君の行きそうな所、心当たり無いんですか？」

「無くは、無い。」

ただなあ。島田組の若頭の木場には確か愛人がおったはずやねん。サリナっちゅう名前のな。男が好きやなんて噂聞いたことないけどなあ」

鳴砂は溜め息をついて、力なくデスクに頬をつけた。

九鬼が紫煙を吐く。

「どいつもこいつも……アホばっかやのお」と天井を見上げる。

「しゃあない。……行くか。島田の事務所へ」

閑静な住宅街の中ほど。日本家屋を改築した造りの事務所に到着したのが夜の十時過ぎだった。

木の表札には堂々と『島田組』と掲げられている。

「お前は車で待ってる。俺ひとりで行く。

三十分経つても俺が帰って見えへんかったら、チャンスや思て逃げたらええ」

「逃げたらええって……そんな」

「東京でも何処でも、好きな所に行きさらせ」

九鬼は鼻で笑った。

「レクサスの修理費はどないなるんです？」

「おお。一応お前のカラカラ鳴つとる脳ミソでも俺の愛車を覚えとってくれたか」

忘れてたんやない。修理から返って来るのがあまりにも遅いから、かかった値段が怖くて聞けなかったんや――。

「レクサスは廃車や。修理代がソロバンに合わん」

「マジ……ですか？」

「そんな不安そな顔するな。お前みたいな退職金と少ない収入だけで食ってる定年後のジジイみたいな奴に、新車を買えとは言わんわ。新しい住所だけ後で連絡せえ、優しい優しい九鬼さんがお前の働きぶりを考慮に入れた、ありがたい見積もりを送ったるやないけ」

「でも、何かそんなん……俺だけ良い思いしても……」

鳴砂が口ごもる。

確かに修理費が安くつくのは助かる。遠くに行けるのも嬉しい。でもそれは、何かが違う。

九鬼が島田組に話し合いに行けば、タツノとチヒロは追われずに済むかもしれない。

でも同時に九鬼もタダでは済まないのだ。

「お前そんなん言うてたら、いつまでたつても今のままやぞ？　みんなの願いはいっぺんには叶わんのや。せつかくのチャンスやねんからモノにせえよ。帰って来てまだおつたら、もう二度と俺から逃げられへんかもしれへんぞ？」

男は笑った。

数ヶ月前にも一度チャンスは訪れた。それを奪ったのが他でもない、このヤクザだ。

九鬼が助手席のドアを開ける。

「九鬼さん……死なんとなつて、下さい……」

切実な思いで男を見つめると、男は眉を寄せた。

「いや、勝手に人を殺すな。まあ何されても文句言えん立場やけどな……。死にはせんやろ……。なんぼなんでも」

「九鬼さん……ちゃんと俺、お盆とお彼岸にはお参りに寄せてもらいますから」

頭を下げる鳴砂をひと睨みして、九鬼は車を降りて行った。

長い三十分だった。

暇を持て余す訳でも無く、ジッとダッシュボードのデジタル時計を見つめていた。

何も起こらないまま三十分が過ぎ、九鬼はやはり帰って来なかった。

鳴砂はシートにもたれかかって目を閉じる。
さて。どうしたものか――。

今ここで鳴砂が逃げればどうなる。

新しい町。新しい部屋。新しい仕事。

少ない見積もりを払って、余った金で愛車のシートをグレードアップする。

ずっと夢見ていたことなのに、何かが違う。そう思わせる理由を探すと、頭に浮かぶ男の顔。

数が月前まで胸をときめかせて見ていた夢を、今ではつまらないと感じさせる強引な存在。

一度死んだはずの少年。

姿を消した親友。

自分に逃げると言った男。

全ての原因が自分だと感じられる。

じゃあないか――。

鳴砂はドアロックを解除した。

車から降りて事務所の引き戸を開けると、同時に部屋で煙草を吸っていた強面二人が立ち上がる。

驚いた表情の男二人の間をすり抜け、鳴砂は奥の応接室に向かった。

ドアの前に立つと、中から話し声は聞こえない。

思い切ってドアノブを回して押すと、中には予想通りの顔が二つ。

上座に座る男が鳴砂に気付き顔を上げた。

手前のソファ―に座っていた九鬼も振り向く。

「お前……車で待ってる——」

上座の男が顎に手をやり、目を細めた。

「久しぶりやな。サリナ」

鳴砂は笑った。

「コウイチさん。また下っ端の組員いじめてんのん？ やめてあげ
えや。可哀想に」

サリナ登場（後書き）

今日は都合上、二話続けて更新です。ペコ
次話へどうぞ。・・・っ

天地返る（前書き）

【注：本日二話目の更新です。

前話「サリナ登場」を未読の方は、そちらの方からお読み下さいませ】

天地返る

「久し振りやな。サリナ」

木場がシルバーフレームの眼鏡の奥、冷気を含んだ視線を細める。
鳴砂は笑った。

「コウイチさん。また下っ端の組員いじめてんのん？ やめてあげ
えや。可哀想に」

そう言つて九鬼の隣に腰を下ろすと、九鬼は固まった表情のまま
鳴砂をずっと見つめている。

「お前……まさか……」

「驚いたな。高速の入り口付近で見失うたと聞いてたから、もうと
つくに東京にでも逃げてるんかと思てたら……なんや、組筋に世話
してもろてたんかい。大したもんやな。」

さすがに組の会計を誘惑して、金とチャカ持つて逃げただけのこ
とはあるがな。

東京に探しに行かせた奴等に電話して、帰つて来させなあかん」

木場は鳴砂から視線を外さず、煙草を吸い付けた。

「金は持ち逃げしたんと違う。あれは退職金や」

「ほお。こっちは退職てなもん認めた覚えはないんやけどなあ」

木場は余裕のある含み笑いを見せた。

「依願退職や。コウイチさんの相手するんにも愛想が尽きてん」

「歩。わしはお前のために離婚して、ちゃんと籍まで入れようと言
うた。そこまでしとんのに、何が不満やねん」

「ほんなら聞くけど、コウイチさんこそ俺の何が不満やねん。あんな名前も知らんような男と寝て」

「なんべん言ったらわかるんや。あれは付き合いや。紹介されたら、
そうせなあかん時もある」

「ふうん。付き合いって、警察と？ 警察官に紹介されたら誰とで
も寝るん？」

木場の視線が更に細くなる。

「歩。知らん方がええこともあるんやぞ？」

それにお前も人のことは言えんやろ。会計の山内を『どうして
も今すぐに会いたい』と涙声でたぶらかしたそやな……。

その隣の男とはもう寝たんか？」

鳴砂の表情がフツと消え、目が据わる。

「コウイチさん。ええ事一つ教えてあげるわ。

持って逃げたあの拳銃は、コウイチさんと心中するために使うつ
もりやったんやで？」

それをあの会計の男がやめとけと言うから、代わりに退職金で我
慢したんや。だから、あの山内という人に感謝せなあかねんで？」

コウイチさん。

あの人おらんかったら、今頃俺と二人で地獄の入り口や」

「なかなか泣ける話やないか。

組の金を五千万も持ち出すよりは、ずっとそっちの方がええ。何

でそないせんだんや」

「そうしたら一緒に死んでくれはったんですか？」

「さあな」と言つて木場は眼鏡のレンズを反射させ、顎を上げて煙を吹き上げる。

顔をしかめて二人の話をジツと聞いていた九鬼に、木場が向き直る。

「九鬼君いうたか……悪いけど、今日のところは帰ってくれるか？
わしはこいつと二人で話さなあかん」

「そういう訳にはいかへんねん。コウイチさん」鳴砂が遮る。

「コウイチさんが俺の後釜に据えようとしてた子。あの子は元々墨元の経営する店で働いてた子や。

チヒロ君言つて、今はその時の記憶が無いけど、俺の親友の恋人やねん。愛し合う二人を引き裂くやなんて、悪趣味やで？」

「なんや。ほんなら連れ去つたというのは、お前の親友か。

そうか……チヒロ言つんか、あの子は。お前と違おて、わがまま言わんええ子やった」

「せやろ？ コウイチさんには勿体無いんと違う？」

木場が溜め息をつく。

「お前……自分の立場が分かつて、もの言つてるんか？ まさか一年以上もここに出入りしとったくせに、組の金を持ち出してタダで済むとは思てへんやろな。

まあええ。その話はあとや。

九鬼君。そういうことなら、あのチヒロたらしい子はあるたの所に返そ。元々頼まれて与つてただけやし、手も出してへんから綺麗

なままや。

そのかわり金輪際、歩の件には関わるな。何かあったら、俺は墨元が組の金を持って逃げた逃亡犯をかくまったと上に伝える。そうになったら抗争や。同じ枝の組み同士が争い合ういうことはどういう事かくらいは、あんたも極道やったら分かっとるわなあ」

開いた足の間に両手を垂らし、前屈みになって木場は九鬼の顔を覗きこんだ。

九鬼のこめかみに、汗が一筋伝う。

「木場さん。すみませんけど、二人で話させて下さい。鳴砂と」
九鬼が張り詰めた声で言うと、木場は壁の時計にチラリと目をやる。

「五分や。それが終わったらさっさと帰れ。」

歩は俺の部屋へ来い。しっかり話をつけんといかん」

そう言っつて煙草を灰皿に擦り付け、木場は部屋を出て行った。

九鬼が立ち上がる。

息を吐いて鳴砂を正面から見下ろし苦笑する。

「どつりでな。極道慣れし過ぎてると思ってたんや。」

お前が……サリナか。

そついや、反対から読んだらサリナになるもんな。サリナ、ナリサか。上手いこと考えてある」

鳴砂も立ち上がった。

「ごめんなさい。いつまでも隠し通せるとは思ってたけど……」

「結局俺もタツノも利用されとったんやな。どこまでが嘘やったんや。タツノと事故起こしたん、あれも全部計画の内か？」

鳴砂は目を伏せて、寂しく笑う。

「あれはホンマの話です。信じてもらわれへんやろうけど、タツノに出会ったのも、墨元に潜り込めたのも、全部偶然。計画なんかやない。身元が知れたら迷惑がかかるんは分かってたけど、だんだん居心地が良くなってしもて……逃げる機会を失った」

「お前これからどないすんねん。五千万で……。さすがにタダでは済まんぞ？」

「ええんです、俺は。九鬼さんとおれて楽しかったし、元々死のうとしてたんやから覚悟は出来てる。」

事務所に帰って、タツノとチヒロ君を呼び戻してあげて下さい」

「自分の身だけ犠牲にしたら、後は上手く納まるってか。気に入らんなあ、そういうんは」

鳴砂は九鬼の背中にそつと両手を回した。

スーツの胸板、柔らかい生地頬を寄せると温かい。瞳を閉じた。

「みんなの願いはいつぺんには叶わんと言ったんは、九鬼さんやないですか……」

顔の右斜め上で、深いため息が聞こえた。

「車のダッシュボードの中に指輪ケースがあって、その中に鍵が入ってます。ここからすぐの駅にあるコインロッカーの鍵です。」

金も拳銃も手付かずのまま入ってるから、全部九鬼さんにあげます。それで新車でも買おて下さい。残った分でチヒロ君の学費を払って、私立の大学にでも行かせてあげて下さい。あと残った分で、事務所の改築でもしたらええんと違いますかね。ほら、東京の組事務所みたいにお洒落な感じに」

「アホか。あんなこ洒落た事務所に極道が通てたまるか。
金もチャカもここへ返せ。それがお前の為や」

「九鬼さん。俺にも意地つてもんがあります。
本気で好いた相手に浮気されて、逃げたと思ったら、のこのこと
帰って来て。お金を返すから許してくださいなんて事、絶対言いと
おないんです。それに金が返ってきたところで、俺の立場は変わら
へん」

真剣に言つと、また九鬼が息を吐く。

鳴砂は車の鍵を九鬼のポケットに忍ばせた。

不意に肩をつかまれ、身体が離れる。

「もうええ、お前なんか。好きにさらせ……」

小さく呟き、九鬼は部屋を出て行った。

後ろを振り向いて背中を見送ることもせず、鳴砂はかすかに微笑
んだ。

しばらくして愛車のエンジン音が外で唸る。

「遅かったな……」

部屋を出て二階へ上がり、突き当りの部屋に入ると、木場はダウ
ンライトだけの薄暗い部屋の中で、一人掛けのソファーに足を組ん
で座り、煙草を吸っていた。重厚な革張りのカウチソファーに、そ
ろいのローテーブル。棚に並ぶ酒瓶。センスのいいカーテン。前は
よく静かなジャズが流れていた。

鳴砂はこの部屋が好きだった。強い酒と心地よい雰囲気のにまれ

て、よくこのソファで木場と肌を合わせた。ここで身体を重ねていたのが自分だけではないと知って逆上したこともあったが、不思議なくらいに今は何も感じない。

「そんな所で突っ立つとらんと、中に入れ」

言われて部屋のドアをしめ、木場の前に歩み寄る。

白い煙越しに鋭い視線が鳴砂を刺す。

「どうした。ストリップでもして、わしの機嫌を取った方がええのと違うか？」

鳴砂は鼻で笑う。

「歩。金はどこや。」

金の在り処を言うて、ひざまずいて許しを請うたら、お前の進退考えたらんこともない」

「冗談。金なんか一銭も残ってへんよ？ 組筋にかくまってもらには、ぎょうさん金がいるねん」

途端、下腹部に衝撃が走り、身体が後ろへ吹っ飛ぶ。

ローテーブルに背中を打ちつけ、派手な音を立てて倒れこむ。

「痛っ……」

顔を歪めて手をつき、上半身を起こした。

「お前はほんまに賤しづがなつてない。わしが甘やかし過ぎたなあ。

ええ加減なことばかりぬかしやがって。きちんと賤し直さなあかん」

木場がゆっくりと立ち上がる。

床に倒れたまま、鳴砂は表情を強張らせて後ずさる。

「歩。お前は今日から人間以下や。これからペットとしてここで飼おて、飼い主への忠誠いうもんを、きつちりその身体に覚え込まし

たるわ。金の在り処は、そのうち嫌でも吐きたくなるやろ」

額に冷や汗がにじむ。

鳴砂の足元に木場が一步近付いた。

唾を飲み込み更に後ずさると、背中に壁が当たる。

「ずっと愛人の地位で満足してたら良かったものを。ほんまにお前はアホや。

とりあえず服は脱ごうや、歩君。ペットに衣類はいらんやろ。せや、名前も——」

地響きを伴う轟音——。

地震のように部屋が揺れ、カチャカチャと棚の酒瓶が音を鳴らす。

「なんや……?」

木場は顔をしかめて窓の方へ歩き、ブラインドの間から外を覗く。しばらくすると、勢い良く部屋のドアが開いた。

「九鬼……さ、ん……」

そこには見慣れた男が立っていた。見覚えのあるボストンバッグを持っている。

「なんやお前。帰ったんと違うんかい」

状況が把握できない木場は、九鬼を見るなり言った。

九鬼は何も言わずに持っていたバッグを床に投げる。

ドサリと落ちたバッグの開いた口から、札束が覗いている。鳴砂の顔が凍りつく。

「これは鳴砂が持って逃げた金や。五千万の半分、二千五百入ってる。」

残り半分の金とチャカはコインロッカーに置いてきた。

この鍵と、そのガキとを交換や」

九鬼が真剣な顔の横で、小さな鍵を振る。

「はあ？」

一番声を発するに相応しくない鳴砂の口から声が漏れた。

「お前……面白い奴やなあ。そんな要求わしがのむ思てんのか？金もチャカもこいつも、元々は全部こっちのもんやねんぞ？」

木場は嘲笑う。

「木場さん。この要求をのんでもらわれへんのやつたら、俺は今から島田の本部に金とチャカを持ち込む。あんたの組が逃がした幹部の愛人を俺が代わりに捕まえて、金とチャカを取り返してやったと言つてな」

眼鏡のレンズが乱反射。さっきまでの表情が一転して、木場の顔が強張る。

「どうせ金を持ち逃げされた事は本部には言つてへんのやろ？そら組の恥やもんなあ。その恥を他の組のもんが尻拭いしたと知つたら上はどう思つやろな。」

わざわざ女名で呼んでまで隠してたあんたの性癖も皆にばれてしまうで？

それになあ。あんたと癒着してる警官の名前は割れとんねん。組同士の抗争は避けるけど、腐れ警官の悪行を雑誌に売るくらいは、こっちにとつては屁でもないんや。

よう考えてみい。悪い条件ちゃう思つけどなあ」

いけしゃあしゃあと話す九鬼を、木場が殺意のこもった目で睨んでいる。

「ああ、それとな。言い忘れとったわ。

俺と歩はずっと前から両思いなんや。金と権力にもの言わせて、愛する二人を引き裂くてなことは愚の骨頂やで？ 木場さん」

「ほんまか？ 歩」

横目で鳴砂を見下す。

どう答えればいいのか分からず気まずそうにしていると、代わりに九鬼が答えた。

「ほれみてみい、照れてるやんけ。もう数え切れんくらい愛し合ってるねん俺達。あんたより俺の方がずっと体力あるし、満足してくれてるで」

「ひっ……」

あまりにも突拍子も無い展開に、しゃっくりが出だした。鳴砂は口元を両手で押さえる。

木場はゆっくりとソファーに歩き、背中から倒れこむように腰を下ろした。大きく息を吐き、灰皿に置いていた煙草を吸いつける。

「アホらしい……ガキの遊びには付き合ってられへん」
呆れたように吐き捨てる。

「さっさと鍵置いて消えろや。目障りじゃ……」

そう言う男の顔見て、何故か胸元が少しズキリとした。

どうかその言葉が本心であってくれるようにと祈る。わがままな

鳴砂の事を、何よりも大切にしてくれていた時期もあった。
自分しか知らない男の素顔がよぎる。

「行くぞ」と差し伸べられた掌につかまり、立ち上がる。
九鬼はコインロッカーの鍵をポストンバックの横に放り投げた。

「九鬼、氣い付けえよ。怖いぞ？ そのガキを怒らせると。その内、
後ろから刺されんようになあ」

木場が冷笑しながら言う。

「木場さん。モテへん男の忠告なんざ、ひがみにしか聞こえへんで
？ 惚れたイロに刺されて死んだら本望やんけ」

部屋から出る九鬼に続いて鳴砂も廊下に踏み出す。

最後に振り返って見たレンズ越しの瞳があまりにも優しく見えて、
水気の混ざるしゃつくりを抑えた。

「嘘やろ……？」

島田組の事務所を出てから、道路に停めてあった自分の愛車を見て、
鳴砂はしゃつくりが止まった。

駐車してあるというよりは、辛うじて停まりましたという惨状。
さっきの轟音の訳を知る。

シボレーカマロの純白のボディ横一面に、コンクリート壁に擦り
付けたようなグ黒い縞模様が入っている。一番ショッキングなのが、
フロントバンパーのど真ん中に電柱が食い込んでいること。

同じ惨劇でも、人の車と自分の車ではこんなにも感じ方が違う
のだと教えられた。

「わざとや……。わざとでしょ？　これ！」

悲痛な叫びを九鬼に投げかけると、男は甥によく似た澄ました表情をする。

「左ハンドルは初めてやったからなあ。

避け切れそうやったけど、もう潔く突っ込んでいた……」

「それ、わざとやないですか！」

「やいのやいのとるさいぞ。はよ乗れ」

こともあろうに九鬼は運転席に乗り込む。

無いわあ——。

息を吐いて首を横に振りながら、鳴砂は助手席のドアを開ける。

一時間程フロントの凹んだカマロを走らせた。

隣でハンドルをにぎる九鬼の姿が、やけに眩しい。運転席を見るだけで、何故か無性にドキドキする。丁寧で慎重な、良い運転だった。

夜の一時半。

石油コンビナートの一角、誰もいない港で車を停める。車体から数メートル先に、黒い波紋をたゆませる漆黒の海面が広がっていた。

「お前、これからどうするんや……」

ハンドルに両腕を置き、フロントガラスの先を見つめながら九鬼が言う。

「さあ、どうしょ。家無し職無しの上に、金も無くなってもたし

……」

「東京……行くんか？」

どこか気まずそうな小さな声。

「それもええかもしれませんね。東京行って、また一からやり直すのも……。」

ほら、何て言いましたっけ、九鬼さんの従兄弟。マサトさん言うたっけ？ 格好良かったなあ、あの人。

俺、あの人の所に転がり込もかなあ」

「お前アホか！ あいつは無類の女好きやねんぞ？ 天地がひっくり返っても、あいつが男を好きになるてな事があるかい。チャカで撃ち殺されるで」

「九鬼さんはあの人に嫌われてるから、そう思うだけでしょ？ 行ってみんと分かんやないですか」

「行ってみんでも分かるわい。何がええねん！ あんな奴……」

何が言いたいのか分からない九鬼に溜め息を付く。

「俺、年上の男の人が好きやねん。コウイチさ……木場さんもそうやったけど、人の上に立つくらいの権力持つてる男に惹かれる。歳は……出来たら四十過ぎがいいかなあ」

窓に頭で持たれて、うつとりとしながら聞かれてもいないのに自分の好みのタイプを暴露する。

「俺かてあと十年もしたらそうなるやんけ。

俺にしといたら、ええんと違うんか……」

え——？

鳴砂が身を起こす。

九鬼はハンドルに置いた腕に頭を乗せて、むこうを向いている。

「九鬼さん……それ。もしかして、告白ですか……？」

「違う。口説いてるだけや」

どんな顔してそんな事を言っているのだろうと面白くなってきて、九鬼の頭を覗き込む。

突然身体を引っ張られ、つよく抱き締められたと思ったら唇を奪われた。

「んっ……」

すぐさま隙間から熱い粘膜が滑り込み、口内を掻き混ぜる。

荒々しく煙草の匂いを擦り付けていく。

久し振りの感覚に後頭部が痺れる。

舌を吸われて、混ざり合った唾液が口の端から顎に伝う。

「っんあ……んん——」

性交渉のような生々しいキスに甘い声が漏れ出した。

徐々に隙間から漏れる息が湿気を運び、激しさを増す。

気がつけば、もっと繋がりを求めるように九鬼の頭に両腕を回していた。

「っは……、九鬼、さん……ここでは、まずいですって……誰かに見られたら……んっ、あん——」

やっと解放された酸欠状態の口で首元を這う男に呼びかけるが、返事はない。それどころか皮膚の薄い部分を甘噛みされて艶っぽい息を漏らし、自分と男の興奮を助長してしまう。

シャツのボタンを外そうとしてくる九鬼の手を押さえると、その手に指が絡みシートに縫い付けられて、自由を一つ失った。

「言つたはずや。あの時逃げんと、もう俺からは逃げれんようになる」と

わずかに唇が触れる距離で真剣な声がする。
色気のある低い声に、身体がうずく。

「そんなこと言うて。九鬼さんの方こそ、俺から逃げれんようにな
っても、知らんねんから……」

吐息混じりに囁き、男の頬を指でなぞる。
また唇が繋がる。

全ての不安を忘れて求め合う。

シートを倒す。

熱気がこもって窓が曇る。

車両の間違った使用例。

海沿いに停まる、フロントの潰れた白のカマロが、波よりも激し
く車体を揺らした。

天地返る（後書き）

ふう ε・（´ωノー十

長くなりそうだったのとキリが良かったので、二話に割らせて頂きました。一日に二度も更新してしまつてごめんなさい。○ペコ
来週からは仕事復帰で余裕が無くなってしまうので、何とか土曜に完結させます。

急ピッチで山越えしまして……いいのだろうか、こんなんでは……

（´・・・・；）

せめてくだらない後書は省略して、執筆に励みます♪

ではではm（――）m

車内恋愛（前書き）

【注意：B L要素の性描写が少しだけ含まれますので、苦手な方、15歳未満の方、義務教育中の方はご遠慮くださいませ】

車内恋愛

「あ、あつ……んう……」

「歩……気持ちええか？」

荒ぶる喘ぎを抑えながら、もうろつとする頭を縦に何度も振る。
下から揺さぶられる激震に耐え、窓上のアシストグリップを握ると、汗で両手が滑りそうになった。

「ん、っあ……あアア……い、いいッ、ああ……」

「あいつと、どっちがええんや。あのコウイチって奴と」

助手席のシートの上で余裕の表情を浮かべる男が、指先で鳴砂の唇をなぞりながら意地の悪い質問をする。

エンジン以外の駆動力で車体を揺らすこと半時間以上。既に窓全面を曇らせて、車内をこれ以上なく濃艶な熱い空気で満たしている。

「く、九鬼さん……九鬼さ、んっのが……深く、て……激しく……
てっ、い、っ気持ちい……やぁッアああ……っあ、ああアアッ！」

口に触れる指を甘噛みしながら言うと、急に腕を引っ張られて両手がグリップから外れ、身体が男の上に深く沈む。

自重で繋がりを増しながら、きつく抱き寄せられてた先で汗を弾く広い背中に両手を回し、男の胸元に頬を寄せる。

大きな乱れを抑制する狭い空間が、余計に発熱を促し興奮を煽る。
抑圧された欲望が、シートを汚した。

濡れた身体を助手席のシートに横たえ、痺れる指先でシャツのボタンをとめる。熱を宿した手先が思い通りに動かず、ボタンひとつがもどかしい。

車内全体がまだ火照っている。

運転席に戻った男が小さな金属音をたててベルトを締め、後部座席に放り投げてあったスーツのジャケットを着込む。あまりにも無駄が無い所作に、こちらが気後れを感じた。

情事の余韻を色濃く残した自分の身体は、まだ上半身が裸に近い。ボタンに触れる指がジンと疼く。

「歩。さっきの話やけどなあ……。」

ええねんな？ 俺のイロっちゅうことで」

ネクタイを締めながら言う九鬼と、バックミラーの中で目線が合う。

「なんて野暮な事、聞くんです…… あんな最中に、いろいろと云わせといて……」

口を尖らせ、シートを起こす。

フロントガラスに、白いスモーク加工が施されている。二人分の激しい息遣いを思い出して、また顔面を焦がした。

「お前は上手いこと言うて、すぐどっかに消えてまいそつやから、はつきりさせとかなあかんねん。」

それに、木場とのことはもうええんか……？ 別れる時なんかちよつと、しみりしとつたやんけ」

「ええんです、木場さんとの事は。本気で好きやったけど……。」

あの人とは、付き合うとか愛人とか、そんな関係じゃなかった時の方が俺は好きやった。ただ両思いやから近くにいてただけで満足やったのに。

向こうが離婚して籍を入れるとなったら、許せたことも許せんようになる。例えそれが仕方ない事やと分かっていてもね。

元々合うて無かったんや。そういう相手やったってことです。

物事は未完成のままの方が、ずっと魅力的なこともあるって知りました」

「えらい冷めた事ぬかすんやな」

九鬼がむこうを向いて、曇った窓ガラスを眺める。

「九鬼さんこそ、ええんですか？ 俺なんかで」

「ああ」と男は口ごもる。

「俺、わがままですよ？」

「知つとる」

「それでも結構氣が多い方やから、ちゃんと捕まえとつてくれんとすぐに逃げてしまうかも……」

「心配せんでも夢中にさしたるがな。幸せ過ぎて泣かしたる」

九鬼はせせら笑う。

「ほんなら、今ここで車ごと海に突っ込んで、一緒に死んでくれと言ったらどうします？」

九鬼がゆっくりとこちらを向き、鳴砂の真意を確かめるように目を細めた。

改めて男の顔を見ると、その格好良さに見惚れる。既にこの男を身体に受け入れてしまったことで、そう見えるように脳の設定が切り替わったのだ。

これから毎日この男を見るたびに、うら若い乙女のように胸をと

きめかせるのだと知り、やっかいな事になったと鳴砂は思う。

「嘘つ。俺、死ぬときは人に迷惑いっぱいかけて、もっと派手に死にます。」

でも……ふうん。九鬼さん、そんなに俺の事好きなんやあ」

「やかましい。さっさと服着ろや」

九鬼は鍵を回してエンジンをかける。エアコンをかけて、フロントガラスの曇りを取っていく。

「俺のどういふところが好きなんです？ 可愛いところ？ 甘え上手なところ？ 謙虚で奥ゆかしいところとか？ あっ……もしかして全部？」

「しばらくぞこら。どの口が謙虚とほざくんじゃい」

「なあ、タカヒコお——。チューしてえ」

「うるさい。死んでまえ」

「ほんまに死んだら泣くくせに」

「誰が泣くか。生ゴミとして燃えるゴミの日に出したるわ。お前なんか」

からかえばからかう程、九鬼が強がる小学生のようで面白い。

二人の息で曇ったガラスが、徐々に外の暗闇に染まっていく。

九鬼がハンドブレーキを外し、アクセルを踏み込む。凹んだ車体が動き出す。

「そついえば、お前。木場に向かって俺の事を下っ端の組員と言うてたな……」

そういう無駄な事だけはよく覚えていたのだと感心する。

「怖いわあ九鬼さん。それ幻聴ちゃいます？」

「まあええ。後ろの紙袋の中、見てみるや」

言われて上半身をひねり、後部座席を覗き込む。シートの下にうずくまっている紙袋を見つけた。

手を伸ばして中を見ると、帯付きの札束がいくつも入っている。

鳴砂は目を見開いた。

「えっ……！ これ……」

「千五百万や。残りの金の中からもらつといた」

正面を見たままニヤリとする。

「なっ！ あんた何考えてんねん！ この期に及んで組の金を盗むやなんて」

「今、あんたと言ったな……？」

「信じられへん！ どんだけ捨て身な人生送るつもりやねん」

「お前にだけは言われとうないわ」

「まあ、落ち着け」と伸びてきた手に殴られるのかと思いきや、大きな掌は鳴砂の頭をひと撫でして前髪をかすめて引っ込んでいった。な、なんやねん——。思いながらも、少し嬉しくなるところが症状の悪さだ。

「五千万は取りすぎや。木場も上に報告せん訳にはいかんようになる。でも千五百やったら、あいつの定期預金ひとつ潰したら片つくやろ」

「そんなことして、あの人黙ってるはずないやないですか」

「あの時も言ったやろ？ こっちは向うの弱みにぎつとんねん。無茶なことはいしてこうへんわ。二三週間どっかに身隠したらしまいや」
「むちゃくちゃやな……」

「お前。ほんなら俺の新車どうないしてくれるねん！」
ヤクザが開き直った。

「自分の金で買おたらええでしょう。欲張りな人やなあ」

「誰がレクサス廃車にした思とんじゃ！」とまた腕が伸びてきた。
行き先を目で追うと、今回は肩を殴られた。

「次はベンツのSクラスにでもするかあ」

「左ハンドルは嫌言うてましたやん」

「お前が運転するから関係ない」

これからもずっとこの関係が続くことを暗示しているよう嬉しかった。

「ほんならカーナビ付けて下さいよ？」

「当然じゃボケ。ベンツの助手席で俺にアトラス持たす気か。」

カーナビだけやのうて、スモークも全面に貼った。何してても外から見えへんようにな」

「あ、それセクハラや。はい。一万円下さい」と運転席に手を差し出すと、「変な制度作るな」と思いつきり掌を叩かれた。

どこに向かっているのかと置いていたら、しばらくすると九鬼のマンションの駐車場に着いた。

しばらくどこかに身を隠すために部屋に荷物を取りに行くらしい。
後部座席下の紙袋に身体を伸ばし、札束をいくつか取り出して、

九鬼は車を降りていった。

鳴砂も降りて愛車の前に回りこむ。

改めて見ると、ひどい凹みようだ。

溜め息をついてから近くのコンビニに歩き、適当に買い物をした。
しばらく身を隠すと言っても、特に部屋に取りに帰るほどの物は

無い。それに逃げるなら早い方がいいに決まっている。もう島田組の追っ手が動き出しているかもしれない。

鳴砂はペットボトルの烏龍茶と弁当を二つずつと、携帯の充電器を買った。服と下着はまたどこかで買えばいい。

車に戻ると、既に九鬼が助手席に乗って待っていた。

運転席に乗り込む。

「九鬼さん、一応お茶と弁当だけ……」言いかけて、目線を止める。

「それ……ユウコさんですか？」

男の左目の下。頬骨の辺りに赤黒い打撲痕が這っている。

「おお。別れてくれと言ったら、やられた。まあ金渡したら機嫌よく納得してくれたけどな」

目線を合わさず九鬼が言う。

「……」

安心して下さい。俺の時は殴らんと、お金だけもらいますから」

「殴られたんと違う。蹴られたんや……踵落とし。あいつ空手の有段者やねん」

光景を想像するだけで笑いが込上げる。

「べつに別れてくれんでもよかったのに。俺そういうのには、こだわらへんし」

「放つといってくれ。俺はお前ほど器用と違うんや」

鼻で笑って顔を背ける男が何とも愛おしく思えた。

「まあ……そういうところも、好きやけど……」

そう呟き、エンジンをかけた。

九鬼が驚いた表情で鳴砂を睨みつける。その耳が真っ赤だ。

「なんですか？ 好きなもん好きやと言っただけですけど」

男はまた失笑して顔を背ける。首筋まで赤い。

大きな国道に出てダッシュボードを見ると、時計は真夜中の三時半を表示していた。

車は少ない。

「どこに逃げます？」

「せやなあ。どこでもええけど、お前どっか行きたい所あるか？」
数ヶ月前なら間違えなく東京と答えていた。

そう答えさせないところが、この男に惚れている証拠でもある。

「別にないです。九鬼さんと一緒やったらどこでもいい」

「お前さつきからちよいちよいさういう事言っけど、こっちが恥ずかしなるからやめろ」

「ええやないですかあ。」

大好きです。愛してる。アイラブユー。ウォーアイニー。サランヘヨ。ジューチーム。イッヒリーベディッヒ。クレイグブラゼル」

「おい。最後のん、阪神の内野手ちゃうんか」

「エジプト語です」

「嘘やろ」

「嘘です。……痛っ——」

右の二の腕をさすりながら、道路標示にしたがって高速の入り口に向かう。

「とりあえず、どこかパツと明るい所がええのお」

「ええですねえ。行っちゃいます？　パツと明るい所……」

そう言っで鳴砂が笑顔で隣を振り向くと、九鬼も笑っている。
何故か楽しくてしかたない。

高速の入り口横の脇道でUターンをする。

華々しい人生の門出から数ヶ月。

大切な愛車のバンパーは凹み、金も東京行きの計画も失った。

浮かれヤクザの運転手、兼恋人。

今までとはあまり変わらないはずの境遇が、何故かこれまでに無く愛しいと気付く。

百年に一度の大恋愛より楽しい日常。

フロントが潰れたカマロが、軽快にエンジンの唸りを一段上げる。道の先が僅かに白む夜明け前。

あ——あ。もうせんと決めてたのになあ——。

そう思いながら、ここ五年で三度目。また百年に一度の恋に落ちていく。

車内恋愛（後書き）

ε - d (- - -) フィー 今日 は ぬるぬる な 内容 で し た ね。

ついに明日完結です。 明日も恐らく前書きに同じ警告を載せます

(- - - ;)

あつ！そういえば、リニューアルしてから登録しないとコメント
が入れれない設定に変わっているとか……。以前ここからブログの
方に飛んでコメント残して下さった方に教えて頂きました。なかな
かBL書きには厳しい時代になったもんです(- 'ω、 -) シュン
作者にコメント等ありましたら、拍手のコメント機能でも使って
やって下さいませ、中傷以外なら大歓迎です。ペコ 今更ですけ
どね。

では明日ヴァ——ゞ(- 'ー、) ノ——イ！！

できん相談 笑えん冗談（前書き）

【注意：B L要素の性描写が含まれます。 苦手な方・15歳未満の方・義務教育中の方はご遠慮ください】

できん相談 笑えん冗談

タツノが応接セットの革張りに身体をうずめて一服していると、事務所のドアが開いた。

パーテーションから顔を覗かせて入り口を見ると、部屋に入ってきたのはジャージ姿に便所サンダルを見るからに筋者の男と、その男の前に立つ怯えた表情の少年だった。

少年はタツノの顔を見つけると「あつ……」と声を漏らし、駆け寄って来た。

「ちいちゃんお帰り。どやった？ 学校は。楽しかったか？」
優しく言ってから細い腰に手を回し、チヒロを膝の上に座らせる。

「う……うん」と戸惑いがちにチヒロは頷き、デスクに座る数人の男達の目を気にしながら、タツノの二の腕に手を回した。

その細い手首には二周以上もサイズの大きいクロノグラフが巻き付いている。何かに強く擦り付けたようにシルバーのメッキが所々はげて、文字盤を覆うガラスに亀裂が這う。それでも秒針は軽快に円盤を刻み、フレームに彫られた天使の羽は鈍く柔らかな光を放っていた。

「ね、ねえ。タツノさん……」

タツノの耳元に口を寄せて、内緒話をするように少年は声を潜める。

「なんや？」

「ここって、あの……。本当に、普通の会社……？」

「せやで。ただの経営コンサルタントの会社」

「そ、そうだよね……。タツノさん、普通のサラリーマンだもんね。」

……ごめんなさい。変なこと聞いて……」

チヒロは自分に納得させるように頷きながら、パーティーシヨンの向こうをチラチラと気にする。

チヒロの頭に手をやってサラリとした子供のような感触の髪を撫で、前髪、耳と伝い、頬から小さなつくりの唇を親指の腹でなぞる。柔らかな感触を楽しみ、幽霊では無いことを確認する。

チヒロを定時制高校から連れ出し、シビックに乗せて走りだした日からちょうど一週間。少年の記憶はまだ戻らない。

身を寄せていた祖父母の家に叔父から電話が入り、もう帰ってきても大丈夫だとだけ伝えられた。

もう見ることもないだろうと思って飛び出た町に、結局丸二日で舞い戻ることになったのだ。

身の周りの安全を確認するためにチヒロと二人でホテルに泊まり、タツノはそこから事務所へ通い、チヒロは定時制の高校通った。生活圏内に不審な人物の動きは見られず安全と判断したので、今日の午後にホテルをチェックアウトし、チヒロを事務所に連れてくるよう学校に迎えを送った。

「ちいちゃんは今晩は何食べたい？ 寿司か？ 焼肉か？ ちいちゃんの食いたいもん何でも言い。何でも食わしたるから」

「何でも……いい。タツノさんと、一緒だったら……」

目を伏せ、口ごもりながら答える少年の返事があまりにも心に染みて、タツノは言葉を失った。

チヒロと二人で事務所を出て、馴染みの料亭で夕飯を食べてからタクシーでマンションへ向かう。

鍵を開けて一週間ぶりに部屋に上がった。

リビングへ入りソファアの隣に荷物を置くと、チヒロはドアの前で突っ立ち、ジッと何かを思い出そうとするように台所を見つめている。マンションのエントランスを入ってからチヒロの口数は少ない。目に入る全ての物に記憶の痕跡を探し、足を止める。

「部屋、案内したるわ。おいで」

白い手を取り、案内するには狭い室内を歩く。リビング、台所、ウォークインクローゼットと回り、洗面所に連れて行く。

「ここが洗面所でえ、ここが風呂。こっちがトイレや」

少年は初めて見るかのように、天井からぐるりとひと回り視線を走らせる。

最後に寝室に案内すると、チヒロは何も言わずに自らゆっくりと足を踏み入れた。ベッドに腰をかけて薄暗い部屋のなかを一望し、足元の薄い絨毯をジッと見下ろす。

しばらく動かないチヒロの様子を廊下から眺めていたタツノも、寝室へ入ってチヒロの隣に腰を下ろした。

「何か、思い出したか？」

言われてチヒロはキュッと眉を寄せる。それから寂しげな微笑をつくり首を横に振った。

「ごめんなさい……。思い出せそうんだけど……。なんか、うまく記憶が繋がらなくて。」

早く思い出せるといいのに……」

申し訳無さそうに言う少年をギュッと抱き締め、ベッドに横たわった。

「ええねん。無理して思い出そうとせんでいい。ちいちゃんが思い出したい時に思い出したらええ。」

記憶を失ったんも、身体の傷も全部俺のせいやねん。

チヒロが思い出して俺の事許してくれるまで、いつまでも俺待ってるから」

残念ながら、この場所にはチヒロに思い出して欲しいと思えるような思い出は何一つ無い。

それでもいつか、その事をチヒロが思い出す時がくれば、改めてちゃんと謝りたいとタツノは思っていた。その時に許してもらえくらい今からチヒロを幸せにして、楽しい思い出を上書きしていうと決めていた。

チヒロの身体には傷がある。小さいものは殆んど消えているが、一生消えないような縫い痕が右肩と左のふくらはぎに残っている。自分が少年に与えたショックの大きさを物語っていた。もつと言えば、身体だけではなく、少年の内面にも消えない傷を付けてしまっている。忘れたほうが楽だと記憶を手放す程の大きな傷跡を。それも全て自分のせいだとタツノは自覚する。その罪を償うチャンスを与えられたのは奇跡だった。

ほんまに俺はついてる。やっぱり神様おりよんなあ――。

寝転がったまま、きつく抱いていた少年の身体がもぞもぞと動き、背中に回っていた細い腕が二人の間の隙間に引っ込む。

タツノが覗き込むとチヒロは顔を上げ、おもむろにタツノの腕を取った。

チヒロは細い手首に回っていた腕時計を外し、ゆっくりとタツノの腕にそれを巻く。

パチリとバックルを止めると、傷だらけのクロノグラフがぴったりと空いていた隙間を埋めて、またタツノの時間を刻み始めた。

「あ……やっぱり。……ぴったりだ……」

チヒロが小さく独り言を呟く。

「記憶は無かったけど……僕、分かって、ました。……この腕時計を、くれた人が、絶対に、迎えに来てくれるって……素敵な、王子様みたいな人が、絶対、来てくれるって分かってた……」

やっぱり、タツノさんだったんだ……。う、嬉しい……。だって……夢で見てた、通りだったから……」

はにかみながら俯き、潤んだ大きな瞳が上目遣いにタツノを捉えると、その透き通った漆黒が恥じらいを隠すように揺れ動く。薄暗い中でもわかるくらいに頬と目尻、耳、首筋までもを朱に染めて、少年はギュッとタツノの胸元に顔をうずめた。

王子様という言葉が出たことにタツノは苦笑いし、チヒロの頭にそっと手を置く。

チヒロが言う王子様は、残念なことに前科ありの下っ端ヤクザで、白馬は人から無理矢理に奪ったタイプRのシビックだったが、タツノにとってチヒロがかけがえの無い唯一の愛嬢であることには間違い。ガラスの靴は二十五万のクロノグラフに翻訳されたが、二人の絆を辛うじて繋ぎとめていてくれた。

不意に顔を離れたチヒロの表情を覗き込むと、震える小さな唇を僅かに突き出し、ギュッと目を閉じたまま真っ赤になって顔をこちらに向けている。

子供のようなキスの強請り方が、あまりにも愛らしい。

ゆっくりと触れるだけの口付けを柔らかい温もりに落とすと、硬直していた小さな身体からフツと力が抜けるのが分かった。

しばらく感触を楽しむようにやんわりと唇を押し付けて動かしていると、徐々に少年の身体が発熱していく。

タツノのを迎え入れるように、薄い唇が隙間を開けた。

狭い口腔内を触手で隅々まで堪能し、粘膜を絡み合わせる。止め

処なく少年の口内に湧き出す液体をすくい取っていると、いつのまにか薄い高温の舌がタツノの口の中で波打っていた。

薄目で顔の前の表情を確認する。気持ち良さそうに目を閉じ、陶醉しきっている綺麗な顔。

タツノが身を引いてゆつくりと仰向けになると、移動する口に吸いつけられるようにチヒロはまた唇を重ねてくる。ミルクを求める子犬のように上半身をタツノの上に重ねて、またキスに没頭する。

おそらくこの体勢を十分以上は維持するのだ。

記憶の無いチヒロがこんなにも自分を受け入れてくれたのは、タツノにとっては驚きだった。

最初に定時制の高校でチヒロをつかまえて土下座で拝み倒して車に乗せた時は、思い余って激しく唇を重ねていた。チヒロはそれを拒まず、タツノが抱き締めたりして身体に触れる事も許してくれた。チヒロを傷付けることはしたくなかったので、触れるだけのキスで我慢したが、そのうちチヒロの方から口付けを強請ってくるようになった。少しずつ深まるキスは、日を追うごとに時間を増した。

五分、十分、十五分。激しさの無い、ゆるゆるとした行為。

腹の下から湧き出してくる欲望を抑えようと焦るタツノとは裏腹に、チヒロは気持ち良さそうにそのままの体勢で寝てしまうことさえある。

今回もチヒロがこのまま寝そうだと判断したタツノは、小さな熱い頬を両手で包み、優しく顔から引き剥がした。

「あつ……」と少年の口から漏れる、名残惜しそうな声。

「なあ、ちいちゃん。俺とキスするん、そんなに好き？」

チヒロは少し驚いた顔をしたが、火照った顔で気恥ずかしそうに

頷く。

「す、好き…… タツノさんと、チューするの…… すごく……」
「なんで？」

「なんでって…… だって。だって、あの…… すごく、つながって、
いられるから……」

チヒロは落ち着かない様子で瞳を泳がせる。

「ちいちゃん、俺ともっと繋がりたいって思う？」

「もっ、と……？」

「うん。もっと」

意味が理解できない表情のままチヒロは少し考えて、コクリと頭を縦に振った。

タツノの上に乗っていたチヒロの上半身を包み込み、身体を回転させて少年を組み敷く。

少し怯える顔を安心させるために、また唇を重ねる。少しでも少年の欲望を掻き出そうと舌を大きく動かし、ガラス細工に触れるように服の上から薄い肌を優しく撫でた。

最初は強張っていた小さな身体が少しずつ溶け、熱を持ち始める。熱を逃がす目的にかこつけて服を剥ぎ、暗い中で発光するほどに白い皮膚に手を這わす。

花に例えるならすずらん。

絵画なら水彩画。

季節なら冬と春の間。

どこか尊い少年の肌は、触れるだけで音がしそうな程、薄く透き通っている

「ッあ！ やっ…… ダ、ダメえ。タツノさん……？ そんなとこ、
触らないで……。汚い、から……」

そう言って自分の手の甲に重なる小さな掌を、顔の横に押さえ

つけた。

「チヒロ……大丈夫やから」

優しく耳元で囁いて安心させて、また続きを始める。

たじろぐチヒロをキスでなだめては、行為を進める。それを繰り返して、やっと少年の身体を開くことができた。

既に、制止を要求していた細い声が艶のある吐息に変わっている。きしゃな身体が熱に浮かされ、薄い胸板を上下させて放熱を繰り返す。

自分の背中が汗ばんできたのを感じ、幼い裸体に馬乗りになったままタツノもＹシャツを脱いだ。

スラックスと下着をまとめて脱ぐと、明らかにチヒロが動揺し始める。

「タ、タツノさん……？」

「なに？」

「えっと……あ、あの……、その……もしかして、それ……入れる？」

チヒロはタツノの下から抜け出し、両膝を立てて枕元に身体を丸めた。

「大丈夫やって……絶対痛くしいへんから」

「でも……あの……たぶん、無理だと思うよ……」

それが無理でないことを、一度力づくで実証した事がある。

それからまた、何度も何度もキスでなだめつつ、チヒロと身体を繋げていく。

「っんう……んんッ……あ、あ、やアッ……うん」

「痛いかな？」

嬌声を抑えようと口の前にかざしたチヒロの手をつかみ、指を絡ませ枕元に押さえつける。

少年はグツと何かに耐えるように目を閉じ、首を横に振った。

「チヒロ。ほら……ちゃんと繋がってるやろ？」

細い足を大きく割り開いて腰を上げると、チヒロの視線が一点に釘付けになる。

「ッやあ……！ あん……やめてえ……恥ずかしい、から……ああ、あつ……」

それからは、我慢できずに漏れ出すチヒロの声で部屋中が甘い空気で膨れ上がった。

「ああ、ん……っ……だ、だめえ……とめてえ……おか、しい……から、身体……」

「ああ……チヒロ……好きやで……！……チヒロ」

「うんっ……た、タツノ、さ……っ、いつかい、とめ……下さ……」

ああアッ、んうっ……何か、出っ……出ちゃっ……ッああ、ああアッ……！」

布団の中で、熱の引いた柔らかな頬に触れていると、水気を含んだままの睫毛が動き、パチリと潤んだ漆黒が見開かれる。

タツノの意識を吸い込む大きな瞳が一二度瞬きをして、覚醒した。

「ごめん。起こしてしまたな……身体……大丈夫かな？」

夢から現実に舞い戻った天使のような顔が頷く。

「ごめんなあ。俺、ちよつと余裕無くし過ぎた……」

そう言っって小さな身体をギュッと抱きしめる。

「嬉しかった、です……タツノさんと、繋がれて……」

「俺もや。これからずっと一緒におるな。」

毎日一緒に飯食うて、一緒に風呂入って、ここで一緒に寝るんやで」

チヒロはまた目尻を火照らせ、はにかんで頷く。
可愛い。なんでこんなに可愛いんや——。

力いっぱい抱き込み、小さな耳に直接吹き込む。

「チヒロ……好きやで……もう絶対——」離せへんと言ったところで、携帯が鳴り響いた。

なんやねん。こんな時に——。

しばらく放っておいたが鳴り止まず、チヒロが気にしだしたので仕方なく起き上がり、ベッド下に落とした服を拾い上げる。

携帯を探り出し表示を見ると、知らない番号からだ。

「もしもし？」

『お——、タツノか』

懐かしい叔父の声だった。

勢い良く起き上がる。

「叔父貴っ！？ 今何処におんねん！ 一週間も音沙汰無しで！」

『悪い悪い。ちょっとした小旅行やあ』

全く悪いとは思っていない機嫌の良さで笑う。

「小旅行で……。はよ帰って来てくれ！ こっちは事務所しきる人間がおらんから大変やねん！」

「なんやねん、あれくらいの人数お前がまとめんかい」

「何勝手な事言うてんねん！ アホと違うか」

「お前なんや、その口の利き方は……。誰のおかげで事務所に帰ってこれたと思とんじゃボケ。」

まあええ。今日は機嫌がええから許したろ
それより、あんまり大きい声だすな。サリナが起きるやろ」

「誰やねん、サリナって。何でこの忙しい時に、女連れて旅行なんかしてるんや」

「まあそう言うな。さっきまでええ声で鳴いてたから疲れて隣で寝とんねん」

「いや知らんがな。もうとにかく何でもいいから、はよ帰ってきてくれ！」

「お前こついう時くらい根性出せよ。」

帰ったら車の一台くらいは買つたるやないか。今日は持ち金が倍になったからなあ」

「はあ？ 車よりも、俺は叔父貴に早く帰って来て欲しいんや。」

明後日には頭が東京行くねんぞ？ 叔父貴がおらなどないすねん！」

「お前が代わりに付いて行け」

「アホぬかせ！」

もうええから、明後日までには絶対帰って来てやあ」

「タツノ。それは、できん相談やなあ……」

俺、今ラスベガスのベラージオに泊まってんねん。明後日には、モナコの上空や」

「…………叔父貴…………。」

それは……、笑えん「冗談やわ……」

「完」

できん相談 笑えん冗談（後書き）

改めまして最後まで読んで下さった皆様ありがとうございました m
(――) m

思いの他、沢山の方に閲覧して頂きました♪

おかげさまで最後まで書ききる事ができました。読者様が思ってたっしやる以上に、拍手や閲覧者数が作者にとっては励みになります。本当にこれのために頑張った言っても過言ではありません！！

明るい内容であったことや、使い慣れた関西弁を使用したこと、大したコンセプトを作らなかったこと、何よりも10月中の完結が前提だったので、とにかくあまりストーリーを練り過ぎないようにしたこと（私の場合ストーリー内容を練れば練るほど長引くので……）。以上の理由から、気軽に楽しく書けたストーリーでもありました。

面白かったという拍手コメントを沢山頂けたのは、自分が楽しく書いたからなのかなと嬉しく思っている次第です。やっぱり書いている方の気分というのは読者様に伝わるのだと、改めて実感いたしました。

最終話が気に入らなかったのですが、自分の文章をもう一度読み直すの何より嫌なので、まあ次から頑張ろうと、既に前向きです（――、；） 一箇所文を追加すると言っていた所も、まだ修正できていませんのが、これもまあ、読み直す勇気が出ればって事で……ほんとダメダメな私……。

具体的な内容について言いますと、自分の性格が歪んでいるせいか、相変わらず登場する人物みんなが一癖二癖もあり、なかなか純

粹な登場人物というのがいません……。人様のBL小説を読んでいても、一番懂れる所はそこです。ああ、ピュアっていいよねピュアラブ万歳と思って、いざ自分の小説で純粹少年を書いてみると薬物ジャンキーになってしまったりするわけです（´<>´）
エヘ

小説内の会話につきましては、関西人のつまらん日常というのはあんなアホみたいな会話の連続です（うちの周りだけかもしれませんが）。文章にしてそだけ取り出してみると面白いかもしれません。文章が、毎日あだだと失笑しか出なくなります。テレビに向かってつこみを入れてみたり、うちの旦那のように親父ギャクを交えた自作の歌を口ずさみ出したら、もう末期症状だと思ってお気をつけ下さい。

反省点は山ほどあるのですが、相変わらず書き貯め出来ないことや、読み直しが不十分なのはもちろんですが、一番今回「ああ、あかなあ」と思ったのが視点について！ 途中「あれ？ これ何人称何視点？」ってなる時が多々あり、ちゃんと本読んで勉強せなあかんと思いました。――柱――（・・ω・・）

だから読み苦しい点が多くあったと思います……気休めかもしれませんが、次回連載までには一度キチンと学習したいと考えています。

という訳で、長々と言いつつ書きましたが（すみませ
ん……）

本当に、本当に、完結までお付き合い下さいますありがとうございます！！

心から感謝致しますm（――）m

（今後の予定につきましては、活動報告欄にアップさせて頂きます）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3484i/>

できん相談 笑えん冗談

2010年10月8日13時40分発行